
家族or兄妹orカップル？

kubo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家族or兄妹orカップル？

【Nコード】

N5468D

【作者名】

k u b o

【あらすじ】

伊集院聖慈は伊集院家3人兄妹の長男。聖慈を中心とした伊集院家の家族とのやりとりを書いています。時にほのぼの、時にシリアス、時に恋愛要素も入れればいいなあと思っています。

第一話 兄と妹

今1組の男女が向かいあっている。

「お前は俺が守る！命を懸けて」
「カット〜〜！」

その場に男の声が響き渡る。

その声を発した男が二人に歩み寄ってくる。
この現場の監督だ。

「いい演技だったよ、雫さん」
「ありがとうございます」
「それに比べて・・・」

監督は男に冷たい視線を送る。

男の名前は伊集院聖慈、17歳だ。
7歳のときから芸能界が働いている。
働きだした当時は人気子役として人気がでたが段々下降気味である。

「す・・・すいません」
「しっかりしてくれないと困るよ、聖慈さん」
「雫さんより7つも年上なんだから」
「は・・・はい」
「これは主演を優慈さんに変えたほうがいいかな」

優慈というのは最近人気の若手俳優だ。
そして世間には知られていないが聖慈の3つ離れた弟でもある。

「え、ほんとに頑張りますから勘弁してください」

「それなら態度で答えてほしいな」

「は・・・はい」

「明日は10時から撮影だからな、遅刻すんなよ」

監督はそういつて離れていった。

一気にどつと疲れが体に襲ってきた。

肉体的な疲れよりも精神的な疲れだが...

「はあ~~~~」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

「雫・・・現場ではそう呼ぶなってるだろう」

「いいじゃない。誰も聞いてないんだから」

共演者の雫は優慈と同じく聖慈の妹だ。

彼女は優慈と同時期にデビューした人気のアイドルだ。

彼女と優慈は聖慈の現場に遊びに来てたところをスカウトされた。

両親も何も言わずに自由にさせてくれた。

「そりゃそうだけど・・・」

「どうしたの？」

「べつに・・・」

「嘘ばかり。いつもの元気はないじゃない」

「そんなことはないよ」

「嘘よ」

「そんなことないっていつてるだろ!!」

「そんなに怒らないでよ」

聖慈は話を終わらせようと現場から控え室に戻ろうと早足で歩き出した。

その後ろを雫が小走りでついてくる。

「で、なんでついてくるんだ？」

「雫、今日お兄ちゃんの家泊まるよ」

「はあ？なに言ってるんだ」

聖慈は16歳の頃から一人暮らしをしている。

理由としては家では自分の時間を持ってないという理由で、両親に説明したが優慈と雫に比べて仕事が少ないので家にあまりいたくないのだ。

「だって今日優慈お兄ちゃんと二人つきりなんだもん」

「じゃあ、俺とだったら二人つきりでもいいのか？」

「うん。べつにいいよ。だって優慈兄ちゃん変な目で見てくるんだもん」

聖慈は歩くのを止めた。

自分の弟が実の妹に変な誤解を持たれてるらしい…
もう一度聞きなおしてみた。

「どんな目だった？」

「いやらしい目」

やはり聞き間違いではないらしい…

まったく優慈は何をしてるのやら…

別に無理に帰そうともしないのが聖慈の優しさなのかただ妹に甘いだけなのかは分からない。

「まあ、部屋はいっぱいあるし、いっか」

「ありがと」

「じゃあなんかコンビニで買ってくるから先に家帰ってる」

「じゃあ雫が作ってあげるよ」

「え、お前料理作れんの？」

「もちろん！」

聖慈は本気で驚いている。

17になる自分は料理ができないというのに10歳の妹が料理ができるというのだ。

しかも、雫の顔を見ると自信満々という顔をしている。

「ふ〜ん、まあ期待しないでまってるよ」

「あゝ、ひど〜い。雫のこと信じてないなあ？」

「信じてる信じてる」

「ならよし」

二人は聖慈の部屋に向けて歩き出した。

第二話 妹の一面

二人は聖慈の住んでいるマンションに着いた。
聖慈の住んでいるマンションは3Fだてのマンションで聖慈の部屋は2Fの壁際にある。

「うつわゝ、きたなゝい」

「しかたないだろ。そんな暇ないんだから」

雫は聖慈の部屋に入るとすぐに顔をしかめた。

一応眠る場所だけは確保してあるが汚いのは確かだ。

聖慈は元々綺麗好きな性格だがそんな気も起こらないほど毎日疲れてるのだろう。

「雫がやってあげるよ」

「いいよ。自分でやるよ」

「いいから先に材料買ってきてよ。冷蔵庫の中身空っぽなんだもの」
「もう一週間ぐらいかえってないからな」

雫は冷蔵庫の中を見ながら言った。

聖慈の冷蔵庫の中にはお茶類しか入ってなくこれではさすがにどの料理人でも料理を作ることができない。

聖慈はこの一週間、ドラマのロケ等の打ち合わせなどもあり家には帰らずロケ現場の近くに住んでいる他の人の家に泊まりこんでいた。近いのと料理をしなくていいという二つの点から聖慈はその選択肢を選んだ。

「その間雫が掃除しててあげるから」

「しかたないなあ」

聖慈は近くのスーパーに雫に頼まれた材料を買いにいった。スーパーまでは片道5分と近場だが聖慈はあまりスーパーに買いにいくことがなかった。

自炊をしないので帰り道のコンビニで弁当を買うからだ。

聖慈は雫に頼まれた材料のメモを片手にスーパーの中を歩き回った。普段使用しないのでどこに何があるか分からずあっちこっちを歩き回らないと材料を集められなかった。

聖慈がやっと全ての材料を買って部屋に着くと雫の手によって別の部屋のようになった聖慈の部屋が出迎えた。

「あ、お兄ちゃんお帰り」

「うつわ、お前そういうところはしっかりしてるなあ」

「えっへん」

「お前が家にいたら助かるんだけどなあ」

「え・・・」

雫は床に落ちてる服をきちんとたたみ、本も本棚にアイウエオ順にならべていた。

ここまで綺麗にしていると聖慈も思っていなかったので驚いてた。

「こういう家政婦でもいたらなあ」と思ってた声に出しただけで特に深い意味はないのだが雫の反応がおかしかった。が雫を気にするよりも自分の腹の減り具合のほうが勝った聖慈は雫に材料を渡した。

「腹減った。早く飯」

「あ、うん。ちよつとまってるね」

雫は台所に材料を持って料理の仕度をはじめた。

聖慈は雫の後姿と自分の部屋の変わり具合をみて自分の妹の意外な一面を発見した気がした。

(震こついう家庭的なところがあるんだな)

第三話 兄の部屋

雫が食事の仕度をしてる間聖慈は居間に寝転がってTVを見ている。その姿はすでおっさんである。

するとTVの音とは違う唸る音がテーブルから聞こえた。

テーブルの方を見ると雫の携帯が震えていた。

ディスプレイには『優慈兄ちゃん』と書いてあるので掛けてきた相手はどうやら優慈らしい。

「雫、携帯がなってるぞ。優慈から」

「え、いま手が離せないからお兄ちゃんでて」

雫のほうをみるとそんなに忙しい風には見えないので忙しいというよりも出たくないというのが正解のようだ。

先ほどのやりとりを見ても雫が今優慈と関わりたくないのが分かる。仕方なく聖慈は電話に出ることにした。

「やれやれ、もしもし」

「え、兄貴・・・なんで雫の携帯から兄貴が？」

「あ？雫が俺ちで泊まるっていうからいま飯作ってもらってるんだよ」

「え・・・そう、わかった」

そついうと優慈は電話を切った。

「なんだあいつ？」

電話が終わったのを確認してから雫が心配な顔をして聖慈に近づいてきた。

やはり忙しくて手が離せないというのは嘘だったようだ。

「お兄ちゃん？優慈兄ちゃんなんて？」

「しらねえ。すぐにきつたからよくわかんねえ」

「そう・・・」

「それよりも飯まだか」

「もうすこしだからちよっとまってて」

「やれやれ」

雫が台所に向かったのを確認して聖慈はまたTVを見だした。

聖慈がTVを見始めて10分ぐらいたってから雫が料理を持ってテーブルに近づいてきた。

どうやらメニューはオムライスのようだ。

「はーい、おまたせ」

「遅いんだよ」

「なに、その態度」

「いいからはやくよこせよ」

「はい、どうぞ」

聖慈は雫が作った手料理を口に含んだ。

かなりおいしい...

味が母親の味に似ているので家で母親に教わってるのだろう。

10歳が作ったとは思えないほどおいしかった。

「どう、雫の手料理？」

「うん、まあまあかな」

「え・・・」

正直言っておいしいのだが聖慈はからかうつもりで『まあまあ』と

答えたのだが雫は本気に思ったらしくかなりショックを受けている。聖慈は慌ててフォローをした。

「うそうそ。かなりうまい」

「ほんとに？」

「ほんとほんと」

雫は少しの間、聖慈の顔をじっと見ている。

まだ、疑っているようだ。

だが、聖慈の手が止まらないところを見て安心したように自分も食べ始めた。

その姿を見て聖慈は笑みを浮かべた。

「ああーうまかった」

「久しぶりに家庭の味を食ったな」

「じゃあ風呂沸かしてるから風呂はいつてきていいわよ」

「じゃあお先に」

雫が洗い物をしている間に聖慈は風呂に入った。

一体いつの間に風呂を沸かしたのか全然気が付かなかった。

聖慈が買い物に行ったときにはまだ風呂を沸かしていなかったので食事の間に沸かしたのだろう。

聖慈はTVを見ていた自分が恥ずかしかった。

「ああー、いい湯だった」

「じゃあ雫入るね」

雫が風呂に入ったので聖慈は雫の寝床を作ることにした。

聖慈の部屋は聖慈が普段寝ている部屋と先ほど料理を食べた部屋、それに加えて友人達が来たときに泊まれるような部屋がもう一部屋

あるのでそこに雫の布団を敷くことにした。

雫が風呂からあがってきたので聖慈はその部屋に雫を連れて行った。

「雫はこの部屋使えよ」

「え・・・」

「どうした」

雫が少し寂しそうな顔をしたので聖慈は聞いてみた。

「お兄ちゃんと同じ部屋がいい」

「だってベッドひとつしかねえぞ」

「そう・・・」

さらに雫が寂しそうな顔をしたので聖慈はため息をついた。

確かに雫は10歳だが家ではもう一人で寝ている。

一体何が寂しいのかは知らないが普段一緒に寝てやる機会が減っているのは確かなので雫の願いを聞いてやることにした。

「・・・じゃあお前俺のベッド使えよ。俺床で寝るから」

「え、いいの？」

「仕方ないだろ。お前がわがままいうから」

「ごめんね」

「さ、早く寝るぞ」

聖慈はそういつてこの部屋に敷いてある布団を自分の部屋に敷きなおした。

それから聖慈は布団に入った。17歳が寝るには少し早いが10歳の雫には遅い。

雫に合わせて聖慈ももう寝ることにした。

雫は聖慈のベッドにうれしそうにもぐりこんで聖慈のほうを見てい

る。

聖慈は雫の視線に気がついていて目がつぶって寝ようとした。5分ぐらいしてから寢息が聞こえたので雫のほうを見てみるとすでに雫は幸せそうな顔をして夢の中に入っている。

聖慈はその顔を見て笑みを浮かべて聖慈も睡眠をとった。

朝、7時ごろに聖慈は目が覚めた。

『何故自分が床で寝ているのか』

最初疑問に思った聖慈だが昨日雫が泊まったことを思い出した。雫が眠っていた自分のベッドを見てみるとすでもぬけの殻だった。

「あれ、雫？」

聖慈はとりあえずリビングのほうに出てみた。

すると雫がすでに食事の仕度をしていた。

扉の音に気づいたのか雫が聖慈のほうを向いた。

「あ、お兄ちゃん。おはよう」

「お、朝飯か」

「うん。味噌汁はおにいちちゃんの好きな豆腐だよ」

「お。やったー」

「さ、早く食べて準備して」

「ゆっくり食べさせろよ」

「もうそんな時間はないわよ」

確かにゆっくりする時間はない。

二人はすぐに食事をして家をでた。

第四話 兄と弟と妹

ロケ現場の近くで聖慈のマネージャーと雫のマネージャーと合流した。

この二人のマネージャーは聖慈と優慈と雫が兄妹ということを知っている数少ない業界の人たちだ。

四人が現場に着いたときスタッフがざわざわ騒いでいた。

聖慈と雫は顔を見合わせた。二人のマネージャーも何も聞かされていないようだ。

とりあえず聖慈が近くのスタッフに何かあったのか聞こうとしたら現場に監督の声が響いた。

「今日から主演変わります」

「え……」

「お、聖慈さん……」

「主演の優慈さんです」

聖慈も雫も二人のマネージャーも何も聞いていないので呆然としている。

しかも、自分の代役が優慈だ。

聖慈はすぐに監督にかけよった。

「ちょっと待ってください。何ですか？」

「優慈さんから頼まれたら断るわけにはいかんだろ。だから君はクビっていうこと」

監督は聖慈から離れていった。

スタッフも皆聖慈に哀れみの目を向けるだけで反論しない。

雫やマネージャーが何か言ってるが無視してよろよろと現場を後に

した。

現場では監督の声が響いている。

「じゃあ撮影開始します」

「ちょっと待ってください」

雫は監督に駆け寄った。

その顔には怒りの表情が浮かんでいる。

「どうしました？雫さん」

「相手が変わるなら私は辞退します。私は聖慈さんだからお受けしたんです」

「でもね、雫さん。もう時代は聖慈さんより優慈さんなんですよ。優慈さんの方が視聴率も取れますし・・・」

「それでも私は聖慈さんのほうがいいんです」

「失礼します」

雫は聖慈を追って現場から立ち去った。

それを見ていた優慈も雫を追っていった。

雫のマネージャーは顔を抑えているがこうなるだろうとは思っていた。

雫がこの仕事を引き受けたのは聖慈と競演するからだ。

確かにこの仕事の内容は良い。だが普段会うことのない兄に会えるので引き受けた感もある。

聖慈のマネージャーと雫のマネージャーは顔を見合わせて苦笑し、監督の所に向かった。

「雫！ちょっと待ってって」

優慈は雫の手を捕まえた。

「優慈兄ちゃん。何？」

「何ってことはないだろ！なんで辞退なんかするんだよ！」

「私は聖慈兄ちゃんだからこの仕事うけたんだよ」

「だからってなんで断るんだよ！なんで兄貴なら良くて俺じゃあ駄目なんだよ！」

「どうしても！もうほつといてよ」

「雫・・・」

雫はまた走り出した。

優慈はその後ろ姿を見て壁を殴りつけた。

「お兄ちゃん！」

雫は聖慈の後姿を見つけて叫んだ。

「雫！？お前撮影は？」

聖慈は雫の姿を見て驚いている。

撮影中のはずの雫がここにいるのだ。驚くのも無理はないだろう。雫の息が整うのを待って答えを聞き出した。

「断ってきた」

「え、なんで？」

「相手が変わったから」

「だからって・・・」

聖慈は雫がこの仕事をもらったときにすごい喜んでいたのを覚えている。

だから共演者が優慈に変わったからといって断るとは思っていなかったのだ。

「お前この仕事決まったときスツゴク喜んでたじゃないか。今ならまだ間に合うから現場に戻って監督に謝って来いよ」

「嫌！」

「何で！」

「実際思ったより面白くなかったし……。それに……」

「それになんだよ！」

雫は聖慈の顔を見ている。

聖慈は雫を現場に戻そうとするが雫は戻ろうとはしない。

聖慈は雫に断った理由を聞き出そうとするが雫は答えようとはしない。

1分ぐらいにらめつけた後、雫が聖慈の3歩前に出て振り返った。

「もういいの」

「さ、早く帰ろ？」

雫の顔には後悔の表情は無く満面の笑みを浮かべている。

聖慈は雫の顔を見て説得するのを諦めた。

雫は顔に似合わず頑固な面も持っているのだからこうなったらどこでも意見を変えないのが雫だ。

聖慈はため息をついて、雫に聞いてみた。

「帰ろってどこに？」

「もちろんお兄ちゃんの部屋」

「また俺の部屋に来るきか？」

「いいじゃない。駄目？」

当然のごとく答えた雫。

『一泊だけではなかったのか？』と思ったが言わないことにした。

「親父やお袋には聞いたのか？」

「ただだけ雫がいたほうがいいでしょ？」

「どうせ、お兄ちゃん彼女いないんでしょ？」

「別にいいじゃないか」

聖慈には確かに彼女はいない。

というよりも作る気がないのだ。

「雫、掃除もするし、洗濯もするし」

「それに・・・」

「それに？」

「優慈兄ちゃんと一緒の家にはいたくないの」

「まあ確かに雫がいたほうが助かるけど」

「でしょ？じゃあ決まりね」

「その前に親父やお袋に伝えとけよ」

「うん」

『やはり雫には甘いな』と自分に苦笑しながら聖慈は雫に手を引かれながら自分の部屋に帰っていった。

第四話 兄と弟と妹（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/inthisky>

第五話 兄の秘密

雫が聖慈の部屋に住むようになって一ヶ月たった。

聖慈は父親である伊集院章吾に実家に一人で呼び出された。

「ただいま」

「おお、聖慈。久しぶりじゃないか」

聖慈が玄関から入ると章吾が出迎えた。

どうやら母親は出かけてるらしい。

とりあえず聖慈は家にながってリビングに入った。

「呼び出したのはそっちだろ。いったい何のようだよ」

「ところで、雫は元気になっているか？」

「よくやってくれているよ。結構あいつ家庭的だな。いいお嫁さんになるよ、あいつは」

「そうか・・・」

やはり娘をほめられるのはまんざらでもないようで章吾は笑みを浮かべた。

だが、少ししてから迷ったような顔をした。

「何だよ。なんかあるのか？」

聖慈が聞くと章吾は少しためらったが決心したようで聖慈に向き合った。

「聖慈、お前は優慈や雫のことをどう思ってる？」

「どっつてどういことだよ」

「いいからどう思ってる」

聖慈は質問の意図が掴めなかった。

あれだけためらったのにいざ出てきた質問が『弟と妹』についてだ。何か意図があるのだろうけど分からないので聖慈は正直に答えた。

「普通に弟と妹と思ってるけど何でだよ」

「実を言うとお前はもともとこの家の子じゃないんだ」

「は！？意味わからねえよ！ちゃんと説明しろよ」

いきなり優慈と雫の話から自分がこの家の子供ではないと聞かされた聖慈は立ち上がって章吾に詰め寄った。

章吾に「落ち着け」といわれた聖慈は納得がいけないが椅子に座り章吾の話の続きを待った。

章吾は聖慈が落ち着いたのを見てから言葉を続けた。

「父さんと母さんは結婚してから10年間子供ができなかったんだ。そこである託児所にいって一人養子として家に引き取ってきたんだ」

「それが、俺・・・？」

「そういうことだ」

「そんなでまかせ信じられるか！」

「聖慈！聞き入れる！もうお前も今日で18だ。だから話した」

聖慈は自分がこの家の子ではないことにショックを隠しきれないようだ。

それもそうだろう。ずっと家族と思っていた人たちが血のつながりがないのだ。

聖慈はまだ納得できていないようだが優慈達はこのことを知ってるのかどうか章吾に問いかけてみた。

「優慈や雫は知ってるのか？」

「言えるわけないだろ。優慈はともかく雫はまだ10歳だしお前を本当の兄のように慕っているしな」

優慈と雫はどうやらまだ知らないらしい。

とりあえず優慈と雫は本当の兄妹ではない。

自分と雫は今一緒に暮らしてるが帰したほうがよさそうだ。

それに、あそこの部屋も借りる時に章吾の力を借りてるので自分で家を探さないといけないようだ。

とりあえず今の考えを章吾に伝えてみた。

「じゃあ雫は家に帰すよ。あの部屋ももう出て行く」

「いや、そんなことはしなくていい。お前にはあの二人のこれからも兄でいて欲しい」

聖慈は章吾の言葉を聞いて少し驚いた。

てつきり『もうこの家から出て行け』と言うつもりで伝えてきたのだとばかり思っていたが章吾が考えていた意図と自分が考えていた意図はどうやら違うらしい。

「いいのか？」

「ああ、かまわん。どうせ雫も帰る気はないだろ」

雫の話が出たので、聖慈は章吾に優慈と雫のことを話してみた。

何か章吾が知ってるかもしれないからだ。

「そういえば雫がいったぞ。優慈に変な目で見られるって」

「だから、雫をお前に任せるんだ。しっかり相談に乗ってやってくれ」

どうやら章吾は何も知らないようだ。
やはりいつか優慈本人に聞いてみないといけないようだ。

「お前には本当に悪いと思ってる。でも、お前にしか頼む奴はいないんだ。頼む、聖慈！」

章吾が聖慈に頭を下げている。

聖慈は今まで章吾が頭を下げているところを見たことが無かった。だから聖慈は戸惑ったが、すぐに自分の気持ちを章吾に伝えた。

「親父……。分かったよ。これからもあいつらの兄貴でいるよ。むしろいさせてくれ。血のつながりはないけどこれまであいつらの兄貴だったわけだし」

「聖慈……。ありがとう」

章吾は頭を上げて聖慈に顔を見せた。

章吾の顔には安心したような表情が見える。

目には少し涙が見える。

「いまさら他人行儀はやめてくれよ。俺は本当の親の顔を知らないけど、間違はなく親父・お袋の息子なんだから」

「そうか……。お前には本当に悪いと思ってる」

「もういいって。ところで、俺の生みの親って生きてるのか？」

聖慈は自分は章吾の息子だとしてこれからも生きていこうと決めていた。

それがいつまでかは分からない。優慈や雫にもこのことをいつか打ち明けないといけない。

そのときに二人に拒絶させられるかも知れない。そうなったら聖慈はこの家を出て行くつもりだ。

だが、何故聖慈が託児所にいたのかはまだ分かっていない。
生みの親が生きてるのかどうかはやはり気になるところだ。

「さあ、それは知らんが、この前お前のいた託児所に最後の成長記録を送ったけどそういう話題は出なかったし」

「成長記録？」

「ああ、その託児所の決まりで写真にとって送らなきゃいけないんだ」

「その写真を生みの親に送るらしいんだがその辺は教えてくれないからな」

「そつか。道端で生みの親とあったりしてな」

「そんなこともあるだろ」

「でも、そんな時はきちんといいさ。俺の親は親父とお袋だって」

「聖慈・・・」

聖慈のその言葉に章吾の目から涙が出てきた。

第五話 兄の秘密（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
is|sky

第六話 家族との食事

それから章吾と聖慈はこれからのことについて話し合った。優慈と雫に聖慈のことを話すのは聖慈のタイミングに任ずることになった。

章吾の口から話すよりも聖慈自身の口から話したほうがいいと章吾が言い、聖慈もそれを了承した。

それから普通の世間話、仕事のことや聖慈の家での雫のことなどを話していたら聖慈の携帯が鳴り響いた。

ディスプレイには『雫』と出ている。

「もしもし」

「あ、お兄ちゃん？ いまどこ？」

「今、実家」

「今日お兄ちゃんの誕生日でしょ？ 雫がごちそう作って待ってるから早く帰ってきてね」

「お前も今から実家に来いよ。最近忙しいから顔出してないんだろ？」

「そうだけど・・・」

「大丈夫だって。今日優慈ロケでどっか行ってるらしいから」

「じゃあ、今から行くね」

「ああ、じゃあな」

そういつて聖慈は電話を切った。

やはり雫がこっちに來たがらないのは優慈がいるからみたいだ。

「雫、なんだって？」

「ああ、俺が今日誕生日だからごちそう作って待ってるってさ。だから、お前も帰ってきてみんなで食おうぜっていうこと」

「で、雫は？」

「優慈はいないっていったら来るってさ」

「そうか。じゃあどっか外食するか？」

「そうだな。優慈には悪いけど行くか」

「俺が何だって？」

いきなり聖慈の後ろのドアが開いて優慈が顔を出した。

章吾から優慈は今日はロケで家には帰ってこないことを聞かされてただけに聖慈と章吾はかなり驚いている。

「優慈！？お前今日ロケじゃなかったのか？」

「むこうの不都合で延期だったさ」

優慈は椅子に座りながら答える。

椅子に座ってから優慈は聖慈に今の話を聞いた。

「で、俺に何が悪いって？」

「い、いや別に」

「ん、なんか隠してるな？」

「なんも隠してないって」

「そう。ならいいや」

そのとき玄関から物音が聞こえた。

母親は今旅行に行ってるので今この家に来るのは雫しかない。

「最悪だ…」 聖慈は頭を抱えた。

「ただいま」

「お、おかえり」

優慈は久しぶりに妹の姿を見て嬉しそうに答えた。
反対に雫は優慈の顔を見て呆然としている。

「え、……。優慈兄ちゃん今日口ケじゃなかったの……。？」

「なんだよ。なんでみんな、俺がいたらいけないようなりアクシヨンすんだよ！」

「ちがうよ。驚いただけだよな。な」

聖慈はなんとか優慈の機嫌を直そうとフォローをした。

雫に同意を求める時に優慈に分からないように合図を送った。

雫は最初何がなんだかわからないようだったがすぐに聖慈の意図が分かったようだ。

「う、うん。そうだよ。なんで優慈兄ちゃんをのけものにしないでやいけないのよ」

「そうだ。みんな揃ったしどこか外食に行くか？久しぶりに」

「そうだな。寿司なんかどうだ？」

聖慈は話を強引に変えた。

章吾もそれに乗った。優慈はなにか疑っていたが「寿司」という言葉聞いたのですぐにこの話にのっかってきた。

「お、いいね。もちろん兄貴のおごりだろ？」

「いやいやいや、ここは親父だろ」

「俺？仕方ないなあ」

「よし、じゃあ出かけるか」

「さ、はやく行こう」

それから準備して家族4人で食事に出かけた。

章吾の車で運転は章吾、助手席には雫が、後ろの席には聖慈と優慈

が乗り込んだ。

母親がいなが久しぶりに家族での食事に皆楽しんでいる。

時々優慈に話しかけられた雫が戸惑う場面があったがそのときには聖慈と章吾がフォローをしたのでなんとか何も起こらずに食事を終えた。

店から出て、聖慈の部屋に近い場所で食事をしたので聖慈達は歩いて帰ることにした。

「よし、よく食ったことだし帰るか」

「じゃあ、俺こっちだから。親父ご馳走様」

「雫も」

聖慈の横に雫が嬉しそうに並ぶ。

それを見て優慈が口を開いた。

「お前まだ兄貴の部屋にいるのか？」

「いいじゃないか。雫の好きなようにやらせなさい。聖慈も一緒だしな」

章吾は雫が家に帰りたいがらない理由を知ってるので優慈を説得するようにつづいた。

本当の理由はさすがに言えないので『聖慈がいるから』という理由でなんとか説得をするようだ。

優慈も雫が聖慈を慕ってるのは分かってるのでまだ不機嫌だがなんとか納得した。

「おとうさん、ありがと。さ、お兄ちゃん帰ろ」

「分かった分かった。そんなにせかすなよ。じゃあおやすみ」

雫に手を引つ張られるように聖慈は歩きながら章吾と優慈に別れの挨拶をした。

店から歩いて10分ぐらいして聖慈の部屋に到着した。

「あゝ、よく食った」

「もう、お兄ちゃんだらしないなあ」

「いいだろ。別に」

聖慈は部屋に入るや否やすぐにリビングに横になった。
雫はそれを見て少し呆れたような声を出した。

「はやく寝ないと明日仕事早いでしょ？」

「そうだな。じゃあおやすみ」

「お休みなさい」

聖慈と雫はそう言つてそれぞれの寢床に入った。
二人とも今は違う部屋で寝ている。

聖慈と雫は満腹の効果も手伝つてかすぐに眠りについた。

第六話 家族との食事（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_the_isky

第七話 兄の決断

次の日の朝、聖慈は仕事に行くために起きて準備を始めた。

いつもは聖慈よりも早くに雫が起きて朝食の準備をしているが珍しく今日はまだ寝てるらしい。

今日の雫の仕事は休みなのを昨日聞いてたので今日はゆっくり寝かせるかと思い、静かに準備を終えた。

とりあえず雫の部屋に顔を出して、寝ていたら声をかけずに、もし起きていたら声をかけて出て行こうと思い雫の部屋のドアを開けた。ベッドの上には雫が寝ていたのでドアを閉めようとしたのだが開けたときの音で気づいたのか雫が体を起こした。それを見て聖慈は雫に近づいて声をかけた。

「じゃあ、雫。行ってくるわ」

「うん・・・お兄ちゃん行つてらっしゃい」

雫の声に元気が無い。

よく顔を見るとなんだかたるそうだ。

「雫？どうかしたのか？」

「ううん、ちよつと体がだるいだけ・・・」

「ちよつと待つてろ」

聖慈はリビングに行き小物入れの中から体温計を取り出してまた雫の部屋に戻った。

「ほら、体温計。ちゃんと計れよ」

「うん・・・」

雫に体温計を渡した後、薬をもってこようと思い台所に行ったが最近風邪を引いていないのでどこに薬があるのか分からない。手当たり次第に扉をあけたが結局見つからなかった。ひとまず冷蔵庫の中にスポーツドリンクがあつたのでそれを持って雫の部屋に戻ったときに丁度体温計が鳴った。体温計を雫から受け取り表示を見て聖慈は驚いた。

「どれ・・・39度！？お前なんではやく言わなかったんだよ！」
「だって、今日お兄ちゃん大事な仕事でしょ？」
「そりゃそうだけど、ちよつとまってる。今親父がお袋に来てもらうから」

聖慈はすぐに携帯を取り出して実家に電話をした。
朝早いかもしれないと思つたが電話に出たのは優慈だった。

「もしもし？」
「もしもし、優慈か？」
「なんだ、兄貴か。なんだよこんな早く」
「親父がお袋は？」
「二人ともいないよ。朝早く旅行に行ったから」
「そうか・・・」

そういえば昨日そんなことを言っていた気がする。
母親は昨日夜遅くに帰って、また今日章吾と共に出かけると。

「なんかあつたのか？」
「いや、なんでもない。悪かったな。朝早く」
「いや、別にいいけど兄貴仕事いいのか？今日の仕事逃したら当分

「仕事ないんだろ？」

昨日食事のときに仕事の話が話題に上り、聖慈は優慈や雫、章吾に今日の仕事が大事だと伝えていた。

「分かってるって。じゃあな」

「ああ」

そういつて聖慈は電話を終えた。

「ふう・・・」

これは困った。さすがに優慈に雫の看病をさせるわけにはいかない。仕事をとるか、妹をとるか…

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「今、家には優慈しかいないって、どうしよっか？」

「雫、一人でも平気だよ」

「でも・・・」

「大丈夫だからお兄ちゃんは仕事に行つて・・・ね」

「雫・・・」

「ほら、はやく行かないと遅刻するよ」

聖慈は雫の声を聞いて決心した。

「よし、決めた」

「なにを？」

「いいから」

言葉は「仕事に行つて」と言つてはいるが声や表情は「側にいて欲

しい」といつてるようなものだ。

確かに仕事は大切だが「もう辞め時かもしれない」と考えていたし、仕事よりも家族のほうが大事なので聖慈は迷うことなく電話を取り出した。

「お兄ちゃん？ いったい何してるの？」

「いいから、雫は黙ってる」

聖慈は現場の監督に電話をかけた。

雫は心配そうな顔をして聖慈を見ているが、雫を安心させるように聖慈は笑みを浮かべて頭をなでた。

少しの間コール音がして監督が電話に出た。

「あ、もしもし伊集院です」

「あ、聖慈さんどうしました？」

「突然で悪いんですけど今回の仕事をキャンセルしたいんですけど・・・」

「いまさら何言ってるんですか？ もうこの世界で生きていけなくなりますよ？」

「覚悟の上です・・・」

「分かりました。残念です。それでは・・・」

「本当に申し訳ありません」

聖慈は電話を切った。

すぐに雫が申し訳なさそうに口を開いた。

「お兄ちゃん、雫のために・・・」

「仕方ないだろ？ こんな熱出してる妹を放って仕事にはいけないよ」

「お兄ちゃん・・・」

「それに芸能界だけが仕事じゃないしな」

これは普段聖慈が思っていたことだ。

別に芸能界だけが全てではない。

それに現在高校生の聖慈は大学にも行きたいと思っていた。
それを聞いて雫が申し訳なさそうに謝った。

「お兄ちゃん、ありがとう」

「さ、そんなのはいいから、何食べたい？おかゆ作ろうか？」

「うん。お願い」

「よし。ちよつとまってる」

聖慈はおかゆを作り台所に行った。

家を出るまえに何回かはおかゆを作ったことがあるのでレシピを思い出しながら料理を進めた。

「そつえばまだマネージャーに電話していない…」

それに気づいた聖慈はすぐにマネージャーに電話をかけた。

マネージャーはさすがに呆れていたがすぐに何かあったのかを聞いてきた。

だが、聖慈が理由を言わないのでマネージャーは何も言わずに了承してくれた。

これからマネージャーは社長に怒られるのだろう。これまでも聖慈のマネージャーは聖慈の尻拭いをしてくれた。それなのにいつも笑顔で聖慈に接してくれた。

電話を切った後マネージャーに聞こえないだろうが聖慈はお礼を言った。

おかゆを作り雫の部屋に戻ると雫は寝ていた体を起こした。
近づいた聖慈は雫に鍋から茶碗におかゆを移し雫に渡した。

「ほら、雫」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「なにいつてんだ、ほら食べれるか？」

「うん・・・あ、あつつい」

「そうか？・・・あつつ！悪い悪い」

思ったよりもおかゆが熱かったので「ふ〜ふ〜」と息を吹きかけて雫に食べさせた。

「ふ〜ふ〜、ほら雫、口開けて」

「うん・・・おいしい」

「むりしなくていいからな、ゆっくり食べろ」

「うん・・・」

雫はゆっくりとしたペースだったが完食した。
熱の割には食欲があるようで聖慈は少し安心した。

「医者行くか？」

「ううん。大丈夫。一日寝れば直るよ」

「そっか。じゃあ、あとでまた顔出すからな。ゆっくり寝てろよ」

聖慈はここにいると雫が眠れないだろうと思い部屋を出て行くつもりだったが雫はその後姿に声をかけた。

「お兄ちゃん、どこ行くの？」

「へ？別にどこにも行かないよ」

「お兄ちゃん、今日は雫の傍にいて？ね、お願い」

「雫・・・分かった。今日は雫の傍にいるよ。でもちよっと待ってろ。氷と水とってくるから」

「うん・・・」

聖慈は台所から熱を冷ますために氷水を作り雫の部屋に戻った。タオルを氷水に浸し雫の額に乗せると雫が気持ちよさそうに顔を緩めた。

「よし、これで大丈夫だろ」

「あゝ、気持ちいい」

「じゃあ、ずっと雫の傍にいるからゆっくり寝ろ。」

「うん・・・」

何もしないのはさすがに暇なので小説でも読もうかと思いついた。雫が眠ったことを確認して、聖慈は自分の部屋から読みかけの小説を持ってきた。

途中何度か雫の額に乗せているタオルを変えたりはしたが、気がついたら聖慈も眠っていた。

聖慈が目を覚ましたときすでに夕方だった。

昼食は食べていなかったはずなのでかなりの時間眠っていたようだ。

「ん・・・。あ、寝ちゃったか」

聖慈は体を起こした。

「雫、気分はどうだ？・・・雫？」

雫に声をかけたが返事がない。てっきりまだ眠ってるんだろうと思いいベッドに目を向けるが雫の姿はない。

「雫！？あいつどこいったんだ」

聖慈が驚いてると台所のところからいつもと同じ物音が聞こえる。まさかと思い台所に向かうと病人のはずの雫が料理をしている。すぐに聖慈は雫の側に駆け寄った。

「雫！お前なにしてるんだ？」

「なにつて夕飯の準備に決まってるじゃない」

「お前は病人なんだぞ！」

「もう大丈夫だって・・・」

しかし、雫の体が少しふらついた。慌てて聖慈は雫の体を受け止めた。

「ほら、まだ寝てろって」

「だって、雫お兄ちゃんに申し分けないんだもん」

「雫・・・」

雫がそういう風に思ってるとは聖慈も予想外だった。今まで雫にはお世話になっている。申し訳ないのはどちらかというと聖慈のほうだ。

「雫が風邪引いたからお兄ちゃん仕事を休んで・・・」

「気にしなくていいって。俺は仕事より家族をとりたいんだ。それに、俺はいつも雫には感謝してるんだ。たまには兄らしくさせてくれよ。・・・な」

「・・・うん」

「さ、もう少し寝とけ」

「うん・・・おやすみ」

「おやすみ」

そういつて雫をベッドに連れて行った。

雫はまだ体が万全ではないのですぐにまた眠った。

聖慈は雫の頭を撫でて部屋を出て行った。

それから自分の食事をして、風呂に入り聖慈も眠った。

「お兄ちゃん。お兄ちゃん！もう朝よ」

次の朝、昨日の風邪が嘘のように元気な雫が聖慈を起こしに来た。
今日からまた仕事がないので別にこんな早く起きなくてもいいの
だが雫の体調が気になったので聖慈は体を起こした。

「うん？もう朝か？あ、雫気分はどうだ？」

「おかげさまで、もう大丈夫よ」

「そっか、よかった」

「お兄ちゃん、ありがとう」

「いいって」

「お兄ちゃん、なにがあっても雫の優しいお兄ちゃんでいてね」

「当たり前だろ、俺は雫の兄貴だぜ」

「うん！」

そのとき聖慈の部屋のインターホーンが鳴った。

第七話 兄の決断 (後書き)

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

[http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
i|sky](http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
i|sky)

第八話 弟の問題、兄の責任

「誰だ？こんな早く。は〜い」

聖慈はドアを開けた。

そこには青い顔をした優慈が立っていた。

「兄貴・・・」

「優慈・・・？どうした？」

聖慈は優慈に何があったかを聞いてみた。

優慈は言いにくそうに口を開いた。

「家が・・・俺たちの家が・・・」

「家がどうした？」

「家が盗られた・・・」

「はあ？何言ってるんだ？。とりあえず中入れよ」

優慈が何を言ってるのか訳が分からないのでとりあえず家にあげることにした。

家にかかる際も優慈は足取りが重い。

優慈を適当な場所に座らせ聖慈は事情を聞きだした。

「で、なんだって？」

「だから、家を盗られた・・・」

「家盗られたってどういう意味だよ」

「知り合いに騙されて金をとられて・・・」

優慈の顔を見る限りどうやら本当らしい。

思ったよりも大きい問題なので雫には聞かせないほうがいいだろう
と思います、雫に席を外すように言った。

「・・・雫」

「何、お兄ちゃん？」

「ちよつと外にいる」

「どうして？」

「いいから。すぐに終わる」

「分かった」

雫が部屋から出たのを確認した後、聖慈は優慈に詳しい事情を聞いた。

「で、どういう風に騙されたって？」

「先輩がお金を借りるからっていうから」

「保証人になったのか？」

「・・・うん」

「でも、その年では無理だろ？」

「借りた店の人が先輩の知り合いで年をごまかして・・・」

「借りたのか？」

「・・・う、うん」

「金額はいくらなんだ？」

「一千万・・・」

「一千万！おまえそんな事は早く言えよ！」

「それで、そんな金額払えないって言ったら店の人がじゃあこの家
売れって・・・」

「それでか・・・」

「どうしよう、兄貴・・・」

「はあゝ」

かなり問題が大きい。

聖慈はどうするか悩んだ。

さすがに一千万程のお金を用意するのは不可能に近い。

聖慈の悩んでる顔を見て優慈は申し訳なさそうにしている。

「悪気はなかったんだ」

「当たり前だろ！」

このことを両親は知ってるか優慈に聞いてみた。

こういうことはやはり親の力を借りれたら心強いからだ。

「親父たちは知ってるのか？」

「いや、まだ旅行から帰ってこないから・・・」

「いつ帰ってくるんだ？」

「明後日・・・」

「明後日か。難しいな」

明後日ではどうしようもない。

とりあえずその先輩と連絡はとれないのだろうか。

「その先輩の携帯は？」

「掛けてもでないんだよ」

「そりゃそうだろうな」

両親が駄目なら次にお金を貸してもらえそうなのは事務所だ。
事務所に頼んでみるように優慈に言ってみた。

「事務所に金借りれるだけ借りてみるよ」

「それが・・・」

「駄目って言われたのか？」

事務所もこういうことにはお金を貸してくれなかったらしい。ということは聖慈と優慈の二人でどうにかするしかない。

とりあえず今二人で準備できるお金がいくらかを計算してみる必要がある。

「そうか・・・。お前今金いくらある？」

「百万ぐらいしかない」

「俺のと合わせて二百万ちよつとか・・・」

「どうしよう・・・」

よくよく考えてみたら事情がおかしい気がしてきた。

確かに保証人になったのは優慈だ。

だが、まず14歳の優慈に保証人を頼むこと自体が怪しい。

「もしかしたらその先輩とその店員はグルだったかもな」

「え・・・」

「考えてみるよ。いくら店の人でも未成年を保証人にはさすがにできないだろ？」

「でも・・・」

「お前その先輩になんかしなかったか？」

「いや、別に・・・」

「じゃあ、違うか。とりあえずあと八百万をどうするかだ」

聖慈も優慈も途方にふれてしまった。

今自由に使えるのは自分達のお金だけだ。

「さすがに零の金や親父たちの金を使うわけにはいかんしな・・・」

「どうしよう・・・」

「とりあえず、その店に連れて行ってくれ」

「分かった」

「雫！」

聖慈は雫を部屋に入れた。

雫は少し戸惑いながら部屋の中に入ってきた。

「なに？お兄ちゃん？」

「俺たちちよつと出てくるから戸締りちゃんとして留守番してろよ」
「分かった。いつてらっしゃい」

聖慈は雫に声をかけて優慈と共にその問題の店に出かけた。

その問題の店は裏道のビルの中にあつた。

「ここだよ」

「いかにも怪しいな」

「とりあえず中に入るか」

「兄貴、大丈夫なの」

「大丈夫、大丈夫。なんとかなるさ」

聖慈と優慈は店の中に入ってみた。

ヤクザらしい人の姿もポツポツ見えてこれはいかにも怪しいという
雰囲気が出ていた。

「怪しいな、この店」

「早く店から出ようよ」

「そうだな、ひとまず撤収だ」

二人はとりあえず店から出て表道まで戻った。

聖慈がこれからどうするか考えていたら優慈が話しかけてきた。

「どう、兄貴？」

「怪しいけど、証拠が無いから警察に行っても意味無いし。とりあえずその先輩といつ知り合った？」

「一ヶ月ぐらい前かな。めっちゃ後輩付き合いもいい先輩だったんだけど・・・」

「そうか。・・・分かった。」

1ヶ月間後輩と接して優慈をカモにして潰そうとしたのだろうと聖慈は考えた。

このまま優慈がお金を返せないのは問題がある。

そのとき聖慈の頭の中に一つの可能性が出てきた。

これで駄目ならもう駄目だろう。

聖慈の顔つきが変わったのが分かったのか優慈がまた話しかけてきた。

「兄貴？」

「俺がどうにかしてみるわ」

「兄貴。ホントか？」

「できるかどうかは分からんけどな」

「家で待ってる」

「分かった」

優慈が聖慈の家に向かっていったのを確認して聖慈は決心した顔をしてある場所に向かって歩き出した。

「さてと、行くかな」

聖慈と優慈が分かれて半日後聖慈が残りのお金を持って家に帰って

きた。

「ほら、お金」

「兄貴！？このお金どうした？」

優慈に残りの八百万を渡した。

優慈はそのお金を見てビックリしているが顔は安心した顔をしている。

「そんなことはいいからはやく払って来い」

「ありがと、兄貴！」

優慈が約束のお金一千万を持って家を飛び出した。
優慈が出て行った後聖慈はリビングに横になった。

「ふう。疲れた」

すると雫が飲み物を持って聖慈の方に近づいてきた。

「お兄ちゃん。事務所から電話あったよ・・・」

「え・・・。そうか。優慈には内緒にしとけ」

「どうして？なんでお兄ちゃんがやめなといけないの？」

「優慈はまだ人生これからだしな。俺がやめれば一番早いんだよ。
実際俺が一番辞めても支障が無いしな」

「お兄ちゃん・・・」

「俺はお前らの兄貴だからな・・・。まあ、ほとんどは事務所のみんなから集めた金だから返さないといけないし」

聖慈と雫が話していると玄関から凄惨な音がして優慈が入ってきた。

「兄貴！今の話ホントか？」

「優慈！？お前聞いてたのか？」

どうやら玄関で今の話を聞いていたらしい。

「兄貴がなんで辞めるんだよ！辞めるならおれだろ！」

「いいんだよ。お前はその分事務所のみんなに金返せるように仕事しつかりやれよ！それより早く飯にしよう。腹減ったよ」

「兄貴・・・」

聖慈は夕食が並べてあるテーブルのほうに近づいていく。

その後姿を見て優慈は何も言えなくなった。

優慈の手を雫が握った。

「優慈兄ちゃん」

「雫・・・」

雫は優慈を安心させるように笑顔で言った。

「お兄ちゃんは優慈兄ちゃんのことを思ってたんだよ。だから、優慈兄ちゃんはお兄ちゃんの分まで芸能界で頑張つてよ・・・ね」
「そうだな。兄貴の気持ちに答えなきゃな」

優慈と雫が話してるのを待ちきれないのか聖慈が二人を呼んだ。

「おい！何してるんだ。早く食おうぜ！」

「ああ」

「はい」

優慈と雫が席に座り兄妹3人揃つての食事が始まった。

食事を始めてすぐに優慈が口を開いた。

「・・・兄貴」

「うん？どうした？」

「ありがとう」

「いいって。それよりも俺の分まで頑張れよ！」

聖慈の想いを受け止めた優慈が涙を浮かべながら聖慈に答えた。

「ああ。まかせとけて！」

「このやる！調子に乗りやがって！」

優慈にいつもの調子に戻ったのが分かったので少しお仕置きをしようにと聖慈は優慈に弱めのヘッドロックをかけた。

「参った参った！俺の負けだ！」

「まだまだ！」

聖慈も優慈もとても楽しそうに技のかけあいをしている。

雫もそんな二人の兄達を見て楽しそうに笑っている。

久しぶりに兄妹3人に前の笑顔が戻った。

その夜の深夜、聖慈は雫が眠ってるのを確認してからある話をするために優慈の部屋に入った。

第八話 弟の問題、兄の責任（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_the_isky

第九話 兄の独白と弟の言葉

優慈は聖慈が入ってきたので体を起こした。
何の話をするかはまだ優慈に伝えていない。

聖慈は優慈の近くに座って優慈の顔を見据えた。

「優慈、お前に話がある」

「何、兄貴」

「実はな・・・」

聖慈は迷った。

本当にこのタイミングで話していいのだろうか。

まだ優慈に話すのは早いのではないだろうか。

しかし、今日の優慈や雫との食事を取っていて聖慈は少し罪悪感を
感じていた。

本当の兄貴ではないことを雫はともかく優慈には伝えておいたほう
がいいのではないだろうか。

しかし…

「なんだよ、もったいぶって!」

聖慈が迷っていると優慈がせかしてきた。

聖慈は思い切って優慈に伝えることにした。

「ああ、実は・・・俺とお前、そして雫は本当の兄弟じゃないらしいんだ」

「は?ちゃんと説明しろよ!」

「はっはっはっは!」

「なに笑ってんだよ!」

優慈のリアクションが自分が章吾から聞かされたときと同じなので聖慈はつい笑ってしまった。

こついうところで聖慈は優慈が義理でも自分の弟だと感じれたことが嬉しかった。

「いやな、俺が親父に聞いたときも同じ反応したからな、つい笑っちゃった」

「で、どういふことが説明してもらおうか？」

聖慈は笑いを止めて真面目な顔をして説明を続けた。

「親父からの説明だと親父とお袋の間には10年間子供ができなかったらしいんだ。それで、託児所にいた子を一人ひきつとたらしいんだ」

「それが兄貴？」

「らしいんだけど、親父の話だからな詳しいことがわからないんだ。だから、お前と雫は兄弟だけど俺は違うんだ」

「だから？」

「え？」

「だからどうしたっていうんだ！」

優慈がいきなり叫んだので聖慈は驚いた。

「兄貴は本当の兄妹じゃなくても俺と雫の兄貴だよ、これからも」

聖慈は優慈のその言葉を聞いて本当にこいつの兄貴でよかったと思つた。

心には感謝の気持ちで一杯になった。

「優慈・・・ありがとな。親父にも二人の兄貴でいてくれて頼まれたんだ」

「雫は知ってるのか？」

「まだ、伝えれる年じゃないだろ」

「まあな」

「俺だつて18になつてから伝えられたんだぜ」

聖慈は雫の話になつたので丁度気になつてることを聞いた。雫をどういう風に見てるのかをだ。

このタイミングを逃したら聞く機会はもうこないかもしれない。

「そついや雫から聞いたけど・・・」

「ん？なんて？」

「お前、雫のこといやらしい目で見てるらしいな？」

「は？違うし。ただ・・・」

「ただ？」

「ただ雫のことがまだ小さいから心配だつたんだよ」

なるほどと聖慈は思った。

確かに雫はまだ10歳だ。

優慈も雫のれっきとした兄なので雫が気になつていたのだろう。

そつえば聖慈がいるときは優慈は雫のほうを見ていなかった気がする。

恐らく聖慈がいたので安心していたのだろう。

「へえ」。そついうわけか・・・」

「そついうこと。まあ、雫にそついう風に見られてとは思わなかつたけどな」

「まあ、兄貴なんてそんなもんだよな」

「そつだな。兄貴はそれに俺も迷惑かけてるしな」

「迷惑はかけられたほうが兄貴にとっては嬉しいけどな」

「まあ、寂しいよな。妹や弟が独り立ちしていくと」

「そうだな・・・。とりあえず、雫ももうそろそろ家に帰すって親父にも伝えてくれ」

優慈は聖慈のその言葉に疑問を持った。

何故雫を帰す必要があるのだろうか。

「雫を家に帰すのか？」

「まあな。もうそろそろ俺も妹に頼りっぱなしってわけにはいかんだろ。どうせこれからは受験勉強ばっかだから家事も余裕があるだろうし」

「受験勉強？」

「ああ、俺大学に行こうと思ってんだ」

「そうか。分かった。親父にも伝えとくよ」

「頼むな。さ、そろそろ寝るか」

「そうだな、もう2時だしな」

聖慈は自分の部屋に戻っていった。

部屋に帰り優慈の言葉をもう一度思い出していた。

これからも兄として接してくれることの嬉しさで胸が一杯になった。

「じゃあ、兄貴。また今度な」

「ああ、また遊びに来いよ」

次の日の朝優慈は聖慈の部屋を後にした。

聖慈は優慈の姿を見送って部屋に戻ると雫が待っていた。

「お兄ちゃん・・・」

「ん？雫、どうした？」

雫が聖慈に話しかけた。

「私も帰るよ」

「帰るって家にか？」

「うん。そろそろ私もお兄ちゃんに甘えてるわけにもいかないし」

「そうか・・・」

「また遊びに来てもいい？」

「ああ。優慈と一緒に来いよ」

「え・・・」

「優慈はお前が思ってるよりもちゃんとした兄貴だよ。お前が心配だから見てただけだよ」

その言葉に雫は安心した顔を見せた。

「そうなの？」

「ああ、家に帰ったら優慈に聞いてみな」

「うん。分かった」

「じゃあ気をつけてな」

「うん。じゃあね」

そうして雫も聖慈の部屋を後にした。

これからどうなるかは分からないが聖慈はこれからも優慈と雫のいい兄貴でいようと思い、とりあえず大学受験に向けての勉強を開始した。

〈第一部完〉

第九話 兄の独白と弟の言葉（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/inthyisky>

第十話 8年後の伊集院家3兄妹（前書き）

これから第二部開始です。

とりあえず登場人物として伊集院家の面々を書いておきます。

伊集院聖慈…この話の主人公

伊集院優慈…聖慈の弟

伊集院雫…聖慈の妹

伊集院章吾…聖慈達の父親

伊集院真美…聖慈達の母親

設定として聖慈と優慈・雫は血のつながりは無いが優慈・雫は実の兄妹

第十話 8年後の伊集院家3兄妹

8年後の春・・・

聖慈は26才になっていた。

聖慈は芸能界を辞めた後大学に進学し、ある企業に就職していた。営業として仕事を3年間勤めお得意様も何件か獲得し、営業の中でもトップに近い成績を残している。聖慈自身は自覚はないが芸能界にいたこともあり、なおかつ言動・行動が紳士的ということで社員にも人気がある。

優慈は23才になりますます演技に磨きがかかりハリウッドにも進出した。

雫は18才になり高校へも仕事の合間に通っている。曲も出し今一番人気のある女優になっていた。

聖慈は今日はお得意様に出向いた後は直帰になっていた。

今日は両親に大事な用があるとかで実家に呼ばれた。ちなみに優慈と雫はあれから話し合ったようで二人そろって買い物も行ったりと仲がいい兄妹に戻ったようだ。

二人そろって聖慈の家に泊まりに来ることもある。もちろん一人ずつ泊まりに来ることもある。

「にしても、なんだろうな。大事な話って…。そっぴやもう雫も18だから俺のことを話すのか？」

聖慈は今日の両親の話が何か見当もつかなかった。

なにしろ昨日電話があり、「必ず来い」と言われ（半ば脅し？）何かなんだか分からない状態だからだ。

まあ、とりあえず行かなければと思い歩いていた。

そのとき見覚えのある車が聖慈を追い越した後スピードを落とし30m先に止まった。

聖慈はその車の持ち主が誰か分かっていたのでその車に近づいた。

「よ！兄貴、久しぶりだな」

「おお、久しぶりだな。最近忙しそうだな。今日の仕事はもう終わりなのか？」

「ああ、今日は親父に召集かけられたしな。兄貴もだろ？乗っけてよ」

車の持ち主は優慈だった。

事務所のみんなに借りたお金をきっちり返した後優慈は車を買っていた。

聖慈は優慈の車の助手席に乗り込んだ。優慈は聖慈がシートベルトを締めたのを確認した後車を発進させた。

「にしても兄貴のスーツ姿やっぱ慣れないな」

「そうか？それでも4年目だぞ。まあ、スーツでお前とあう機会も少ないしな」

「それもそうか」

「ところで親父から何か今日の話について聞いてるか？」

「いや、何も聞いてねえよ。兄貴は何か心当たりでもあんの？」

「ああ、考えられるのは雫に俺のことを話すんじゃないのかとは思うけどな。雫ももう18だしな」

「そっぴい雫は何も知らないんだっけ。すっかり忘れてた。まあ、大丈夫だろ」

「俺もそう思うね。ところで・・・」

車の中は世間話になっていた。今の芸能界の事や優慈の仕事のことなどを実家に着くまで聖慈と優慈は笑いながら続けた。

実家に着き、聖慈と優慈は玄関から家の中に入った。

「ただいま」

「ただいま」

二人が中に入ると奥の方から二人の母親でもある真美がゆつくりとした足取りで玄関までお迎えにきた。

「聖慈、優慈もおかえり。二人一緒だったのね」

聖慈と優慈は家の中に入りながら真美の質問に答えた。

「ああ、俺が家に向かっていると兄貴が歩いてるのを見かけてな。拾って一緒にきたんだ。今日、雫は？」

「そうだったの。雫は今日久しぶりに学校よ。あ、優慈悪いんだけど車出してくれない？買い物行ってきたいんだけど」

「ああ、いいよ。じゃあ、兄貴は家でゆつくりしてるよ」

「ああ、そうさせてもらうよ。じゃあ、優慈、お袋も気をつけろよ」

「おお、まかせろ」

「ええ。」

そついうと二人は家の外にでた。

ひとまず聖慈は喉が渴いてたので台所に入り喉を潤すことにした。

冷蔵庫の中から麦茶を取り出しコップに注ぎ一口で飲み干し、もう一回注ぐとする時に庭のほうから車の出る音が聞こえた。

聖慈はその音を聞きながら二杯目の麦茶を飲み干した。コップを流しにおいてふと周りを見渡すとコップや皿の数が少ないことに気がついた。

聖慈が家を出て、優慈も今は一人暮らしをしている。多いときは5

人で暮らしていたが今は両親と零の3人暮らしとなっているので、皿の数が少なくなってるのは仕方がないがそれでも数が少ない。生活できても一人が限度の数になっている。

聖慈は疑問に思いながら父親の所に行こうとすると家の電話がなった。

聖慈が電話に出ようと電話に近づいたときに章吾が居間から通じるドアから出てきて電話を取った。

第十話 8年後の伊集院家3兄妹（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
i|s|s|k|y

第十一話 兄の作戦

「はい、伊集院ですが？・・・おお、暇だぞ。・・・分かった。じやあ今から迎えに行くから」

そついうと章吾は電話を切った。そして、聖慈の方に向きなおした。

「聖慈、おかえり。」

「ただいま。で、電話誰から？」

「おお、そうだった。雫が迎えに来て欲しいんだと。俺の車使って良いからお前迎えに行ってくれないか？」

「ああ、それは別にいいよ。どこまで？高校？」

「校門の近くにいるそうだ。それじゃあ頼んだぞ」

「了解。ほんじゃ行ってくるわ」

聖慈はそう言うのと章吾から車の鍵を受け取り家をでた。

章吾の車はミッションだが運転するのはすでに何回か経験してるので慣れた手つきで車を発進させた。

雫が通っている高校は聖慈、優慈も通っていた学校で家から一番近い学校だが、歩いていくには少し遠い場所にある。

聖慈と優慈は自転車で通っていたが雫はバスで通っている。

高校と家を結ぶ路線のバスは本数が少ないので時々雫を高校まで迎えに行くこともある。

だいたい章吾が迎えに行くが家にいるときは優慈や聖慈が迎えに行くこともある。

家から高校までいつもは20分ぐらいで着くが今日はいつもより車が多く少し時間がかかってしまった。

「まあ、少しぐらい遅れても大丈夫だろ」

聖慈は校門の近くに車を止め周りを見たが雫らしき人は見かけなかった。

とりあえず聖慈は車から降りてボンネットに寄りかかって缶コーヒ―を飲み始めた。

その様子を見て周りの女子高生から熱い視線が送られてるが聖慈は少しも気にしてない。というか気付かず携帯をいじっている。

ふと生徒用玄関を見ると雫と男子生徒が二人で歩いてくるのが目に留まった。

その男子生徒が馴れ馴れしく雫と話してるのを見ると少しムカついたが雫が聖慈に気付いて笑顔に向けたのを見たときに何も考えられないようになった。というよりもその笑顔から目が離せないといったほうが正しいのかもしれない。

雫は男子生徒を置いて聖慈目掛けて走ってきた。聖慈は雫の行動が読めていたので腕を広げて待ち構えた。

聖慈の読みどおり雫は聖慈の胸に飛び込んできた。腕の中で雫は息が切れている。

「なにもそんなに急いで走らなくても」

「だって、ひさしぶりなんだもん。お兄ちゃんと会うの。それにまさかお兄ちゃんが迎えに来てるなんて思わないもん。」

「親父に頼まれてな。お前も聞いてるんだろう？なんか大事な話があるって」

「うん、でも何の話かは聞いてないの。お兄ちゃんは？」

「俺も聞いてないんだ。優慈も聞いてないらしい。とりあえず帰ろうか」

聖慈が雫と話していると先ほど雫と仲良く話してた男子生徒がこちらに向かってきてるのが見えた。

顔には嫉妬の情が目に見えるほどすぐに分かった。

「なあ、雫。あいつは誰だ？」

「え？・・・ああ、山本くん？このまえお友達になったの。」

「ふうん。・・・まあ、あいつはそれだけで近づいたわけではないだろうけど」

「え？どういう意味？」

「いや、気にすんな」

山本は聖慈たちのすぐ傍まで来ると聖慈をにらみつけた。
その後に雫に向かって笑みを浮かべて話しかけた

「伊集院？俺がお前んちまで自転車で送ってってやるよ。・・・で、あんた誰？あんた伊集院のなんなの？」

最初は雫に向かって話してたが後のほうは聖慈に向かって挑戦するように言った。

聖慈はすぐに兄と言ったら面白くないと思い、雫の虫除けも兼ねて予防線を張ろうと考えた。

「俺？そうだな・・・こいつのことを一番分かっている人で雫は俺にとつて一番大事な存在ってところかな。な、雫？」

「うん！私も大好き！」

俺と雫が言った言葉に周りがざわざわ騒ぎ出す。

元々聖慈と雫が抱き合ったときから周りが騒がしかったがさらに騒がしくなっている。聖慈は山本の顔を見た。

やはりショックを受けているのか顔が少し青白い。周りの男子生徒も山本と同じような顔をしている。

山本がショックから立ち直ったのかまた聖慈をにらみつけてきた。

やはり先ほどと比べると比較的弱い視線だが・・・

「あんだ、社会人だろ？女子高生なんか手え出して良いのかよ！あんだロリコンか！」

「別にロリコンだろうと関係ない。俺は雫が大事なんだ。別に女子高生が好きじゃあないしな。雫だから大事なんだ。それはこれから一生変わらない。むしろこれからも俺がこいつを守っていくつもりだ」

聖慈の言葉を聞いてさらに周りが騒ぎ始めた。

傍から聞くとどう聞いてもプロポーズの言葉にしか聞こえないから無理もない。だが、聖慈の言った言葉に嘘はない。

これから章吾から話を聞くがどんな話でも優慈と雫の兄貴でいようと決めてるからだ。

そういえばさつきから雫が静かだな、と思い雫の顔を見ると他の人から見るとどこも変わってないように見えるが少し照れてるのが聖慈には分かった。

「少しやりすぎたかな」と思いとりあえずこの場から逃げることに決めた。

雫を車の助手席に乗せ聖慈自身も車に乗った。走り出す前に最後のとどめを指すのを忘れずに・・・

「今から雫の家に行つて雫の両親と大事な話をするんだ。悪いが前が出る幕はない。じゃあ〜な。」

そついつて聖慈は車を出した。

第十一話 兄の作戦（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_the_isky

第十二話 母の愛

車の中では沈黙が流れている。聖慈は雫の様子を盗み見ると少し機嫌が悪そうだと感じた。

「あのー、雫？どうした？」

「どうしたもこうしたもないよ。あんな事言ってから。今度学校に行くときにどんな顔をしていけばいいのよ。」

「いいじゃないか、別に。間違ったことは言っていないんだから。な？」

「それはそうだけど・・・」

「仲の良い友達だけに俺が兄貴だつてこと伝えればいいじゃないか。それで友達の誤解とけるさ。もし、信じてくれなければ大竹先生に聞けばすぐに分かるって言えよ。俺がお世話になった先生だから写真見せてくれるさ。今でもときどき会ったりするしな。酒も一緒に飲みに行くし」

「分かった。じゃあそうする。」

大竹というのは聖慈が通っていたところから高校にいる先生だ。

聖慈が芸能界にいたところから特別扱いせずに関係してくれて、芸能界を辞めたときも何も言わずに勉強を教えってくれた恩師だ。今では酒飲みの友達と化している。

とりあえず雫の機嫌が直ったことに聖慈は一安心した。

実際聖慈をここまでうるたえさえる事ができるのは雫のみだが聖慈や雫自身はまだ気付いてない。

とりあえず聖慈は家に向けてアクセルを踏んだ。

聖慈達が家に着くと丁度優慈達が買い物に帰ってきたところだった。聖慈は車を止めると雫と二人に近づいた。

「ただいま。今さつき着いたのか？」

「おかえり。ああ、ついさつきだよ。兄貴は雫を迎えに行ってきたのか？」

「ああ、親父に頼まれてな。」

聖慈と優慈が袋を持って家のほうに向かって歩き始めた。優慈の横を雫が、その二人の後ろを聖慈と真美が歩く。歩き始めてすぐに真美が聖慈を呼び止める。

「聖慈。ちよつといい？」

「何？」

「あんた、雫になにかした？」

聖慈は真美の言葉に驚いた。

確かにさつき校門のところにいるあつたが車に乗ってる間に雫の顔からは照れや動揺は無くなった。

いや、聖慈には無いように見えていただけなのかもしれない。

「さすが母親だな」と聖慈は感心してまった。

「まあ、いろいろと……。でも何で分かった？」

「あんた自分で気付いてないの？あんたさつきから雫をちらちら見てるでしょ？反対に雫も聖慈をちらちら見てるし。これは何かあるって分かるわよ。で、何したの？」

「ああ……、愛の告白と虫除け？」

「はー、だからね……。」

「へ？だからって分かったの？」

「まあね。雫があんたを見る目が前と違う気がしたのよ。」

「違っつてどういう風に？」

「さあね。自分で考えなさい。」

「ちょっと待って・・・」

真美は聖慈を置いてさっさと玄関のほうへ歩いていった。聖慈はその場で足を止めて考え始めた。

「見る目が違う？今までは兄だろ。じゃあ今は？」

真美は聖慈が考え込んでる姿を見て顔に笑みを浮かべた

（雫の目はさしずめ「恋する女子高生の目」ってところよね。まあ、聖慈も妹の他にも違う目で見てるけど気付いてない所を見ると自覚なしね。聖慈に「お嬢さんをください」って言われるのも良いかもね。ま、籍をどうにかしないといけないけど。）

真美が笑いながら玄関に入ると優慈と雫が玄関で待っていた。
真美が玄関で靴を脱いでも聖慈が入ってこないのを見ると雫が真美に尋ねてきた。

「お母さん。お兄ちゃんは？」

「ちよつとね。悪いけど雫、呼んできてくれない？」

「え？・・・分かった。」

雫が聖慈を呼びに玄関の外に出たのを見計らって優慈が真美に話しかけた。

「お袋。一体何考えてんの？」

「べつにつゝ、しいて言えば家族のことかな」

それだけ言つと真美はさっさと家の中に入っていく。その後ろを優慈は納得できない様子で後ろをついていく。

雫が聖慈を呼びに出ても聖慈はまだ先ほど真美に言われたことを考えていた。

うんうん言いながら考えこんでる聖慈を見て雫は笑みをこぼした。

雫は聖慈にゆっくりと近づいて声をかけた。

「お兄ちゃん？」

雫が声をかけても聖慈は聞こえてないのかまだぶつぶつ言いながら考え込んでいる。

雫はムツとしながらさっきよりも大きい声で聖慈を覗き込んで声をかけた。

「お兄ちゃん！もう！お兄ちゃんってば！！」

「うわ！？」

今考えていた雫の顔が目の前に出てきて聖慈は驚いた。雫も聖慈がそんなに動揺するとは思ってなかったらしく、声をかけた雫自身も驚いた。

「雫！？あれ、お袋は？」

「何言ってるの。もう先に玄関に入ってるわよ。お母さんに頼まれてお兄ちゃんを呼びにきたの。ところでさっきから何考えてたの？」

「うえ！？いや別に、ハハハ・・・」

「そう・・・。」

まさか「お前のこと考えてた」とは言えないので聖慈は困り果てた。とりあえずごまかそうとしたが雫の顔が寂しそうになっていくのを見てさらに慌てた。

「いやいやいや、ホントになんでもないんだって。」

とりあえず聖慈は雫を慰めようと思い、雫の肩を掴み目と目とあわせながら言った。

すると、雫の顔がみるみるうちに真っ赤になり視線を逸らされた。

聖慈は雫の顔が何故真っ赤になるのか分かってないがそれよりも視線を逸らされたことにショックを受けた。

「分かったから手離して！」

雫がそういうので肩から手を離すと雫は走って聖慈から玄関のほうへ逃げ出した。

視線を逸らされたのと逃げ出されたダブルショックからまだ立ち直れないのか聖慈はその場でただ呆然と玄関のほうを見てるだけだった。

章吾と真美と優慈は居間のほうでくつろいでいた。だが、凄い勢いで雫が居間の入り口を空けたので章吾と優慈は驚いたが真美は悠然とお茶を飲んでいる。

「雫、聖慈は？」

「え？えつと・・・もう少しで来るよ。私着替えてくる。」

雫はそれだけ言うつと居間から出て行った。章吾と優慈は不思議に思い、顔を見合わせた。

真美は聖慈がなにかしたんだろうとは思ったが、顔には出さず二人の鈍感な男女を思ってたため息をついた。

聖慈が先ほどのショックからなんとか立ち直り居間のほうに入るとそこには着替えた雫も含め家族全員がそろっている。

聖慈は真美からお茶を受け取り一口飲みながら雫を盗み見ると雫と一瞬目が合ったがすぐに逸らされた。

（俺が何したって言うんだよ……。完璧に嫌われたな……。）

聖慈が落ち込んでるのを見て何故落ち込んでるのかわからない章吾と優慈は不思議に思い、また顔を見合わせた。

真美は聖慈と雫を見ながら「しょうがない子達ね」と哀れみの目を向けた。

「聖慈？ なにかあったのか？」

「いや、別に……。それより話ってなんだよ？」

章吾が優慈に急かされて聖慈に尋ねたが聖慈は答えなかった。

とりあえず聖慈はさつさと本題に入って今日は早く休みたかった。

「あ、ああ。実はな俺と母さんな、外国に行こうと思うんだ。」

「へえ、いいじゃんか。お土産よろしくな。で、何泊するつもりなんだ？」

「いや、外国で暮らそうと思ってるんだ。」

「うえ！？」

「は！？」

「へ！？」

聖慈含め伊集院家3人兄妹は驚きのあまり変な声を出して固まっている。

第十二話 母の愛（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/inth
isky

第十三話 母の提案

その様子を見ながら章吾と真美はゆっくりお茶を飲んです。少しして一番早く復活したのは聖慈だった。

「あゝと、悪いけどもう一回言ってくれないかな？」

「だから、俺と母さんは外国で暮らすことにしたんだ。」

「いやいやいや、何で急にそんなことに？」

「いやな、俺の友達がアメリカに住んでるんだ。んで、俺も来ないかって誘われたからじゃあ行くわってことで。出発は明後日。まあ、頻繁に帰ってくるつもりだから心配すんな。」

「誰が心配するか！」

「ちよつと待てよ！急に決まりすぎだろ！！いつ誘われたんだよ？」

「えゝと、一ヶ月ぐらい前かな。」

「なんでこんな急に言っただよ！もっと早く言えよ！」

「いいじゃないか。どうせ止めないんだろ？」

「そりゃあそうだけどいくらなんでも急すぎだろ！」

「ちよつと待つてよ。私はどうするの？」

「そうだよ！俺と優慈は一人暮らししてるから良いけど雫はどうすんだよ？」

「そりゃあここで一人暮らしでいいんじゃないか？」

章吾のいった言葉に3兄妹はまた固まった。

三人とも頭がついていない様子で、今一生懸命整理をしているようだ。

章吾と真美が再びお茶を飲んです中で一番早く口を開いたのは聖慈だった。

「俺は反対だ！雫はまだ18の女の子だぞ！」

「俺も反対だ！俺らはともかく雫にはまだ早い！今世間は物騒なんだぞ！」

「んな事いったって、もう俺ら向こうに家買ってるしもう辞めることはできんぞ。」

「だからって・・・」

聖慈、優慈、章吾の三人が話してる中で雫はボーッと何かを考えている。

真美はその横顔を見ながらあることを考えていた。

元々真美は聖慈と優慈が反対するのは分かっていた。聖慈と優慈はこと雫のことに關しては過保護だ。

雫が一人暮らしするのを許さないだろうとは思っていたがこれほど強く反対するとは考えてなかった。

最初はなんとか聖慈と優慈を言いくるようと思っていたが聖慈と雫の關係を見てあることを思いついた。

「あら、じゃあ雫は聖慈と一緒に暮らせばいいじゃない？」

「うえ！？」

「は！？」

「・・・」

「へ！？」

真美の言葉を聞いて聖慈、優慈、章吾は変な声を出してまた固まった。

雫はすでに思考回路がついていないようで真美が何を言ってるのか分かってないようだ。

「母さん？それは俺も初耳なんだが？」

「そりゃあそうでしょ。今思いついたんだから。だって聖慈と優慈は雫の一人暮らしは反対なんでしょ？」

「そりゃあそうだけど、どうなったらそういうことになるんだ？親父だけ行かせてお袋はせめて雫が成人になるまで日本にいればいいだろ。」

「あら？聖慈は雫と暮らすの嫌なの？」

真美のその言葉に雫がはっと聖慈の顔を不安そうに窺う。すでに泣きそうなの雫の顔を見て聖慈はうっと詰まった。

「そりゃあ嫌じゃないけどさ……。親父はいいのか？俺と雫が暮らしても？」

この言葉にはある意味が含まれていた。

一応戸籍上は兄妹ということになっているが二人には血のつながりは無い。

それを含めて聖慈は章吾に尋ねた。今まで聖慈は雫と兄として生活してきた。

章吾も聖慈を本当の息子として育ててくれた。

だから、雫が聖慈の部屋に泊まることがあっても何も言わなかった。だが、「『暮らす』ということになると別問題なのではないだろうか」、「もしかしたら章吾は聖慈と雫が暮らすのを反対してるのではないだろうか」とその想いが今聖慈の中で芽生え始めている。

だから、聖慈は章吾に尋ねたのだ。「自分の娘が血のつながってない男と住んでもいいのか」と。

「ま、聖慈となら大丈夫だろ。」

章吾は笑って頷いた。

章吾は聖慈の気持ちがかかっていた。

聖慈が雫のことをとても大事にしていることも、聖慈の中で雫の存在がどれほど大きいのかも。

もちろん雫の気持ちも分かっている。雫が聖慈をどれほど頼りにしてるのかを。

優慈も雫のことを大切にしているのは分かっている。だが、聖慈と比べると優慈に任せるには少し不安が残る。雫も優慈よりは聖慈を頼りにしている。だから、聖慈に任せたのだ。

「親父がいいなら俺はいいよ。雫は？俺と一緒にいいか？」

「え？う、うん。」

「じゃあ、そういうことだな。優慈もいいな？」

「ああ・・・」

「なんだ？納得行かないようだな？」

「いや、なんで俺と一緒にいけないのかと思ったただだよ。」

「だってあんた芸能界で働いてるから家を空けるのはしょっちゅうでしょ？それだと雫が一人暮らしするのとかかわらないじゃない。聖慈は残業で遅くなっても必ず家に帰るんだし、家を空けるのは出張ぐらいでしょ？だから聖慈に任せたのよ。」

「分かった。」

優慈はしぶしぶといった感じだが納得したようだ。とりあえず雫の引越しは明日ということになった。

この家はこのまま放置で、一ヶ月に一回はハウスクリーニングに頼むということ、章吾と真美は気が向いたら帰ってきて帰ってきたら一回は家族全員で食事をすることを決めた。

雫は自分の部屋へ荷物をまとめに、真美は残りの荷物整理を、優慈は真美の手伝いを始めた。

聖慈は雫を手伝おうとしたが章吾に話があると引き止められた。

第十三話 母の提案（後書き）

ここまで先もって書いてたのを投稿してましたがこれからは一から創るので更新ペースが遅くなります

ご了承くださいm(´`´)m

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております

興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o : j p / i n | t h
i s | s k y

第十四話 兄と妹の同居生活開始

聖慈は章吾の目の前に座った。

「何？話って？」

「お前の生みの親のことなんだが…」

聖慈はその言葉に驚いている。

確かに章吾から実の子供ではないと聞かされたときには気になっていたがもう8年も前のことだ。

今更生みの親について何の話があるというのだろうか。

「俺の生みの親がどうかしたのか？」

「この前託児所から連絡があつてな。今更ですがお前をここまで大きく育てていただいてありがとうございますって連絡があつたらしい」

「本当に今更だな…」

今更「私が生みの親よ」なんて言われても困るのが率直な感想だ。聖慈にとって親とは章吾と真美の二人なのでこんな話はどうでもいい。

「話はそれだけか？」

「あ、ああ。悪いな引き止めて。」

聖慈が部屋から出て行こうとしたがさっきの質問をもう一度聞きなおそうと考えた。

さっきは皆いたので二人きりで率直な意見を章吾の口から聞きたかったからだ。

「なあ、親父」

「うん？どうした」

聖慈は席をたつたがもう一度座って章吾に話しかけた。

「本当にいいのか？俺が雫と一緒に暮らしても」

「どうした？またそんなことを聞いてきて？」

「さつきは雫がその場にいたからもしかしたら本当のことを言えなかったんじゃないかなと思って」

章吾が気をつかったんではないのかと聖慈は考えていた。

章吾はそんな聖慈の姿を見て少し嬉しかった。

そういった大人の気遣いができるようになったのだと聖慈の成長が嬉しかった。

「さつきも言ったとおり俺はお前だったら構わないよ」

「そうか」

聖慈はその言葉に安堵の表情を浮かべた。

その顔を見て章吾はさらに言葉が続けた。

「お前だったら雫を傷つけたりしないだろう？雫のことを大事に思っ
て行動もできる。雫も聖慈のことを頼りにしてるのは見てて分かる
からな」

「まあ…雫の泣き顔は見たくないからな」

「だろ？だからお前にだったら任せれるんだ」

章吾の言葉に聖慈はこれからの自分の生き方に責任を感じた。

これから自分が雫を一番近くで守っていくことになる。

今までは章吾と真美という親がいたから困ったときは二人に聞いたこともあった。

だが、これからは章吾も真美も日本にはいない。ということは優慈と雫の親代わりとは言わないが支えていくことになるのは確かだ。

聖慈のそんな不安を感じたのか章吾は聖慈に声をかけた。

「そんなに気張る必要はないさ。お前はお前らしく二人を支えていけばいい。優慈ももう一人前だよ。困ったときは二人で力を合わせて雫を支えていけばいいんだよ。誰だって最初から親になれるわけではないんだから」

聖慈はその言葉に救われた気がした。

確かに聖慈は聖慈だ。どんなに頑張ったって章吾や真美になれるわけではない。

だから聖慈らしく二人を支えていけばいいんだと気づいた。

「そうだな…。確かに親父の言うとおりだ。俺は俺だ。俺らしく二人を支えていくよ」

「それでいいんだよ。お前は今でも十分二人の心の支えになってるよ」

「そうだといいいんだけどね」

それから二人が世間話をしていると準備を終えた雫たちが合流してまた家族団らんの時間が始まった。

聖慈と優慈がふざけあっている。

雫がそんな二人を笑いながら止めている。

章吾と真美が3人を見て微笑んでいる。

そんな時間がその日の夜遅くまで続いた。

次の日の朝、優慈は仕事のため先に家を出た。

優慈を除く家族全員で朝食を食べ、聖慈と雫は家に帰ることにした。

「聖慈。俺の車使っていいぞ。どうせ向こうでは使えないからな」
「本当に？じゃあありがたく使わせていただくわ。丁度車を買おうかと思ってたし」

章吾から車を譲り受けた聖慈は雫の荷物を車に載せた。

「じゃあ、明日は見送りに行かなくていいんだろ？」

「ああ、ちよくちよく帰ってくるからな。別に見送りが欲しい年でもないしな」

「確かにそんな年ではないな」

聖慈と章吾が話していると真美と雫が歩いてきた。

「じゃあ聖慈。雫のことよろしくね」

「分かってるって」

「お父さんもお母さんも気をつけてね」

「分かってるよ。じゃあまた今度な」

「ああ。また今度」

そっいつて聖慈は運転席に、雫は助手席に乗り込んだ。

雫がシートベルトを締めたのを確認して聖慈は車を発進させた。

聖慈が運転している車が見えなくなった後真美が章吾に笑いながら話しかけた。

「あの二人これからどうなるか楽しみね」

「まあな。兄妹の梓から出れるかが鍵だろうな。後は聖慈の行動一つだろうな」

「今度帰ってくるのが楽しみね」

そういつて二人は仲良く明日に向けての準備をするために家に入っていた。

聖慈と雫は途中で昼食の買い物をして聖慈の部屋に入った。

「じゃあ雫はこの部屋を使ってくれ。自由に使ってくれて構わないから」

「うん。ありがとう。…あ、お兄ちゃん」

「うん？どうした」

雫の部屋から出て行こうとした聖慈を雫が引き止めた。

「これからよろしくね」

「ああ、こっちこそよろしくな」

こうしてまた聖慈と雫の同居生活が始まった。

第十四話 兄と妹の同居生活開始（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第十五話 妹の文化祭

聖慈と雫と一緒に生活を始めて一ヶ月が過ぎた。

雫は最後の高校生活を中心にこの1年を過ごしたいようです。学業優先で女優業をしている。

聖慈と雫は可能な限り一緒にご飯をとるようにして、朝食の時にはその日の予定を話し合ったりしている。

次の日に朝早く仕事があるときは夕食のときに話すようにしている。

今日は日曜日。

聖慈は昨日夜遅くまで借りてきたDVDを見ていたので朝起きたのは8時を過ぎたころだった。

聖慈はリビングに向かったがいつもはそこにいるはずの雫の姿が見当たらない。

「おかしいな」と思った聖慈だが昨日の夕食のときの会話を思い出して納得した。

昨日の夕食のときに雫はこう言っていた。

「お兄ちゃん。私明日ちょっと学校に用事あるから朝ごはん先に食べるね」

「明日は日曜日だろ？なんで学校になんか行くんだ？」

「ちょっとね…」

「ふうん。まあいいや。帰りはいつごろになるんだ？」

「まだ分からないよ。友達と遊んだりするかもしれないから遅くなると思う」

「分かった。なるべく早く帰るようにしろよ」

「うん」

聖慈はそのことを思い出して自分の食事の準備して朝食をとった。聖慈が自分の皿を洗っていると聖慈の携帯電話が鳴った。

ディスプレイには『智子』と出ている。

智子というのは聖慈の高校のときの同級生だ。

彼女は聖慈が芸能界にいたときも芸能界を辞めたときも特に気にせず一人の「伊集院聖慈」として接してくれた数少ない友人の一人だ。

珍しいなと思いながら電話に出た。

電話から30分後聖慈は駅前にいた。

智子に電話で呼び出されたのだ。

聖慈が携帯をいじっていると足に衝撃を受けた。

足のほうを見ると5歳ぐらいの男の子が足に引っ付いて聖慈の方を見上げている。

聖慈はその子供のことをよく知ってるので抱き上げた。

「陸！久しぶりだな。今いくつだ」

「もう5つだよ。せいじもげんきだったか」

「『せいじ』じゃなくて『せいじにいちゃん』だろ」

「おまえなんかせいじでじゅうぶんだい」

二人が話していると陸の母親がこっちに近づいてきた。

「ごめんね、急に呼び出して」

「いや、俺も暇だったから別に構わないさ」

陸の母親は智子だ。

彼女は20の誕生日を迎えるとすぐに結婚し、陸を産んだ。その智子からの今朝の電話の内容はこうだ。

「今日、私達の高校で文化祭があるらしいんだ。それで、陸も連れて行きたいんだけど伊集院君今日暇？よかったら付き合っただけ欲しいんだけど？」

聖慈は雫が今日学校に行く用事は文化祭だったのか。雫の学校での姿を見たことが無い聖慈は二つ返事でOKを出した。

というわけで二人は高校に近い駅で待ち合わせをしたというわけだ。

「じゃあ行くか？」

「そうね。丁度催し物も始まった頃だと思っし」

聖慈と智子の間に陸が入り、聖慈と智子と手をつないだ。その絵はいかにも「家族」という感じがした。

二人が高校に着くとすでに文化祭は始まっておりその高校の生徒や父兄、それに外部の生徒達で溢れ返っていた。

「うわゝ、すっげえ人だな」

「私達のときはこんなに人はいなかったのにね」

聖慈は陸が迷子にならないように肩車をして校舎の中に入った。

聖慈と智子が校舎の中を進んでいるとやけにこっちを睨んでくる男子生徒を見かけた。

「ねえ、伊集院君をえらい睨んでる生徒がいるけど知ってる？」

「いや、卒業してからあまり来てないしな」

聖慈と智子が話しているとその男子生徒はこっち側に睨みながら歩いてきた。

聖慈と智子の目の前に来ると男子生徒は止まって聖慈を睨みつけながら話しかけてきた。

「あんた妻子持ちだったのか。じゃあ伊集院から手を引けよ」

聖慈はその言葉でこの男子生徒のことを思い出した。

この生徒は以前雫を迎えに来たときに聖慈に文句を言ってきた奴だ。確か名前は…山本だった気がする。

「あんたこの人の奥さん？あんたの旦那さん女子高生に手出してるよ」

智子は何が何だか分からないように聖慈の方を困ったように見てくる。

聖慈はその視線を受けて苦笑いを零した。

そして山本のほうに向き返した。

「悪いけど俺ら来たばっかだからいろんな所を見たいんだ。じゃあな」

そういつて聖慈は山本の横を通り過ぎた。智子もその聖慈の後を追っていった。

山本は聖慈の後ろ姿を睨みつけていたがすぐに自分の教室のほうに向かっていった。

智子は聖慈の横に並びながら話しかけた。

「伊集院君、女子高生に手出したの？」

「そんなわけないでしょうが。あいつが言った生徒の名前は？」

「え？確かイジユウインって。あれ？もしかして」
「そ。あいつが言ってたのは俺の妹の雫だよ」

智子はまだ雫本人に会ったことがないが聖慈や智子の旦那から話は聞いていたので雫の存在自体は知っていた。

「じゃあ、妹に…」

「なんでそうなるかな…。迎えに来たときにちよつと虫除けをしただけだよ」

「なんだそうなんだ」

聖慈と智子はそんな言葉を交わしながら懐かしい校舎を見て回った。

そのころ雫のクラスでは喫茶店を催していた。

女子生徒がウェイトレスとして注文をとり、男子生徒が厨房でコーヒーや紅茶を作るのだ。

雫が休憩をとっていると山本が教室に戻ってきた。

山本はすぐに雫のそばにやってきた。

「おい、伊集院。この前迎えに来てた男が来てるぞ」

「え？お…聖慈さんが？」

雫は学校では『お兄ちゃん』ではなく『聖慈さん』として呼ぶようにしている。

この前聖慈が迎えに来てたときの騒動を見ていた友人のアドバイスだ。

その友人の名前は優奈。

彼女は雫の小さい頃の幼馴染で聖慈や優慈とも面識がある。

だから聖慈の行動が虫除けと分かり、雫に学校では『聖慈さん』と

呼ぶようにアドバイスしたのだ。

雫は芸能人ということで人気もある。それに加えて、誰にも優しいので勘違いする男子生徒がたくさんいるのだ。

だが、聖慈の行動と優奈のアドバイスによってその数はだいぶ減ってきている。山本のようにまだ諦めきれない生徒もいるようだが。

「ああ、奥さんと子供と一緒にな」

「え？聖慈さんには奥さんなんかいないよ」

「お前がそう思ってるだけなんじゃないか？現にあいつは女の人と子供が一緒だったぜ？」

雫はその言葉にショックを隠し切れないようだ。

当然聖慈に子供がいないことは雫は知っている。

だが、彼女という存在はいるかどうかはよく分からない。

雫がショックで呆然としてしていると表で注文をとっていた優奈が雫を呼びに来た。

「雫！聖慈さんが来てるよ！」

雫はその言葉にビクッと反応した。

優奈は雫の反応がおかしいことに気づいた。

いつもならすぐに聖慈の所に行くはずなのに何故今日は行かないのだろう…

優奈はもう一度言葉をかけた。

「雫？どうしたの…？」

「ねえ…優奈ちゃん。聖慈さん一人だった？」

「うっん。友達と友達のお子さんと一緒だったよ？」
「そう……」

雫はその言葉にもう一度落ち込んでしまった。

優奈は雫のその落ち込みように違和感を感じた。

とりあえず雫を聖慈さんのところに連れて行かないと話にならない
と考えた優奈はもう一度言葉をかけた

「何があつたかは知らないけど聖慈さんは雫が来るのを待ってるよ
？私も一緒に行くからさ、ね？」

雫は優奈のその言葉にうつむいていた顔を上げた。

そして前を見ると笑顔の優奈の顔が見えた。

その顔を見て勇気が出た雫は優奈と一緒に聖慈のところに行った。

山本もその後ろをついていく。

第十五話 妹の文化祭（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/in|th|s|sky>

第十六話 妹の誤解

聖慈達は校舎内を一通り見回った後どこに行くか相談していた。すると智子が雫を見てみたいと言いつ出した。

「さっき話に出たから私も見たい。いいでしょ？」

聖慈としては別に断る理由もないので雫のクラスに向かった。教室にはすぐに入れた。

聖慈と智子と陸が案内された席に座ると一人の女子生徒が向かってきた。

「聖慈さん！久しぶりですね」

「優奈ちゃんも相変わらず元気そうだね」

優奈は聖慈のことがすぐに分かったようで注文を受けにきたようだ。

「雫は？」

「今休憩中なんです。呼んできましょうか？」

「是非お願いします！」

二人の会話に智子が割り込んできた。

いきなりの乱入者に聖慈は苦笑いを優奈は驚いている。

「聖慈さん、こちらの方は…？」

「あ、ごめんなさい。この学校の卒業生です。こっちは私の息子の陸です」

「雫の話題が出たら会いたって言い出してさ…。悪いけど雫呼んできてくれる？」

「分かりました。ちょっと待っててくださいね。あ、先に注文取りますね」

聖慈と智子はコーヒーを、陸はオレンジジュースを頼んだ。

優奈は注文をとりその注文を男子生徒に告げた後、裏に雫を呼びに行った。

「あのな、お前もう少し考えろよ」

「え？何を？」

「知らない人に急に話しかけられたらどんな人でも驚くに決まっているだろう」

「それもそうだね」

智子はそういつて「あははっ」と笑ってる。

聖慈はそんな智子を見て頭を抱えた。

「それでも本当に一児の母親か？」と思うほど智子は天然だ。そんな智子の旦那さんを同情する聖慈だった。

「ねえ、ママ。ぱぱは？」

「さっきメールしたからもうすぐここに来るわよ」

「へ？いつのまに？」

「伊集院君がさっきの知り合いの子と話してる間よ」

聖慈と智子が話していると優奈が雫を連れて戻ってきた。後ろには山本もいる。

雫の様子が何だかおかしいことに気づいた聖慈だったがとりあえず声をかけた。

「よお雫。なんで今日文化祭だって言ってくれなかったんだ？」

「…今まで来なかったから別にいいかと思って」

「こいつから電話がなかったら俺知らなかったよ」

そう言つて聖慈は智子を指さした。

そんな些細なことでも今の雫にはショックが大きい。

雫が落ち込んだのが分かった聖慈が雫に声をかけようと思ったとき智子が先に声をかけた。

「あなたが雫ちゃんね。話は聞いてるわ」

そういつて雫の手を掴む智子に雫は呆氣に取られてる。

そんな雫に気づかないのか智子はさらに話を続ける。

「ずっと話は聞いてたけど会ったことないからすぐ会いたかったのよ」

雫はいまだ呆然として智子のほうを見つめた後、聖慈に助けを請うような視線を送った。

聖慈は雫に視線に気づいて智子に自己紹介するように言った。

「あ、ごめんなさいね。名前も言わずに。私の名前は…」

「あ！ぱぱだ〜〜！」

智子が名前を言おうとしたときに陸が突然立ち上がり教室のドアに向けて走り出した。

その先には一人のスーツ姿の男が立っていた。

その男は陸を持ち上げ聖慈達のテーブルに近づいてきた。

「悪いな、聖慈。こいつらを連れてきてくれて」

「別にいいよ。俺も暇だったし」

「陸がどうしても今日文化祭に来たいって言い出したからな。智子

一人だったら心配だったからな」

「それで俺に付き添いを頼んだってことか」

「まあ、そういうことだ」

「ふうくん。ん？」

聖慈は周りがやけに静かだなと思った。

その教室にいる聖慈、大竹、陸、智子を除く全員が固まっている。みんな大竹と大竹が抱えている陸に視線が釘付けになっている。

「雫？どうした？」

とりあえず聖慈は雫に話しかけた。

だが話しかけた雫ではなく優奈が口を開いた。

「えくくく！？大竹先生結婚してたんですか！？」

「まあな」

大竹は耳を塞ぎながら答えた。

「教え子と結婚してしかも子持ち！？」

「まあ、そういうことだな」

雫はそんな二人の言葉を聞きながら智子が聖慈の彼女ではないということに安心していた。

そして今日始めて聖慈に満面の笑顔を見せた。

そんな雫の笑顔を見て聖慈も笑顔を見せた。

山本はそんな聖慈と雫を見て面白くない顔をしてまたどこかに行ってしまった。

それから大竹と智子の話で喫茶店どころの話ではなくなった。

大竹と智子が出会いなどを話してる間陸は雫に付きっ切りになっていた。

終いには「雫と結婚する」とまで言うようになった。

これには大竹と智子、聖慈は爆笑し雫は困ったように笑った。

文化祭終了後、聖慈と雫は近くのレストランで食事をとった後部屋に戻った。

風呂に入ろうと立った聖慈だが文化祭で雫の様子がおかしかったことがまだ気になっていたので雫におかしかった理由を聞いてみた。

「ところで、雫？」

「え？何？」

「今日なんかおかしかっただろう？なんかあったのか？」

「え！？別にどうもしてないよ」

雫は「まさか智子が聖慈の彼女かと思って嫉妬してました」とは言えないのでなんとかごまかそうとした。

聖慈は雫がごまかしてるのがすぐに分かったが重大なことではないのだろうと思いそのまま風呂に入ってしまった。

雫はそんな聖慈の後ろ姿を見て安堵の息をついた。

そして今日智子と別れる際に言われた言葉を思い出していた。

「雫ちゃん。伊集院君のこと好きでしょ？頑張ってね」

「え！？何言ってるんですか！？」

「んー、じゃあこれから言うことは私の独り言と思って聞いてね」
「……」

「まずねー、伊集院君だけどあんなに女性のことを心配してたのは珍しいと思ってね。妹ということもあると思うけどそれ以外にもなんかある気はするんだけどなー」

「…」

「次に雫ちゃんだけど、今日私に嫉妬してたでしょ？私には分かるよ。私もそうだったからね」

「え？どういことですか？」

「私も結婚するまでは嫉妬ばっかしてたし、相手は私よりも大人の人でしょ？だからどうしても大人ぶってしまうのよね。料理を頑張ったりね」

雫は思い当たる節があるのか頷いてしまった。

そんな雫の様子を見て智子は笑みを浮かべながら話を続けた。

「でもね、あの人が言ってくれたの。そんなに急いで大人になる必要はないって。いつでも大人になれるんだから今を大事に生きて欲しいって」

雫は智子の言葉に聞き入っている。

さらに智子は言葉を続けた。

「それから私は私らしく生活しようと思ったの。そうするとあの人はそんな私を受け入れてくれたの。だから雫ちゃんも雫ちゃんらしくしてればいいのよ。伊集院君もそんな雫ちゃんも受け入れてくれると思うわ」

「でも…」

「もしかして年の差を気にしてるのなら全然問題ないわ。だって私と先生は10歳違うのよ。だから大丈夫よ」

雫は智子の言葉に勇気をもらった。

聖慈への気持ちがどういものかは雫自身掴めていないが雫らしく生きていこうと思った。

雫は智子と連絡先を交換して分かれた。

雫は布団に入った間も智子の言葉を繰り返し思い返していた。

第十六話 妹の誤解（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/in|th|s|sky>

第十七話 兄の事情

雫の高校の文化祭から数週間後だった。

あれから聖慈と雫は特に何の関係の変化もなく日常を送っている。

聖慈は今営業から会社に帰ってきて食堂で食事をとっている。

いつもは雫が弁当を作ってくれるが今日は仕事で朝早かったので弁当はない。

食堂で食事をとっていると友人の彰人が聖慈の方に近づいてきた。

彰人は中学、高校と一緒に大学は離れたがまた会社で一緒になった友人だ。

「よお、伊集院。社食とか珍しいじゃないか」

「たまにはいいだろ」

彰人は軽口をたたきながら聖慈の隣の席に座った。

「お前に頼みがあるんだが…」

「俺に？」

彰人が聖慈に飯を食べながら頼んできた。

この態度を見る限り大事な頼みごとではなさそうなので聖慈は頼みの内容を聞いてみた。

「俺にできることならいいよ。で、何を頼みたいんだ？」

「お前今週の金曜日暇か？」

聖慈は週末の予定を思い出した。

土曜日か日曜日は大竹と智子にもお願いを頼まれているが金曜日は

特に何もなかった気がする。

「ああ、今のところは特に何もないけどどうした？」

「実は金曜に合コンがあるんだが…」

「却下！」

聖慈は彰人の口から『合コン』の言葉が出た瞬間に返事をした。

聖慈は合コンが大嫌いだっただ。

以前にも大学のときに合コンに出たことはある。

が、女性陣が付きまってくるのが聖慈には耐えれなかった。

それ以来合コンには行かないことにしている。

「なあ、頼むよ。お前今彼女いないんだし前の彼女だって合コンで知り合っただろ？」

「それとこれとは別問題」

確かにその合コンで聖慈は一人の女性と付き合いようになった。

その女性は皿を片付けたりする何気ない仕草が誰かに似てたので好感を持ったのだ。

だが交際を始めてすぐにその女性は聖慈を束縛しだした。

付き合いだして一ヶ月持たず聖慈はその女性と別れた。

聖慈をどうしても誘いたいのか彰人は引き下がない。

「お前が来ないと女性陣が来ないらしいんだよ。ほら、前に一回俺の友達と街で会っただろ？」

「ああ、そういえば…」

聖慈はそのときのことを思い出した。

その日は聖慈は彰人と昼飯を食べに外に出た。

そのときに彰人の友人にバッタリ出会わしそのまま一緒に食事をと

った。

写真も撮られた覚えがある。

「あいつの友達や知り合いにお前の写真を見せたらしいんだ。そしてたらお前が来るなら合コンしていいって言っただよ。なあ、頼むよ」「やだね」

「頼むって。俺もその中に好きな子がいるんだ。だからチャンスが欲しいんだ。頼む！」

彰人はそういつて頭を下げた。

聖慈はその姿を見て悩んだが、仕方無いとため息をついた。

「分かったよ。ただし条件がある」

「聞く聞く！来てくれるならなんでも聞くぜ！」

「少しでも気に入らないことがあったら俺はすぐに帰るから。それに二次会があっても俺は一次会で帰る。いいな」

「ああ、いいよ」

そういつて聖慈は合コンの詳しい場所と時間を聞いて食事を終え仕事に戻った。

彰人はその後姿を見送って安堵の表情を浮かべた。

大仕事を終えた感があるのは間違いではないだろう。

そして、金曜日の朝。

いつもどおり聖慈と雫と一緒に朝食を食べている。

聖慈は雫にまだ合コンのことを言っていないことに気づき雫に今日のことを伝えた。

「雫。今日俺夕食いらないから」

「え？どうして？」

「今日メンバー合わせの合コンに参加することになってるから。合コンたつて言っても俺は酒を飲んで食べるだけだ」

「ふうん。分かった。帰りは何時ごろになりそうなの？」

「遅くても10時には帰ってくるよ」

「分かった」

そしてまた聖慈と雫は食事を続けた。

そしてその日の仕事終了後、彰人は聖慈のところに来てきた。

「おい、伊集院！早く行くぞ」

「そんなに慌てるなつて」

彰人は聖慈を急かす。

反対に聖慈は彰人をなだめながらゆっくり準備をしている。
準備を終えた二人は合コン会場に到着した。

合コン会場は会社近くの居酒屋だ。

聖慈と彰人はのれんをくぐり予約していた席に向かった。

他の男性陣は主に彰人の大学の友人達だそうだ。

聖慈と彰人が一番遅くに到着したらしくすでに他のメンバーは座っているらしい。

聖慈と彰人の姿が見えたのか見た覚えのある女性が二人を呼んでいる。

「彰人遅い！早くこつちよ」

「悪い悪い。こいつが遅くて」

と彰人は聖慈の方を指差して言った。

聖慈はムカツときたが彰人の顔が「頼む」というような顔をしてるのでとりあえず聖慈は謝った。

「遅れてごめんね」

聖慈は心にも思っていないことを言いながら今日の相手を見渡した。そこには見たことのある顔が二人いた。

特にビールを持っている一人に聖慈の視線は釘付けになった。

第十七話 兄の事情（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第十八話 妹の事情（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります。
お酒は20になってから飲みましょう

第十八話 妹の事情

金曜日、雫はいつもどおり朝食の準備をして聖慈を起こした。雫と聖慈が朝食を食べていると聖慈が思い出したように話しかけてきた。

「雫。今日俺夕食いらないから」

「え？どうして？」

「今日メンバー合わせの合コンに参加することになってるから。合コンたって言っても俺は酒を飲んで食べるだけだ」

「ふうん。分かった。帰りは何時ごろになりそうなの？」

「遅くても10時には帰ってくるよ」

「分かった」

そういつて朝食を続行した二人は準備を終え聖慈は会社へ、雫は学校に行くためにマンションを出たところで分かれた。

雫が教室に着くと山本が一番に話しかけてくる。

「伊集院おはよう！」

「山本君、おはよう」

雫は満面の笑みで挨拶を交わす。

山本の顔には少し赤みが増した。

山本がまた話しかけようとしたところに優奈が飛び込んでくる。

「しつずく~~~~！おはよう~~~~！」

朝からハイテンションな優奈に笑みを零しながら優奈にも満面の笑

みで挨拶をする。

「優奈ちゃんもおはよう」

そういつて雫と優奈は二人で自分の席のほうに向かつていった。途中優奈は山本に「ニヤリ」と意地悪な笑みを浮かべて。山本はその顔にイラツとしながら自分の席に戻っていった。

「雫も優奈もおはよう！」

「夏美ちゃん、おはよう」

そう言つて雫は夏美の横の席に、優奈は雫の後ろに座る。3人は席が近いのだ。

「ねえねえ、雫と優奈今日暇？」

「うん。暇だよ」

「私も何も無いよ」

「じゃあ、合コン行かない？お姉ちゃんに人数合わせに頼まれちゃつてあと二人誘わないといけないの」

夏美が言うには8対8で合コンするが女性陣の人数が足りないらしい。

そこで仲がいい友達を誘うように姉に頼まれた夏美が雫と優奈を誘つたのだ。

「でも、私カレシいるよ？」

優奈には彼氏がいる。

その彼氏は特殊な仕事をしてるのでなかなか会えないが会えたときには物凄く甘えるので特に気にしていない。

「いいっていいって。居酒屋だけど私達は会費なんかいらなくて言ってるし。ただお食事会と思えばいいんだよ」

「私は別に構わないよ。雫は？どうする？」

「うん…今日は聖慈さんもないし、行くよ」

「二人ともありがとう！じゃあ放課後に私の家に行って化粧とかしないかね。大学生ってことで行くから」

「うん。分かった」

「オッケー！」

そういつて3人は今日の合コンの事を話題に話した。

一応聖慈にメールを送ったほうがいいと考えた雫はメールを送信した

「今日私も遊んで帰るので遅くなります 雫」

5分ぐらいして聖慈から返信があった。

「了解。気をつけてな 聖慈」

普段メールなどをしない二人なので新鮮な気持ちになった雫には笑みが浮かんだ。

その顔を見た優奈は相手は聖慈だと気づき優奈にも笑みが浮かんだ。

放課後3人は夏美の家に来ている。

化粧などを夏美の姉にしてもらったためだ。

「お姉ちゃん連れてきたよ」

「お、夏美。あんたの友達かわいいね」

夏美の姉の春美は雫と優奈を見ながら言った。

「じゃあ、まずは…この子からしよっか」

そついつて最初に雫を自分の前に連れてきた。

「動いちゃ駄目よ」

春美はそうだったが、雫は小さい頃からメイクを仕事でもらっているのだ。じつとしてるのも慣れたものだ。

春美のメイクの腕はプロには劣るがそれでもかなりの腕前だというのは雫には分かる。

「はい、完成！次はあなたよ」

雫のメイクが完成したので次は優奈を相手にメイクをさせた。雫と優奈には可愛い系のメイクを施した春美は満足そうだ。

「うん！私の腕も捨てたもんじゃないわね」

それから服を着替え4人で合コン会場である居酒屋に到着した。4人が一番最初に着いたらしく春美がこれから来る男性陣のことを話してくれた。

これから来る男性陣は友達の大学の友達が多く、それ以外にも一人来るらしい。

雫はこの合コンで彼氏を作る気はないがそれでもどんな人が来るかは楽しみだ。

それから少しずつ女性陣が集まり、女性陣が全員集まった時点でまだ男性陣は一人も来ていない。

女性陣が集まって5分後ぐらいたってから男性陣が集まってきた。

「遅いわよ！」

「仕方ないだろ。後二人来るから待ってたら先に行っててくれって言っただから」

「ふう〜ん。じゃあ先に始める？」

そういつて春美は乾杯の音頭をとった。

雫もオレンジジュースを片手に乾杯をした。

男性陣の一人が雫に話しかけてくる。

「君かわいいね。年いくつ？」

「じ…21です」

雫は危うく「18です」と言いそうになったが大学生という設定なので21と答えた。

隣では優奈も21として答えてるようだ。

「ふう〜ん、じゃあお酒飲もうよ」

「いえ…私は飲んだこと無いので」

「何事も経験だつて」

そういつて男は勝手にアルコールが入っている飲み物を頼んで雫に渡した。

「はい、これ」

「でも、私本当に…」

「一口でもいいから飲んでみてつて。ね？」

雫が断つても男は引くきはないらしくどうしても雫にお酒を飲ませたいようだ。

仕方なく雫が口に含むとアルコールの味はせず、とてもおいしかった。

「あ、おいしい」

「でしょ？これ俺のお勧め」

そういつて男は笑顔を見せた。

その笑顔を見て雫も笑顔を見せた。

雫がそのお酒を飲み終わった後、今度はビールを男は渡した。

「はい、じゃあ次はこれ。ちょっと苦いかもね」

雫が一口ビールを飲んだときに春美が立ち上がった。

「彰人遅い！早くこつちよ」

「悪い悪い。こいつが遅くて」

と彰人と呼ばれた人はもう一人の男を指差して言った。

「遅れてごめんね」

そういつて女性陣を見渡している。

そこでお酒を持っている雫を見て固まった。

その男は伊集院聖慈、雫の兄だった。

第十八話 妹の事情（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第十九話 兄の怒り（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります
お酒は20になってから飲みましょう

第十九話 兄の怒り

聖慈と雫はお互い見つめ会ったまま固まっている。
その二人を見て彰人は話しかけた。

「あれ？伊集院。彼女と知り合いなのか？」

「まあな」

聖慈はそういつて雫のとなりに座っている男に話しかけた。

「悪いけどその席変わってくれないか？」

「あ？何言ってんだ？」

「な？頼むって」

聖慈の言葉は低姿勢だったがその顔には怒りの表情が浮かんでいる。
雫はその聖慈の顔を見ておびえている。

まさか、聖慈と同じ合コンに来るとは思っていなかったのだ。

「悪いけど変わってやってくれないか？」

聖慈と男が睨みあっていると彰人が助け舟を出した。

男は彰人に頼まれたので仕方なく席を移動した。

聖慈が雫の隣に座ったのを優奈が見かけて声をかけた。

「あれ？聖慈さん。なんでこんなところに？」

「彰人に頼まれてね。人数合わせだよ。ところで…」

聖慈は優奈に笑顔で話しかけていたが雫に向き直ったときには笑顔

の下に怒りの表情が見えた。

優奈はその顔を見てこれ以上は話しかけないようがよいようだと思
い食事を再開した。

「雫さん。友人と遊んでるはずの君がどうしてこんなところにいる
のかな？」

「えっと…、私も友達に頼まれて…」

「ふん。じゃあどうして君がお酒を飲んでるのかな？」

「あのね、その…」

「うん？何？」

聖慈は満面の笑顔を見せて雫に尋問をしている。
それを見て雫はもう逃げれないと思った。
そこに雫に酒を勧めた男が戻ってきた。

「おい！雫ちゃんが困ってるだろうが！」

「雫？こんな奴に『ちゃん』づけさせてるの？」

聖慈は男が『雫ちゃん』と呼んでるのを聞いてムカツと来た。
雫はまだ困っている。

「雫ちゃん、こんな奴なんか放つといて俺と二人で抜け出さない？」

「ごめんなさい、それは無理です」

雫はその言葉はすぐに否定した。
そして聖慈に向き合った。

「お酒を飲んでごめんなさい！」

「うん。分かればいいんだよ。じゃあこのビールは俺がもらうね」

そういつて聖慈は雫が持っていたビールを飲んだ。

そのビールは雫が一口飲んでいたので間接キスになる。

そんなことを知らない聖慈はゴクゴクとおいしそうに飲んでいる。

その横で雫は間接キスだと気づき赤くなっている。

男はそんな光景が面白くないようで聖慈に敵意の視線を送っている。

聖慈は男の視線に気づいてるが無視して雫や優奈に話しかけている。
そこに女性陣が集まってくる。

「ねえ、伊集院さんそんな子供より私達と飲みましょうよ？」

「そうですね」

聖慈はそんな女性陣を笑顔で交わしている。

「いえ、俺はここでゆっくりこの人たちと食事してますよ」

「ええ、何ですか！」

「そんな子供のどこがいいのよ！」

その言葉に今までゆっくり食事をしていた聖慈がキレた。

「あなたたち今の自分達の姿を鏡で見てみてください。とても醜い姿を見れることでしょうね。私が言ったことが気に障ったのなら謝りますがこの子達を馬鹿にするのは許せない」

そういつて聖慈は女性陣を睨みつけた。

そして財布の中からお金を取り出して立ち上がった。

「おいおい、伊集院。もしかしてもう帰る気か？」

「言っただろ？俺は気にくわないことがあったら帰るって」

「いや、だからって来たばかりで」

彰人が聖慈を引き止めてると雫に酒を勧めていた男が割り込んできた。

「いいじゃないか、彰人。帰りたい奴は帰らせれば」

「ほら。そういつてる人もいるんだしね」

「おい、伊集院！」

聖慈は彰人が止めるのを聞かず帰る仕度を終えた。

「雫。帰るぞ」

聖慈は当然の如く雫に帰るように言った。

その言葉にまた男が気に触ったようで聖慈に詰め寄った。

「おい！雫ちゃんはまだここにいるんだよ！一人で帰れ！」

「悪いけどそれは無理だな。俺は雫の両親に雫を頼まれてんだ。ま

あ、雫がここにいたいんなら別にいいけどね」

聖慈は雫が帰るのかここに残るのか問いかけた。

すでに雫の中では答えは決まってる。

「帰るからちよつと待って」

そういつて雫も帰り支度を始めた。

聖慈は続いて優奈にも話しかけた。

「優奈ちゃんはどうする？」

「一緒に帰ってもいいですか？」

優奈も雫と一緒に帰り仕度を始めた。

二人が帰り仕度をしている間聖慈は携帯で誰かとメールのやりとりをしている。

二人の帰り支度を終えたのを確認して聖慈は二人を店から出して彰人と春美に向き合う。

今まで二人と話してた聖慈の顔とは一転してその顔には怒りの表情が浮かんでいる。

「人数合わせにあの子達を使っているのか？あの子達の友人もこの中にいるんだろ？」

聖慈に問いかけられて夏美が手を上げた。

聖慈は夏美にも厳しい視線を送る。

「別に君が何しようとか俺は構わない。でも、あの子達をもうこんな場所に連れてくるのは止めてくれ。それから君ももう帰りなさい」

聖慈が言った事を夏美はコクコクと頷いている。
さらに聖慈は雫に酒を勧めた男をにらみつけた。

「おい、お前も断られたのに酒を勧めるのは止める。雫は最初断ってたんじゃないか？」

「確かに断られたがおいしそうに飲んでたからいいじゃないか！もう21なんだろ！」

聖慈はその言葉を聞いて呆れたように彰人と春美に向きあった。

「年を誤魔化してたのか？」

彰人は何がなんだか分からない顔をしてたので知らなかったのだろ
う。

春美は申し訳ないように顔を下げた。

それを見て、聖慈はため息をつき男に向きなおした。

「あの子達は１８だ。それにその子も友達だから１８だろ」

男はその言葉に顔が青ざめていく。

その顔を見て聖慈は店の外に出て行く。

残ったメンバーは困惑の表情を浮かべている。

彰人が慌てて聖慈の後を追ってくる。

「伊集院！」

聖慈は彰人を振り返った。

聖慈は彰人は何も知らされていなかったのだと分かってるのもう
彰人に対する怒りは無い。

「悪い！俺何も知らなくて…」

「分かってるって。さっきのお前の顔見てたら分かるよ」

彰人はその言葉に安堵のため息をついた。

そしてさっきから気になってることを聞いてみた。

「お前あの子達と知り合いなのか？」

「お前覚えてない？俺の妹の雫」

彰人は昔の事を思い出していた。

そつえば高校のときに聖慈の家に遊びに行ったときに妹がいた気

がする。

「ああ、若干うる覚えだけど覚えてるよ」

「さっきの雫だよ」

「じゃあ、もう一人は？」

「あの子も知ってるからな。それに彼氏の事も知ってるし」

彰人はそれで今までの聖慈の行動に納得できた。

あんなに聖慈が女性のことを守るのは珍しいからだ。

「じゃあ、雫たちが待ってるから帰るわ」

「ああ、悪かったな。二人にも謝っててくれ」

「了解」

そういつて二人は分かれた。

彰人は聖慈の後姿を見ながら思った。

さっきの聖慈の姿は嫉妬をしていた気がする。

妹を守ってるというよりも好きな人に馴れ馴れしい行動をとる男に
対して嫉妬をしている行動に見えた。

「まさかな」と思いながら彰人は友人達が待つ元のテーブルに戻った。

聖慈は彰人だからこそ全てを説明してくれたのだと彰人は思った。

だからあの友人達に説明してはいけない気がした彰人は頭を掻きながら友人達のところへ戻っていった。

第十九話 兄の怒り（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/inthisky>

第二十話 兄の不可解な感情（前書き）

この話には未成年の飲酒の記述があります
お酒は20になってから飲みましょう

第二十話 兄の不可解な感情

聖慈は雫と優奈が待っている場所に向かった。

二人はジュースを飲みながら聖慈が来るのを待っていた。

「悪い。遅くなった」

聖慈は謝りながら二人のそばによっていった。

「いえ、私のほうこそごめんなさい」

「何が？」

「雫を合コンに連れて行って」

聖慈は優奈が頭を下げて謝ってきたので優奈の頭を撫でながら答えた。

「優奈ちゃんのせいではないよ。雫が断ればよかったんだから」

そういつて聖慈は雫に厳しい視線を送った。

その視線を受け取った雫はビクッと反応した。

そのとき、見覚えのある車が聖慈達のすぐ近くに停まった。

それを確認した聖慈は優奈に向きなおして言った。

「それに優奈ちゃんはこれからお仕置きがあるんだから」

「え？」

優奈が「どういうことですか？」と聞こうとしたときに車から降りてきた男が優奈に近づいて叫んだ。

「優奈！」

「え？優慈さん！？」

優奈の彼氏は聖慈の弟の優慈だ。

1年前から二人は付き合っている。

小さい頃から知っている二人にいつからそういう感情が生まれていたか知らないが二人は両想いとなっていた。

「兄貴からメールがあって来てみればいったいどういうことだ！」
「えつと〜…」

「優慈、今はその辺にしておけ。とりあえず家に送ってくれないか。俺も雫にお仕置きをしないとイケないし」

聖慈は優慈をなだめながら雫に厳しい視線を送った。

とりあえず4人は車に乗り込んだ。

聖慈と雫を降ろした優慈はそのまま自分の部屋に帰っていった。

優奈がどんなお仕置きをされるかは知らないが…

聖慈と雫は部屋に入った。

聖慈は部屋着に着替え、同じように部屋着に着替えた雫を正座で座らせ聖慈もその前に正座で座った。

「さて、雫」

「は、はい」

雫はすでに恐怖でおびえているようだ。

聖慈としてはそんなに厳しいお仕置きをする気はない。

少し説教をするぐらいの気持ちだったのだ。

「そんなにおびえないで俺の質問に答えればいいから」

雫はその言葉にうなずいた。

「まず、何で今俺が怒ってるか分かるか？」

「お酒を飲んだから……」

「まあ、それもあるけど一番怒ってるのは嘘をついたことだ」

「あ……」

雫は思い当たった点があつたのだろう。

聖慈はさらに続けた。

「友達づきあいもあるのは俺だって分かるさ。でもな、遊びに行くとは聞いてたけど合コンとは聞いてなかったぞ」

「ごめんなさい。反対されると思って」

「反対はしなかったさ。俺だって行ったんだし。だが、嘘をついて行くのはさすがに俺だって怒るさ。しかも、行ったときにはすでに酒を飲んでたし」

「最初は断ったよ！」

「断って当然。でも、飲んだのは確かだろ？」

雫はその言葉に詰まった。

本当の事だから反論の仕様がなない。

「とりあえずこれから一切20になるまで外での飲酒は禁止！いいな！」

「はい」

「じゃあもういいよ」

「え？」

雫はこんなに簡単に許してもらうとは思えていなかったののでつい声を出してしまった。

そんな声を出した雫に聖慈は意地悪な顔をして話しかけた。

「あつれ〜、雫ちゃん。もしかしてもっとお仕置きをされたいの？」

「違うよ！でも、あれだけとは思っていなかったし」

聖慈はその言葉に笑みを零して雫の頭を撫でた。

「雫はこれ以上言わなくても別に大丈夫だろ？」

聖慈は雫を信用している。

確かに今日のはさすがに堪えた。

でも、聖慈の雫に対する信用はまだ消えたわけではない。

それに雫を束縛をしたくないのだ。

今の雫の年代はたくさんものを吸収できる大事な時期でもある。

だからたくさんの事をして、たくさんの事を自分で吸収して欲しいのだ。

「これから気をつけるから」

「よし、じゃあもう寝るか」

聖慈はそういつて自分の寢床に入った。

そして自分の居酒屋での行動を思い出していた。

何故自分はある言葉にムカついたのだろうか。

『そんな子供のどこがいいのよ！』

確かに雫が子供といえば子供だ。

だから何故あんなにムカついたのか分からない。

それは妹を馬鹿にされたのだと自分で納得した。

だが、何故あの男の行動にもムカついたのでろう。

一つだけ思い当たる感情があったが聖慈はそれを思い浮かべて苦笑いを零して眠りについた。

その感情の名前は『嫉妬』だった。

男に嫉妬してたのだとは考えたくない聖慈は夢の中に入ってしまった。

第二十話 兄の不可解な感情（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/inthisky>

第二十一話 兄と妹と時々子供

合コンの次の日の朝、雫は一人で朝食を食べていた。

聖慈に声をかけたが起きてこなかったので雫は一人で食べることにしたのだ。

休日に聖慈が朝食を食べないことは珍しくないのに雫は特に気にせず食べている。

雫は食べ終えた皿を流しに置き先に洗濯をすることにした。

洗濯機を回してる間に洗い物をしたほうが時間的に短いからだ。

雫が皿を洗い終わったときに部屋のインターホンが鳴った。

「はい、どちらさまですか？」

「しずくねーちゃん」

「え！？陸君！？」

インターホンから聞こえた声は智子の息子の陸だった。

急いでドアを開けると大竹と智子と大竹に抱っこされている陸が出迎えた。

「しずくねーちゃん！」

陸は大竹から降りて雫に抱きついた。

雫は何がなんだか分からないように大竹と智子に説明を求めた。

「先生に智子さん、一体どうしたんですか？」

「あれ？聖慈に聞いてない？」

「お兄ちゃんに？私は何も聞かされてないんですけど」

「おかしいな。頼みごとがあるって言ってたんだけど」

「ちょっと待っててください。今起こしますから」

そういつて雫は聖慈の部屋に入った。

聖慈はスヤスヤ寝息をたてて爆睡していた。

「ちょっとお兄ちゃん！」

聖慈は未だに夢の中だ。

そこに上がってきた大竹が入ってきた。

「悪いけど上がらせてもらったよ。聖慈はまだ寝てんの？」

「ええ……」

「伊集院。悪いけどちょっと下がって」

大竹は雫を少し下げらせ聖慈の近くに立った。

そして聖慈の腹めがけてエルボーを繰り出した。

「ぐは！？」

聖慈は今の衝撃でさすがに目を覚ましたが苦しんでいる。

それを見て大竹は笑いながら聖慈に声をかけた。

「聖慈おはよう」

「おはようじゃあないですよ。殺す気ですか？」

「お前が寝坊するのが悪い」

聖慈は大竹に口論で勝てる気がしないのでまず何故大竹がここにいるのか聞いてみた。

「先生、なんでここにいますか？」

「なんでっってお前に頼みごとをするからじゃあないか。言っただろ？」

そっといえばそんなことを言っただけがする。

「すっかり忘れてましたよ。でも前日に電話とかくれてもいいんじゃないですか？」

「言われてみればそうだな。今度から気をつけるよ」

大竹は笑いながら言った。

聖慈はそれを見て「似たもの夫婦め」と呆れたような顔をしている。

「で、俺に頼みたいことってなんですか？」

「今日一日陸をあずかってくれないか？」

「何ですか？」

「実はな……」

大竹が言うには今日大竹は大学の恩師のパーティがあるらしい。

それに智子は連れて行くが陸は面白くないだろうし、静かなパーティなので置いていくことにした。

最初は親戚の人に陸のことを頼もうとしたらしいが陸が「しずくねーちゃんがいい」と言ったので聖慈と雫に頼むことにしたというわけだ。

「俺は構いませんよ。雫は？」

「私も大丈夫です」

二人ともOKの返事を出したので三人は智子と陸が待つリビングに戻った。

雫の姿を見た陸が雫に駆け寄る。

「しずくねーちゃん！」

「陸君、私達と一緒に留守番しよっか？」

「うん！」

陸と雫が話してる間に聖慈は大竹夫婦と話している。

「いつごろ帰ってくる予定なんですか？」

「今日の夜、そうだな… 9時ぐらいには迎えにくるよ」

「分かりました」

「伊集院君、悪いけどよろしくね」

そういつて大竹と智子は出かけていった。

陸は雫にべったりひっついていてる。

聖慈と雫はそんな陸を見て顔を見合わせて笑みを零した。

「陸君、じゃあ何して遊ぼうか？」

「えっとね、サツカーがしたい」

「サツカー？」

「近くに公園があるからそこに行こうか？」

「そうだね」

そういつて聖慈と雫は陸を連れ添って近くの公園に行った。

公園に着くなり陸は雫の手をとって走り出した。

聖慈は陸と手を引っ張られながら楽しそうに笑っている雫を見て笑みを零しながら二人について行く。

雫と陸が公園で遊んでる間、聖慈はベンチに座ってその姿を見ていた。

いつか自分も家族を作ってこうやって遊んでるのだと思ってる自分を自分で笑ってしまった。

雫がこちら側に歩いてくる。

陸のほうを見ると周りの子供達と遊んでいる。

「あゝ疲れた」

「楽しかったんだからいいだろ」

「まあね」

雫はそう言って聖慈の隣に座った。

聖慈は前もって買って置いておいたジュースを雫に渡した。

雫はそれをゴクゴクと喉を鳴らしながらおいしそうに飲んでいる。

少しして陸も遊びつかれたのか聖慈と雫のほうに戻ってきた。

聖慈と雫の間に割り込んで座り、聖慈のほうを睨む。

「しずくねーちゃんはおくのおよめさんになるんだぞ！せいじはあ
つちにいけ！」

「はいはい、じゃあこのジュースはいらないな」

「え！？」

陸は聖慈の言葉に慌てている。

聖慈は意地悪な顔をしている。

雫はそんな聖慈の顔を見て、「渡してあげなよ」という顔をしている。

聖慈は陸の顔が泣きそうになっていくのを見てどんなにまかせても
子供は子供なんだなと笑いながら陸にジュースを開けて渡した。

陸は笑顔でそのジュースを飲んでいく。

聖慈と雫はそんな子供のくるくる変わる表情に笑みを零した。

聖慈たち三人が公園のベンチでゆっくり話しているとある一人の女性

が早足で歩いてきた。

その女性は聖慈達の前に止まった。

聖慈はその女性の顔に見覚えがあった。

その女性は聖慈の元カノだった。

第二十一話 兄と妹と時々子供（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

[http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
is|sky](http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
is|sky)

蘭様こちらのほうは誤字ではありません

分かりにくいかもしれませんが『「大竹」と「智子」と「大竹に抱
っこされている陸」』という意味だったのです
分かりにくてすいませんでした

第二十二話 兄と妹の無意識な行動

その元カノは聖慈に満面の笑みで話しかけた。

「きゃあ、聖慈君。久しぶりね。会いたかったわ」

「俺は会いたくなかったけどな」

聖慈は元カノにどっかいけというニュアンスで答えた。

だがそんな聖慈の嫌味には気づかないのか元カノはさらに話しかけてくる。

「こんなところで聖慈君何してるの？」

「お前には関係ないだろ」

聖慈は雫と陸と楽しい時間を過ごしていたのに元カノのせいで台無しになった。

その台無しにしてくれた元カノへの怒りは聖慈の顔を見ただけで雫には分かるほどだが元カノはまだ気づかないのか聖慈に話しかける。

「ねえ、こちらは妹さん？私は聖慈君の彼女の…」

「誰が誰の彼女だって？」

とうとう聖慈が怒りを元カノにぶちまけ始めた。

聖慈がこんなに怒ってるのを雫は見たことがないので驚いている。

「だから私が聖慈君の」

「彼女って言いたいのか？」

「だってそうじゃない」

「お前とは確かに付き合ったことがある。だが、もうすでに別れた

はずだ」

「私は別れた気は無いわ」

「雫、陸。行くぞ。こいつに説明してもムダだ」

聖慈はこれ以上元カノに説明してもムダだと判断し家に帰ることにした。

雫と陸を立たせ歩き始めたときに元カノが聖慈の手を掴まえた。

「どうして？もつと話しましょうよ」

「俺はお前と話すことは何も無い」

「いいじゃない。どうせ暇なんでしょ？」

聖慈は何言ってもムダだと考え元カノを無視して歩き始めた。

雫が聖慈の隣に並ぼうとした瞬間に雫を元カノが侮辱し始めた。

「あんたのせいよ！あんたみたいな子供が聖慈君に付きまとって
から聖慈君が困ってるんじゃない！」

「え？」

「あんた、どっか行きなさいよ！聖慈君はこれから私と遊ぶんだから」

そういつて雫を突き飛ばした。

雫がこけそうになったが聖慈がこける前に雫を抱きかかえた。

雫は聖慈にお礼を言おうと思いい顔を上げたが声が出なかった。

それほど聖慈の顔は怒りで満ちていた。

「お前いい加減にしろよ」

「だってその子がいるから私と遊んでくれないんでしょ？」

「お前が嫌いだから遊ばないんだよ！」

元カノはその言葉にショックを受けた様子もなくまだ聖慈に話しかける。

「何言ってるのよ。私達は恋人同士なんでしょ？」

「それは昔にとくに終わってる。それからお前は俺がここで何してるか気になっていたな」

聖慈はそういつて陸を抱き上げ雫の肩を引き寄せた。

いきなり引き寄せられた雫は顔が赤いが聖慈は気にせずに元カノに言う。

「家族サービスだよ。お前これ以上俺らの時間を台無しにしてみろ。殴るだけじゃ済まないからな」

そういつてそのまま公園を出ていく。

元カノは呆然とその後姿を見送っている。

聖慈は部屋に着いてまず雫と陸に謝罪した。

「悪かったな、二人とも。せっかく楽しい時間を過ごしてたのに台無しにしてしまった」

「ううん。悪いのはあの人だよ。お兄ちゃんは何度も邪魔するなつて言ってたのに気づかなかつたあの人がいけないんだよ」

雫は聖慈が悪いのではなくあの女の人が悪いのだと言った。
陸はすでに気にしていないようで雫に昼食をせがんでいる。

「しずくねーちゃん。ぼくおなかすいた」
「すぐ作るから待っててね」

雫と陸は二人連れ添って台所に消えた。

二人の後姿を見送って聖慈はため息をついた。

まったくあの元カノには付き合っていた頃から苦勞させられる。

少しでも他の女性と話ただけで嫉妬する。

さらに聖慈が元芸能人と知っていたのだろう。

どうしても聖慈を芸能界に戻したいようで勝手にオーディションに応募するほどだった。

聖慈はそんなエスカレートしていく元カノの行動に耐えれなくて別れたのだ。

元カノはそんなつもりはなかったようだが聖慈にはもう気持ちなど残っていない。

それどころか雫を侮辱したのだ。

かなり鬱憤がたまっているが台所を見ると雫と陸が楽しそうに昼食の仕度をしている。それを見て鬱憤が晴れたようで聖慈にも笑顔が戻った。

昼食の間も陸は雫に話しかけている。

雫も陸の口の周りを拭いてあげるなどいい母親を演じている。

昼食後、雫と陸はリビングで遊び聖慈は自分の部屋で仕事を始めた。聖慈が仕事を始めたときはリビングのほうで楽しそうに騒いでいたが1時間ぐらいすると静かになった。

仕事が一段落した聖慈がリビングに戻ると雫と陸が手をつないで幸せそうに眠っている。

恐らく最初に陸が眠り、手をつなげていた雫も睡魔に負けて眠ったのだろう。

聖慈は部屋に戻り毛布を二人の上にかけてあげた。

聖慈は雫の顔を見て笑みを零した。

最近雫の寝顔を見る機会をなくしたから新鮮な気持ちになったのだ。

そして雫の寝息がこぼれる唇から目が離せなくなった。そしてその唇に触ろうと手を伸ばした。

だが、雫が「ううゝん」と寝言を言ったのを聞いたので聖慈は「はっ」と自分の今の行動を咎めた。

聖慈は自分を苦笑し雫とは反対側の陸の隣に横になった。

雫と陸の寝顔をみていた聖慈だがいつしか聖慈も夢の中に入っていた。

雫が目を覚ましたときに目の前には聖慈の寝顔があった。

雫は驚いて声をあげそうになったが間に陸が寝ていたのなんとか声を出さずに我慢した。

「何故自分がリビングで寝てるのだろう」と疑問に思ったが陸の寝顔と昼間の陽気に負けて寝たのだろうと自覚した。

そして起き上がりうと思っただが陸が自分の手を握っていることに気づきとりあえず起こさないようにまた横になった。

そして自分の目の前にある聖慈の寝顔を見た。

寝顔を見ていると自分の心臓がはやくなるのが分かる。

そして聖慈の顔を触ろうと陸が握っている手ではないほうを伸ばして今にも触ろうかというときに聖慈が目を覚ました。

「あれ？雫なにしてんの？」

「え！？」

「俺の顔に何かついてる？」

聖慈は自分の顔を触っている。

それを見て雫はその言葉に乗ることにした。

「そうそう！ゴミがついてたからとろうと思ってたの」

「え？マジで？」

そういつて聖慈は自分の顔を見に洗面所に行った。

雫は聖慈の後姿を見送って安堵のため息をついた。

そして陸の手を離して夕食の仕度のため自分も起き上がった。

雫が何をつくろうか迷っていると言聖慈が戻ってきた。

そしてメニューを考えている雫に話しかけた。

「雫。今日はどうか食べに行かないか？」

「え？」

「たまにはいいだろ。お前も毎日食事の仕度は大変だろ」

そして、聖慈と雫は陸を起こして近くのファミリーレストランに行くことにした。

聖慈はステーキを、雫はパスタを、陸はお子様ランチをそれぞれ頼んだ。

聖慈はメニューを頼んで回りを見渡すと一人見覚えのある男を見かけた。

向こうも聖慈に気づいたのか手を上げてこっちに近づいてきた。

その男は彰人だった。

第二十二話 兄と妹の無意識な行動（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

[http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
is|sky](http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
is|sky)

蘭様、誤字報告ありがとうございました

第二十三話 兄と妹の自問自答

彰人は聖慈に近づくと昨日のことをもう一度謝った。

「伊集院、昨日は本当に悪かったな」

「もういいって」

彰人は雫の姿を見ると雫にも謝罪の言葉をかけた。

「雫ちゃんもごめんな。昨日あんな場所に連れてきて」

「いえ、私が悪いんです。お兄ちゃんにも言われたけど私が行かなければよかったです」

雫は自分のせいだと、彰人のせいではないと言った。

それを聞いて彰人はまた謝罪をしようとしたが聖慈が止めた。

「雫の言うとおりだ。お前のせいではないし雫が行かなければいいだけの話だったんだ。今度から気をつけてくれればそれでいいよ」

彰人はそれから聖慈と一言二言話してから雫の隣に座っている陸に目を向けた。

「で、話は変わるけどこの子は伊集院の隠し子か？」

彰人はからかうように聖慈に話しかけた。

聖慈は笑いながら彰人に答えた。

「そんなわけないだろ。こいつは陸って言って大竹先生の息子さんだよ」

「ああゝなるほどね」

彰人は聖慈と同じ高校だったので大竹のことも知っている。そして聖慈と大竹の仲がいいことも知っている。何度が聖慈に大竹と飲むから来ないかと誘われたこともある。だが、彰人にとって大竹はそんなに仲が良いわけではないので参加したことは無い。

彰人は自分のテーブルに呼ばれて手を振りながら戻っていった。

聖慈と雫と陸は食事を終え彰人達よりも先に出ることになった。陸を抱えてる聖慈が彰人に手を振る。

そして陸もつられて知らない彰人に手を振っている。

雫は聖慈の隣に立ち頭を下げる。

そして店を出て行った。

聖慈達が出て行ってから彰人は友達に質問を受けた。

「えらい若い家族だな」

「ああ、それにあの夫婦。なんかもう熟年夫婦みたいに分かり合ってる気がするな」

「やっぱりお前達もそう思うか？」

彰人たちがそんな話をしてるとは知らない聖慈達は仲良く自分達の部屋に帰っていった。

部屋に帰ってゆっくりしてるとまた陸が寝た。

陸に毛布をかけてやり聖慈と雫がTVを見ているとインターホンがなった。

大竹夫妻が帰ってきたのだ。

寝ている陸を渡すと大竹家族は聖慈の家には上がりず帰っていった。

聖慈と雫はそれから風呂に入りそれぞれの寢床に入った。
だが二人ともすぐには眠れなかった。

二人とも昼間の自分の行動を思い出していたからだ。

聖慈は何故雫の唇に触ろうとしたのだろうか？
雫は何故聖慈の顔を触ろうとしたのだろうか？

結局答えはでないまま二人は眠りについた

二人とも夢を見た。

幸せな家族を持つ夢を。

自分と子供とその隣には自分がよく知ってる人が立っていた。

第二十三話 兄と妹の自問自答（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第二十四話 妹の熱愛報道

聖慈と雫が同居生活を始めて数ヶ月がたった。
聖慈と雫はいつもどおりの日常を送っていた。

いつもと同じ平日の朝、聖慈と雫は一緒に朝食を食べていた。
TVではあるアイドルの熱愛報道が放送されている。
聖慈はふと思ったことを雫に問いかけてみた。

「雫は誰か好きな人はいないのか？」

「え!？」

「いや、今TVで熱愛報道を放送されてたから雫はどうなのか気になったんだ」

雫は困惑している。

いきなり好きな人と言われても分からないのだ。

「わかんない…」

「いないならいいよ。早く飯を食べよう」

聖慈は朝食を再開した。

雫も気持ちを切り替えて食事を再開した。

TVが次のニュースを読み始めた。

そのニュースが二人の運命を変える。

『伊集院雫さんに恋人発覚!』

その言葉に聖慈と雫は呆然としている。
ついさっき話題に出たばかりで雫は「分からない」と答えたのに今

ニュースで熱愛報道を放送しているのだ。

聖慈が雫のほうを見ると雫は未だに呆然としている。

キャスターがニュースの続きを読み始めた。

『記者によると雫さんは8歳年上の社会人の人と何度かデートをしている様子で、公園で仲良く子供と遊んでいる姿を目撃された方が多くいたようです』

そのニュースを見て聖慈と雫は顔を見合わせた。

聖慈が雫に話しかけようとしたとき聖慈の携帯が鳴った。
ディスプレイには『優慈』と出ている。

「もしもし」

「もしもし！兄貴か！」

「優慈、少し落ち着け」

「落ち着いてられるか！雫の熱愛報道を見たんだ。相手は誰なんだ

！」

「ああ、それがなんだな……」

聖慈は言いにくそうにしている。

優慈は待ちきれないようにうで聖慈に答えを急かした。

「なんだよ！知ってるなら早く言えよ！」

「恐らく……俺なんだ。その社会人って」

「へ？どういふことなんだ？」

「多分俺と買物してたときを見られたんじゃないかな。子供は大

竹先生の息子さんを預かったことだと思っし」

「なるほどね。そういえば兄貴と雫は8歳違うんだっけ」

「ああ。俺もすっかり忘れてたけど8歳違うんだよ」

聖慈は電話しながら雫のほうを見た。
雫も電話をしている。どうやら相手はマネージャーのようだ。
優慈が電話の向こう側から聖慈に話しかける。

「なあ、兄貴…」

「ん？どうした？」

「兄貴の出生の事とかバレないよな？」

「多分大丈夫だとは思っけど」

「そっか。バレそうになったら連絡してくれ。こっちもなんか分かったらまた連絡するから」

「頼むな」

そういつて聖慈は優慈の電話を切った。

そして聖慈は雫のほうを向くと雫が手で聖慈を呼んでいる。

雫の傍によると電話を渡してきた。

「もしもし？聖慈君？朝倉だけど」

「朝倉さん、今回はすいません」

朝倉とは雫のマネージャーの名前だ。

雫がデビューしてから変わっていないので聖慈とも知り合いだし、
聖慈と雫が兄妹ということも知っている。

「いや、別に構わないんだけどあの相手の社会人って」

「多分俺のことだと思います。子供は知り合いの子供を預かったときのことだと思います」

「これからどうする？これ以上隠してたらいろいろ報道が大きくなりそうだし」

「俺と雫は兄妹だって言えば大丈夫なんじゃないですか？」

「じゃあ、今日各マスコミにFAX送るけどいい？」

「ええ、お願いします。」

「分かったわ。じゃあまた雫に変わってもらえる？」

聖慈は朝倉に言われたとおり雫と電話を変った。

雫は「はい、はい」と2回ほど返事をして電話を切った。

「雫、朝倉さんなんだって？」

「今日は学校には行かずに自宅待機だって。明日FAXの内容を二ユースでしたらまた電話するって」

「それがいいだろうな。学校には恐らくすでにマスコミが行ってるだろうし」

聖慈が仕事に行く準備をしてるとまた聖慈の携帯が鳴った。

ディスプレイには『大竹先生』と出ている。

「もしもし、大竹先生？」

「おお、聖慈か？伊集院は今日どうするんだ？」

「はい、今日は学校を休ませます。今日雫のマネージャーが俺と雫が兄妹というFAXを各マスコミに送ってくれるので明日またそのニュースを見て決めるそうです」

「そうか。今学校なんだがもうすでにマスコミが来てるんだ。じゃあ今日は伊集院は休むんだな」

「はい、すいませんがよろしくお願いします」

そっいつて聖慈は電話を切った。

雫に今の電話の内容を話すと申し訳なさそうにうつむいた。

「みんなに迷惑かけちゃった…」

「気にすること無いさ。明日兄妹ってことが分かるんだからすぐに

いつもどおりの生活が過ごせるさ」

そういつて聖慈は仕事に出かけた。

雫も優奈とメールのやりとりをして、クラスのみんなが「早く学校に来れるようになるといいね」と言っていると知り元気が出たよう
で部屋の掃除を始めた。

聖慈が朝の騒動で弁当を忘れたので昼休みに社員食堂でとっている
と彰人が近づいてきた。

「うつす、伊集院」

「よお、最近よく会うな」

「だな」

そうついいながら彰人は聖慈の横の席に座った。

「でだ。朝雫ちゃんの報道見たぞ」

「お前もか…」

「『お前もか』って他にも言われたのか」

「弟の優慈と大竹先生からも電話もらったんだ」

「ということはあの社会人って」

「そ、俺のこと」

聖慈は彰人に自分の家のことや朝の詳しいことを喋った。

もちろん聖慈と雫が血のつながりがないことは言っていない。

「ふうん、お前の家も大変だな」

「そうでもないよ。結構楽しくやってるし」

「じゃあ、俺先に仕事戻るわ」

「おお」

彰人は先に食事を終え立ち上がった。

聖慈の横を通る際に声をかけた。

「何かあつたら電話しな。俺が力になれることは力になるから」

聖慈が彰人のほうを見ると手を振りながら去っていった。

第二十四話 妹の熱愛報道（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

<http://blogs.yahoo.co.jp/inthisky>

第二十五話 兄の嫌な予感

次の日の朝、聖慈と雫は昨日と同じように朝食をとりながらＴＶを見ている。

今日聖慈と雫が兄妹というニュースが出るはずだ。

新聞の一面紹介の時間になった。

一面に雫のことが書かれていた。

『伊集院雫さん、新恋人は嘘だった？』

報道記者はニュースを続けた。

『事務所によると社会人は雫さんのお兄さんだそうで、家の事情で今一緒に暮らしてるそうです』

そのニュースを見て聖慈と雫は安堵のため息をついた。

これで騒動は落ち着くだろう。

優慈からも『よかったな』とメールも着た。

聖慈が仕事に行く準備をしていると雫も朝倉から学校に行ってもいいと許しを得たようで制服を着ている。

「朝倉さんから連絡あったのか？」

「うん。一応行ってもいいけど気をつけてねって言われた」

「そっか。もしあれなら優奈ちゃんと一緒に行動すれば大丈夫だろ」

「うん。優奈ちゃんもそのつもりみたい。今日ここに迎えに来るって」

雫が言った瞬間インターホンが鳴った。

ドアを開けるとやはりそこには優奈が立っていた。

「あ、聖慈さん。おはようございます」

「優奈ちゃん、おはよう。悪いけど雫のことよろしくね」

「はい、任せてください」

聖慈と優奈と雫は連れ添うように家を出た。
すぐそこで聖慈と雫たちは別れた。

聖慈が社食で昼食をとっているとまた彰人が近づいてきた。

「またお前か」

「そう言うなって。俺なりに心配してるんだから」

「分かってるって」

彰人は聖慈の隣に座った。

「でもこれで落ち着くんじゃないか？」

「そうだといいいんだが…」

「何だよ？何か気になることがあるのか？」

「そうでもないんだが何か嫌な予感がするんだよ」

「嫌な予感？」

「ああ、何かまだ起こりそうな」

「心配し過ぎだって」

彰人はそういつて聖慈の背中をたたいた。

聖慈は笑いながら言った。

「そうだよな」

「そうそう」

それから二人は彰人の恋話になった。

聖慈は彰人が気になってる女性が合コンのときから気になっていたが、聖慈の予想通り彰人の好きな女性とは春美だった。

二人の馴れ初めなどを聞きながら聖慈は彰人をからかって笑った。

まだ心の中にある嫌な予感を吹き飛ばそうと。

だが、その予感はずっと聖慈の心の中に残ることになる。

そして、またある報道が放送された。

第二十五話 兄の嫌な予感（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第二十六話 兄の選択

雫の熱愛報道から数週間たった。

聖慈も雫もあれからいつもどおりの生活を送っている。

聖慈もあの悪い予感のせいだったのだと思い生活していた。

ある日の朝、雫は朝早く仕事に出かけ聖慈は一人で雫が準備してくれていた朝食を食べている。

いつもどおりTVをつけて食事をしていた聖慈の耳に驚きのニュースが聞こえてきた。

『伊集院雫さん、一緒に暮らしている兄は実の兄ではない！？』

聖慈はその報道に耳を疑った。

どこから自分のことがバレたのだろう…

聖慈がそのニュースに呆然としてしていると携帯が鳴り始めた。

相手は『優慈』と出ている。

「もしもし、優慈か？」

「兄貴！ニュース見たか？」

「ああ、丁度今見てるよ」

「雫は？」

「今日は朝一の仕事が入ってるからもう出てるよ。頼みは向こうでこれを聞かないことだよな」

「ああ」

聖慈はそれから一言二言話して電話を切った。

携帯をテーブルの上に置こうとしたがその前に違う相手から電話がかかってきた。

相手は朝倉だ。

「聖慈君？さっきのニュースはどういうこと？」

「えっと…あのままなんですけど」

「聞いてないわよ。雫も何も言わないし」

「え！？雫もあのニュース見たんですか？」

「いえ、雫はまだ見てないけどどうしたの？」

「雫はこのことをまだ知らないんです」

「え！？じゃあ雫は聖慈君のことを」

「ええ。本当の兄だと信じてます。詳しい事情を話したいので今から会えませんか？雫にはバレないように。それと雫にはこの報道を見せないようにしてください」

「分かったわ。じゃあ…」

それから聖慈と朝倉は会う場所と時間を決め電話を切った。

聖慈は上司にも電話を入れ、今日は休むことを伝えた。

大竹夫妻と彰人も心配してるだろうと思い、大丈夫だという事をメールで伝えた。

それから1時間後、聖慈と朝倉は近くの喫茶店で会った。

雫は事務所に待たして報道を聞かせないようにしている。

「聖慈君。早速だけど詳しい事情を聞かせてもらえる？」

「はい。親父が言うには…」

聖慈は朝倉に全てのことを包み隠さず伝えた。

聖慈と優慈、雫が血のつながりが無い兄妹だということ。

聖慈が託児所から引き取られたこと。

聖慈と優慈はこのことを知っているが雫はまだ教えていないこと。

朝倉はこのことを聞いて驚いている。

聖慈と優慈、そして雫は仲のよい兄妹とばかり思っていたのでいざ本当のことを聞かされても信じれなかった。

だが、聖慈の顔を見ると本当にことだと信じるしかなかった。

「やっぱりそう簡単には信じれないわね」

「ですよ。でも本当のことなんです」

朝倉がそのことを頭の中で理解するにはやはり時間がかかった。

それほど聖慈達が実の兄妹だと疑えなかったのだ。

「とりあえず雫のことだけど」

「雫にはまだ伝えないでもらえませんか？」

「え？どうして？」

「自分勝手なお願いかもしれませんがまだ雫には話す時期ではない気がするんです。今回の報道があつたから話すのではなく、雫が落ち着いて聞ける状況のときに俺の口から伝えたいんです」

「でも…」

「お願いします」

聖慈は頭を下げた。

朝倉は正直困った。

このまま雫に今回の報道のことを聞かせずに生活させるのは不可能に近い。

だが、聖慈の気持ちも分かる。

朝倉は少し悩んだが聖慈の気持ちに答えることにした。

「分かったわ」

「ありがとうございます！」

「ただし、今回の報道が収まるまで雫は外国の両親のところに行く

こと。これが条件よ」

「え？」

「日本にいてどうしても今回の報道が耳に入る可能性がある。でも、外国だとその可能性はグンと減るはずよ」

「…」

「あとは聖慈君が決めることよ」

朝倉は席を立とうとしたが聖慈に止められた。

「待ってください。俺の答えはもう決まってます」

「そんなに時間をあげることにはできないけどももう少し考えてもいいのよ」

「いえ」

そして聖慈は朝倉に自分の答えを告げた。

朝倉は聖慈の答えを聞き、事務所に電話をかけた。

そして、電話を切って聖慈に目配せをした。

聖慈もうなずき雲が待つ事務所に向かった。

第二十六話 兄の選択（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第二十七話 妹の旅立ち

雫は事務所で高校の勉強をしていた。

仕事の合間で勉強しないと間に合わないのだ。

雫が問題に集中していると部屋のドアが開いた。

ドアから聖慈が入ってきた。

雫はまさか聖慈が入ってくるとは思ってもみなかったので驚いている。

「雫、話があるんだ」

聖慈はまだ驚いている雫に声をかけた。

雫はその声に正気に戻り聖慈に答えた。

「話？」

「ああ、雫。悪いけど親父達のところに行ってくれないか？」

そう聖慈が出した答えとは雫を両親のところに行かせることだった。

聖慈は雫が日本にいると傷つく可能性がある。

だから両親のところで暮らさせることを選んだ。

だが、雫はその言葉に傷ついたような顔をした。

聖慈に出て行けと言われたのだ。

当然雫は理由を聞きだそうとする。

「待ってよ！？どうしてお父さん達のところに行かないといけないの！？」

「親父達からさっき連絡があつてな。やはり外国でお前と暮らしたいんだそうだ」

聖慈はここに来る前に外国にいる両親と連絡をとっていた。
今の日本の状況を伝え、そっち側に雫を行かせることも伝えた。
最初両親も「こっち側に連れてこなくても」と言ったが聖慈の雫を
傷つけないという気持ち伝わってきたので聖慈の頼みを聞く
ことにした。

両親のところに行かせる理由として「両親が外国で一緒に暮らした
い」という理由で合わることにしたのだ。

「私は日本にいたい！」

「駄目だ！お前は親父達と一緒に外国で暮らせ」
「どうして！」

聖慈は雫が叫んでいるが部屋を出た。

聖慈が部屋を出た後部屋の中から雫の泣き声が聞こえた。

雫が泣いている声を聞いて聖慈も涙を零しながら後のことを朝倉に
任せ事務所を出た。

そして優慈の事務所に説明をしに行った。

優慈も聖慈の言い分を聞いて反論した。

「兄貴！何で雫を親父達のところに行かせるんだよ！」

「それが雫のためなんだ」

「どこが雫のためなんだよ！」

「じゃあ雫に全部話せって言うのかお前は！」

聖慈が優慈の方を見る。

優慈は聖慈の顔を見て何も言えなかった。

聖慈の顔は自分が何もできない無力感に襲われていた。

「こんな状況で雫に全部話してみろ！あいつは傷つくに決まってる。
でも、今親父達のところに行かせれば向こうで親父達が守ってくれ

る！俺だったらあいつを守ることなんかできやしないんだ！」

「兄貴……」

「俺だつて……俺だつてできればあいつを日本にいさせてあげたいよ！でも無理なんだ！俺だけではあいつを傷つけるだけなんだ！」

優慈は聖慈の言葉に何も言えなかった。

「雫が日本を発つのは明日だ。優奈ちゃんと一緒に来てくれ」

そういつて聖慈は優慈の事務所を出て行った。

優慈は聖慈に声をかけようとしたが何と声をかければいいか分からなかった。

次に聖慈が向かった先は智子の家だった。

大竹は学校に、陸は幼稚園に行ってるので家には智子一人だけだった。

聖慈は自分と雫の関係を智子に伝えた。

そして雫が明日、日本を発つことも。

「そつか。雫ちゃん外国に行っちゃうのか……」

「ああ、それしかあいつを守ってやる方法が俺には分からないんだ」

聖慈が智子の家を出ようとしたとき智子が声をかけた。

「伊集院君、一つだけ聞いてもいい？」

「なんだ？」

「伊集院君はそれで後悔しない？」

「……ああ。あいつを守ればそれでいいよ」

聖慈は無理やり微笑んで去っていった。

智子はその顔を見て呟いた。

「嘘つき」

彰人には会社終了後に彰人の自宅にお邪魔させてもらい事情を話した。

「え！？お前雫ちゃんを外国に行かせるのか！？」

「ああ」

「お前が守ってやれば良いじゃないか！」

「簡単に言っくなよ！俺が守れなかったからこういうことになったんじゃないか！」

「だからって…」

「あいつは親父達のところに行かせる。もう決めたんだ」

彰人も優慈と一緒に聖慈の顔を見ると何も言えなかった。

「雫の出発は明日。よかつたら来てくれ」

そういつて聖慈は彰人の部屋を出て行った。

そして、次の日。

雫は日本に発つことになった。

見送りには聖慈、優慈、朝倉、優奈、彰人、大竹家族が集まった。

「じゃあ雫、親父達によろしくな」

「…うん」

「雫、絶対メール頂戴ね！」

「…うん」

「雫ちゃん元気だな」

「…はい」

そして雫の乗る飛行機の搭乗が始まった。

「じゃあ、行ってきます」

皆「元気だな」や「頑張れ」と声をかけているが聖慈は声をかけようとはしない。

雫が聖慈の目の前に来て話しかけた。

「お兄ちゃん、行ってきます」

「ああ…」

それだけしか聖慈は声をかけなかった。

雫はそのままこちら側を見ずに行ってしまった。

雫の後姿を見送って皆が「何故声をかけなかったのだ」と文句を言おうと聖慈の方を向くと聖慈の目からは涙が流れていた。

自分は両親に雫のことを頼まれた。

なのに何もできなかった。

その無力感で泣いてしまったのだ。

その聖慈の頭を大竹が何も言わずに聖慈の頭に手を置く。

聖慈が落ち着いたのを見計らって大竹が声をかける。

「さ、飛行機を見送ってやろうじゃないか」

「…はい」

聖慈達が見送る中、雫は外国に住む両親の元に旅立っていった。

第二十七話 妹の旅立ち（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_the_isky

第二十八話 兄の状態

雫が日本を発ってから一週間がたった。

その間聖慈は何をするにしても失敗をしていた。

仕事に関しても日常生活にしても失敗が続いていた。

そして、未だに雫がいないという生活に慣れていない。

朝起きて誰もいないのに「おはよう」と挨拶をしてしまったり、無事に料理が完成しても気がついたら二人分作っていたり、終いには無意識の内に雫の姿を探すまでに至った。

そんな聖慈を心配した彰人が大竹と相談して聖慈との飲み会をセッティングした。

そして飲み会当日。

彰人と大竹と智子と聖慈が居酒屋で食事をしている。

その場でも聖慈は料理を無意識で二人分よそってしまった。

聖慈は自分の行動に苦笑していたが他の皆は顔を見合わせている。これは思ったよりも重症のようだ。

「聖慈大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。少ししたら慣れますよ」

聖慈は皆に心配をかけまいと笑顔で答えた。

聖慈のことをよく知っている3人はそれが嘘だとすぐに気づいた。だが、聖慈の顔を見ると何も言えなくなった。

2時間ぐらいで食事は終わったが聖慈は雫がいた頃のように笑うことはなかった。

聖慈の後姿を見送って3人はまた話し合った。

「先生、伊集院は大丈夫でしょうか？」

「こればかりは分からね。聖慈の中で伊集院の存在がどれほど大きかったかが分からないからな」

「私は無理だと思う」

彰人と大竹は智子のほうを振り返る。

智子は言葉を続ける。

「妹以外にも何か違う感情を持つてるのか私には分からないけどそれを伊集院君が自覚しない限りはこのままだと思う」

智子は聖慈が雫のことを妹以上に見ているのではないかと文化祭から考えていた。

それに、雫が日本を発つ前日智子が投げかけた質問に答えたときの聖慈の顔は大事な人を失ってしまったときに近い顔をしていた。

智子の言葉に大竹と彰人が納得した。

二人とも聖慈が雫に妹以上の感情を持っているのではないかと思っていたのだ。

3人は一日でも早く元の聖慈に戻るように祈るほかなかった。

飲み会から次の土曜日、聖慈は家で何もやる気がなく横になっていた。

横になっていると部屋のインターホンが鳴った。

聖慈は無意識のうちにまた声を出していた。

「雫、誰か来たぞ」

だが、当然の如く雫の声は聞こえない。

聖慈は自分が今した行動に苦笑してしまった。

聖慈は立ち上がってドアを開けた。

そしてドアを開けて立っていた人を見て声をあげてしまった。

「雫…」

「聖慈さん？どうしたんですか？」

聖慈は雫と声を上げたが実際にいたのは制服姿の優奈だった。
優奈が心配そうに聖慈の顔を見上げる。

「いや、なんでもない。それよりも優奈ちゃんどうしたの？」

「聖慈さん、今私と雫を間違えましたよね？」

「え…、まあ」

「ならなんで雫を日本に戻さないんですか？」

「まだそんな時期じゃ…」

「時期ってなんですか！！このままだと聖慈さんのほうが先に倒れますよ！そうなると雫が傷つきますよ！」

「俺なら大丈夫…」

「大丈夫じゃないから言ってるんじゃないですか！」

優奈が叫んではとくに優慈が飛び込んでくる。

どうやら優慈も部屋のすぐ側にいたようだ。

「優奈、言い過ぎだつて！」

「優慈さん、離してください！今言わないと言う機会はないじゃないですか！」

「お前が冷静に説得するって言うから任せたんだろ！少し落ち着けつて」

優慈と優奈が言い争ってるときに聖慈が二人に話しかけた。

「優慈、優奈ちゃん。二人とも心配かけてごめん。でも今はまだ頑張れる気がするんだ。いや、頑張らないといけないんだ。それが俺が雫にやつてられる唯一のことなんだと思う」

「兄貴…」

「聖慈さん…」

「俺がここで頑張らないと雫が外国で元気に過ごせないんじゃないかと思うんだ。そして、雫を俺が無理やり親父達のところに行かせた。だから、俺はここで頑張らないといけないんだ」

優慈は聖慈の言う言葉に何も言えなくなった。だが、優奈は聖慈に自分の考えを言い始めた。

「それは違うんじゃないですか？」

「え？」

「まず、雫が聖慈さんが本当のお兄さんではないと聞かされて傷つくとは限らないんじゃないですか？」

「反対に傷つかないとは限らないだろ」

「じゃあ、傷ついたとしましょう。でも、聖慈さんと離れて暮らすほうが傷つく可能性もあったんじゃないですか？空港での雫を聖慈さんはちゃんと見ましたか？」

聖慈は優奈の問いかけに首を振る。

優奈はさらに続ける。

「雫はあのととき、聖慈さんに引き止めて欲しかったんじゃないですか？なんで、雫を信じてあげることができなかったんですか？」

「それは…」

「確かに雫は本当のことを聞いて傷ついてしまつかもしれない。でも、聖慈さんがその傷を癒してあげることができたかもしれないじゃないですか」

聖慈は何も言わない。

「一人で頑張らなくても雫と二人で頑張るという手もあるんじゃないですか？」

そういつて優奈は聖慈の部屋を出て行こうとする。

呆然と優奈を見ていた優慈も慌てて優奈の後を追う。

部屋を出る前に優奈が聖慈に最後の一言を言う。

「『雫のため、雫のため』って言ってますけど、それって聖慈さんのわがままなんじゃないですか？雫に本当のことを話さないのも雫との接点なくなるのが怖いからなんじゃないですか？」

そういつて優奈は聖慈の部屋を出て行く。

優慈も「ちらっ」と聖慈を一目見て出て行った。

聖慈は呆然と優奈が言った言葉を考えていた。

優奈と優慈は歩きながら話している。

「優奈、少し言い過ぎたんじゃないのか？」

「全然ですよ。雫を傷つけたんですよ。あれぐらい言っただけです」「兄貴だっているろ考えて」

「考えたって聖慈さんはあのままだと答えを出すことなんかできませんよ」

「答え？」

「ええ。妹がいなくなるのは兄としては当然ですよ？」

「まあ、いつかは一緒に暮らすのはなくなるだろう」

「確かに突然といえば突然ですけどそれでも、あんなに日常生活に支障がでるほどダメージを受けるとは考えられません」

「確かに……。ってことはつまり」

「ええ。恐らくですけど聖慈さんは雫に妹以外のなんらかの感情を持ってるんだと思います。その感情が何なのか分かれば答えはおのずと出ると思います」

「優奈はもう分かってるのか？」

「もちろん分かってますよ。でも、これは聖慈さん自身の問題なので聖慈さんが答えを出す必要がありますから教えるわけにはいきません」

優慈は自分の彼女を尊敬した。

優慈よりもよく周りを観察している。

そして、その観察したものを自分で考え具体的な問題と解決策を考えている。

優慈は優奈の手を握った。

優奈は突然の優慈の行動に驚いているがすぐに嬉しそうな顔をした。そして、そのまま二人は優慈の部屋に帰っていった。

第二十八話 兄の状態（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第二十九話 兄の気持ちの自覚

優慈と優奈が聖慈の部屋を出て行ってから聖慈はずっと考えていた。

聖慈が考えているとまた部屋のインターホンが鳴った。

聖慈は考えるのを止め、部屋のドアを開けると大竹と彰人が立っていた。

「伊集院、お前無事だったのか!？」

「は?何が?」

「何がって聖慈、お前携帯に出ないから彰人にも連絡して心配して来たんじゃないか」

聖慈が携帯を見ると確かに二時間前から大竹から着信があった。考えすぎて気づかなかったらしい。

「すいません。考え事すぎて気づかなかったようです」

「そうか。無事でよかったよ。いつもなら電話をかけて出なくても二時間も連絡してこないっていうのは無かったから倒れたのかと思った」

「すいません。また心配かけちゃって」

「それよりもお前考え事って何なんだ?」

とりあえず聖慈は大竹と彰人を家に上がらせお茶を出した。そしてついさっき優慈、優奈との会話の内容を話した。

「へえ、優奈ちゃんが」

「ああ、雫を外国に行かせたのは俺の我がままなのかな……」

「伊集院……」

聖慈の顔がどんどん暗くなっていく。

彰人は何と声をかけたらいいのか分からなくなった。

彰人が大竹のほうを見ると大竹の顔が教師の顔になっていた。

「聖慈」

「はい…」

「今更そんなことを言っでどうする？」

「でも…」

「行かせた事を考えたつてもう伊集院は帰ってこないだろ。じゃあ、お前はここでうじうじ悩むだけしかないのか？」

「だから、ここで頑張ろうと…」

「そんなことを言っているといつまでたつても伊集院を守ることもなにかできないよ。お前が伊集院がいる前とない後では全然違うよ。それは理解しているのだろう？」

「ええ」

「じゃあ、何故そんなに伊集院がいなくおかしいのか考えてみる。それが分かればきつとお前がしなければいけないことは分かるさ」

聖慈は大竹の言葉について考えた。

だが、一向に答えは出てこなかった。

聖慈の頭の中ではすでに『雫が妹』ということに囚われている。

だから、他の答えを出すことができないのだ。

それを察知した彰人が一か八か荒療治を試みた。

「なあ、伊集院」

「何だ？」

「俺雫ちゃんに告白していいか？」

彰人の言葉に大竹は耳を疑った。

聖慈を励ましにきたのに何故雫に告白などするのか。

大竹が彰人のほうを見ると彰人と目があつた。

『俺に任せてください』

彰人の目はそう語っていた。

大竹は何も言わずに彰人に任せることにした。

聖慈は当然彰人に詰め寄る。

「ふざけんな！お前には春美っていう人が好きなんだろ！」

「でも、俺は今雫ちゃんのことを好きなんだ」

「お前みたいな奴に雫を渡せるもんか！雫は俺の……」

聖慈は今自分が言おうとした言葉を口に出せなかった。

それほど聖慈自身自分の言葉に驚いている。

そして、やっと自分が雫への気持ちを理解した。

「そうか……。俺は雫のことが……」

今となつては優奈の言葉が理解できる。

雫に本当のことを言えなかったのは雫に拒絶されるのが怖かったから。

接点がなくなるのを恐れたのは雫と会えなくなるのが怖かったから。

大竹の言葉も理解できる。

雫がいることが聖慈にとって当然だから。

雫がいることが聖慈にとって力になっていたから。

あの笑顔を、あの声を、そして雫本人を自分は欲している。

聖慈は雫のことを好きなのを自覚した。

「伊集院……」

「聖慈…」

「彰人、先生。やっと分かりましたよ、俺。俺は雫のことが…」

「はい、そこまで」

「え？」

彰人は聖慈の声を遮った。

「その先の言葉は雫ちゃん本人に言いな。俺らに言わずに」
「そうだな…」

それから聖慈は優慈と優奈、智子も呼び出した。
そして、自分の気持ちを伝えた。

「皆、心配かけてごめん。俺やっと分かったんだ。何で自分が自分じゃなくなったみたいになっていたのかを」

「そっか。やっと分かったのか」

「ああ」

「聖慈さん…」

「優奈ちゃん。ありがとう。君の言葉をやっと理解できたよ。雫に本当のことを言えなかったのは雫に拒絶されるのが怖かったからなんだ」

「聖慈さん。遅すぎですよ、それを分かるのが」

「ごめんね、心配かけて」

「いいですよ。これでやっと元の聖慈さんに戻ったんですから」

優奈は笑ってそう言った。

聖慈も優奈の顔を見て雫が日本を発って始めての笑顔を見せた。
その顔を見て皆安堵の笑顔を見せた。

それから食事が始まった。

聖慈が皆に心配をかけたからとお礼のつもりで開いたのだ。

その場で聖慈は皆にいつから自分が雫の事を妹以上に思っているのを分かったのかを聞いてみた。

「私はかなり早かったと思いますよ。聖慈さん、雫を迎えに来たときに虫除けしたでしょ？」

「そういやしたね」

「私はあの時です」

「え？あの時から？」

「ええ。だって、聖慈さんあれはどう見たって嫉妬ですよ。山本が雫に対して馴れ馴れしかったから嫉妬した行動だと私は思いましたよ。あと、「好きな人に付きまとうな」っていうオーラも出てましたし」

「全然自覚なしだ…。智子は？」

「私は高校の文化祭だね。だって、伊集院君ずっと雫ちゃんのことを見てたもん。だから、これはきつと何か感情があるなって」

「俺は合コンの時。俺の友達が雫ちゃんに文句言ったときにお前怒っただろ？お前は今まであんなに女のことと怒ることはなかったかな。最初は妹を侮辱されたからかと思ったけど、あれは自分の彼女を守る行為に似てたからな。ついでにファミレスで会ったとき、俺と一緒にいた友達はお前達のことを家族と思ってたぞ」

聖慈はどれほど自分が鈍感で無自覚だったかを思い知らされた。

そして、恥ずかしくなった。

そんな聖慈の姿を見て皆笑った。

聖慈もそんな皆をみて笑った。

その日の晩、聖慈は両親に電話をかけた。

「もしもし、親父？」

「おお、聖慈か。どうした？」

「雫を迎えに行きたいんだ」

「ほお」

「兄としてではなく、雫を愛している一人の男として」

「ふう〜ん、やっと答えを出したか」

聖慈は最後のほうの言葉を章吾がボソツと小さい声で言ったため聞き取れなかった。

聖慈は聞きなおした。

「え？」

「いや、とりあえずこっちで話を聞こう。いつ迎えに来るんだ？」

「明日…。いや今から行く」

「今から？」

「ああ、今から行く」

「分かった」

聖慈は電話を切り、一番早い飛行機のチケットを予約し家を飛び出した。

その顔には今までの聖慈とは違い希望に満ちた顔をしている。

第二十九話 兄の気持ちの自覚（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第三十話 妹の状態

雫は日本を離れ両親のところに来て、毎日日本人学校に通っている。最初は何をするにしても無気力で日本を皆を思い出していた。

両親も何も言わずにそつと見守ってくれていた。

だが、両親の友達の娘に誘われ日本人学校に行ってみて勉強をしている間だけ日本のことを忘れることができた。

だから、日本人学校に通うことにした。

その日も雫は学校に通い、授業を受け帰宅していた。

「みんな、どうしてるかな…」

雫はふとした瞬間に止まって日本を思い出してしまう。

特に思い出すのは聖慈のことだった。

聖慈の部屋、聖慈の顔、聖慈の声、聖慈の何気ない仕草。それらを振り切るように雫は頭を振り、また歩き始めた。だが、その足取りは重い。

雫は家に帰りいつもどおり出された宿題をこなしていた。

両親はどこか出かけているようで車もない。

雫が宿題をしていると、玄関のインターホンが鳴った。

玄関のドアを開けると同時に誰かに抱きしめられた。

雫は突然のことで驚いて声を出そうとしたが、抱きしめている男の後ろに章吾と真美の姿が見えた。

二人は何も言わずに雫と抱きしめている男を微笑んで見ている。

雫が二人に助けの目を送ると章吾が男の肩に手を置いた。

「おい、もういいんじゃないか？雫も混乱してる」

男は章吾の言葉に従い抱きしめていた腕の力を緩めた。
やっと男の顔が見えたとき雫は驚いて声が出なかった。

抱きしめていた男は聖慈だった。

第三十話 妹の状態（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/inth
isky

第三十一話 兄の告白と妹の返事

日本を発つて数時間後両親が暮らしている国に到着した。空港を出ると章吾と真美が聖慈を出迎えた。

「親父…。お袋…」

「聖慈、よく来たな」

「さ、帰りましょ」

章吾と真美は聖慈を車に乗せ家に向けて車を走らせた。車の中は沈黙に包まれた。

聖慈は二人になんと言えばいいか分からなかった。そんな沈黙を破つたのは章吾だった。

「聖慈」

「何？」

「電話で聞いたがもう一度聞く。お前は雫のことをどう思っているんだ？」

聖慈はミラー越しに見てくる章吾と目を合わせ自分の気持ちを伝えた。

「俺は雫のことが好きだ。もちろん妹しての気持ちもある。でも、それ以上に一人の女性として愛してる」

「そうか。じゃあ、雫に会ってどうする？」

「全部伝えるよ。俺の気持ちも俺が雫と本当の兄妹じゃないことも雫が拒絶したら？」

「それでも俺は後悔しない。拒絶されたら拒絶されなくなるまで説得するさ」

聖慈の気持ちに章吾も真美も何も言わない。
そして、車は章吾と真美がこちら側で暮らす家に着いた。
今家には雫しかない。

聖慈がインターホンを鳴らすと家の中からずっと聞きたかった雫の
声が聞こえた。

ドアを開けると共に聖慈は無意識のうちに雫を腕の中に閉じ込めた。

「おい、もういいんじゃないか？雫も混乱してる」

章吾が言うまで雫に何も伝えていないことに気づいた。

そして、ゆつくりと雫が離れていくことに名残惜しさを感じながら
腕の力を緩める。

雫が聖慈の顔を見て驚いたような顔をしている。

雫に向けて聖慈は声をかける。

「雫、久しぶり…」

聖慈が声をかけても雫はまだ茫然としている。

そして、まさかここまで呆氣にとられるとは思っていなかった聖慈
も困惑している。

そんな二人に真美が声をかけた。

「とりあえず二人とも家に入りなさい」

真美の言葉に雫がよろよると家の中に入る。

その後ろに聖慈、そして章吾と真美が続けて入る。
リビングに入り4人は椅子に座った。

お茶を一口飲み章吾が聖慈に声をかける。

「聖慈、俺達は二階にいるから」
「ああ」

そういつて章吾と真美は二階に上がっていく。
したがって一階には聖慈と雫二人つきりになった。

「雫…、聞いて欲しいことがあるんだ」
「…なに？」

雫は聖慈と目もあわせないでうつむいている。

聖慈は雫に顔を上げるように言おうと思ったが雫も混乱してるのだ
ろつと思ひ、そのまま続けることにした。

「雫を親父達のところに行かせたのは理由があるんだ」
「…お父さん達が呼んだからでしょ」
「それは…俺が考えた嘘なんだ」

雫はその言葉に顔を上げた。

「う…そ…」
「ああ、ちゃんとした理由があるんだ。でもそれを雫に言うのは俺
が臆病だったからあんな嘘をついたんだ」
「じゃあ、ちゃんとした理由って何？」
「そのまえにもっと大事な話があるんだ」
「それよりも大事な話？」
「ああ、その話をする前にこつちの話を聞いて欲しいんだ」
「じゃあ何？その大事な話って」

聖慈の手の平には汗が滲んでいる。

それほど緊張しているのだ。

だが、聖慈は決心して自分の気持ちを伝えた。

「雫…。俺はお前が好きだ。妹としてではなく一人の女性としてお前を愛している」

「え？」

「ずっと好きだったんだと思う。でも、俺が自覚していなかったからお前を傷つけてしまったかもしれない。でもこれからは、俺は雫の傍でお前を守りたい…」

雫は何が起こってるかわからないようだ。

まさか聖慈が自分のことを好きだと言っているのだ。

「雫…？やっぱ迷惑か？」

雫は聖慈の声ではっとして、雫は自分の気持ちを伝えてきた。

「私も！私もお兄ちゃんのこと好きだよ！ずっと前から一人の男の人として好きだった…」

雫は涙を流しながら叫ぶように言った。

聖慈は立って雫を抱きしめた。

「ごめんな。今まで気づかなくて」

「うっん…」

聖慈は雫が泣き止むまで抱きしめて頭を撫でていた。

雫が泣き止んだのを確認して聖慈は自分のことを話すことにした。

第三十一話 兄の告白と妹の返事（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

第三十二話 兄妹から恋人へ（前書き）

この話は法律の話がちょっと入ってきます。

が作者はよく知らないので適当で書いています。

ですから、読者の皆様も特に気にしないで読んでくださるとありがたいです。

質問をされても答えることはできませんのでご了承ください

第三十二話 兄妹から恋人へ

「雫…」

「何？」

「実は…俺お前の本当の兄貴じゃないんだ」

「…知ってる。ずっと前から知ってたよ」

「え！？」

聖慈は雫が言った言葉に耳を疑った。

知っている…

いつから！？

「お前知ってるっていつから！？」

「お兄ちゃんが優慈兄ちゃんに伝えてたとき。あのとき私も聞いてたの。うつすらだけど」

「あの時に…」

「それから…少し前に戸籍を見たときにお兄ちゃんところに『養子』って書いてたから…」

「そうか…。お前を外国に行かせたのはそれが報道されたからなんだ」

「え？」

「お前に拒絶されるのが怖かったんだと思う。だから、聞かせないように親父達のところに行かせたんだ」

「そうなんだ…」

「ごめんな。俺の勝手な判断でお前に寂しい気持ちをさせて」

「うつん！大丈夫だよ」

「一緒に日本に帰ろう？そしてまた一緒に暮らそう？」

「うつん！」

聖慈と雫はまた抱きしめあった。
そして顔と顔を近づけお互いの唇を合わせた。

そこに章吾と真美の声が聞こえた。

「ラブラブだな…」

「ラブラブよね…」

「え!?!」

「母さんや、今の見たかね?」

「ええ。はつきりとこの目で見ましたよ」

「親父!?!お袋!?!」

「いつからそこに!?!」

「え?いつからって」

「雫が聖慈のことを知ってたって伝えたときから?」

「そんなところから」

「…恥ずかしい」

聖慈と雫は顔が真っ赤になった。

それを見て章吾と真美は笑みを零した。

それから、4人で食事をした。

聖慈は両親に自分の戸籍について質問した。

「なあ、親父。俺の戸籍って除けることはできないのか?」

「すでに除けてあるよ」

「へ!?!」

「雫がこっちに帰ってきたときに実は優慈に頼んで除けてもらっていたんだ。絶対こうなると思ってたからな」

「そうよ。もっと早く迎えに来ると思ってたのに遅いわよ。もう少しで強引にくっつけようかと思ったわ」

「じゃあ…」

「ああ、お前ら二人が将来結婚したいと言っても問題ないぞ」
「いや、そこまで」

「あら、聖慈は雫と結婚したくないの？」
「そうじゃなくて、今はそういうことまで考えたくないんだ」
「どういうこと？」

聖慈は雫の目を見て話す。

「結婚も大事だけど今は雫と一日一日大切に過ごしていきたいんだ。結婚はその日々を過ごしていくうちに見えてくるものじゃないかな」
「お前の言い分は分かった。だが、俺らが生きてるうちにしてくれよ」

「そこまでは待たさないよ。というより俺が我慢できない」
「ラブラブだな…」
「ラブラブよね…」
「なんだよ、さっきから」

聖慈は照れくさそうに笑った。
食事を終え、明日の朝一で聖慈と雫は日本に帰ることにした。
明日に備えもう寝ることにした。

「明日も早いしもう寝るか」
「そうだな。俺はどこで寝ればいいんだ？」
「もちろん雫の部屋よ」
「何言ってるんだ！」
「何言ってるのよ！」
「恋人同士なんだから当たり前でしょ？」
「馬鹿言え！」
「何考えてるのよ！」

聖慈と雫は顔を真つ赤にして反対している。

いざ恋人同士になってもまだ初々しい二人に真美は笑みを零した。真美の暴走を章吾が笑いながら止める。

「その辺にしときなさい。二人とも顔を真つ赤にしてるだろ」

「だって面白いんだもん」

「人をおもちゃにするなよ……」

「聖慈は一つ部屋が余ってるからそこを使え。布団は用意してるから」

そう言つて章吾と真美は寝室に入った。

入る前に爆弾を一つ落として。

「恋人同士ですることは日本に帰つてするんだよね？」

「ちゃんと避妊するのよ」

そついつてドアを閉めた。

残つた聖慈と雫は顔を見合わせたがすぐに目をそらした。

「……おやすみ」

「……おやすみなさい」

二人は顔を赤くして自分達の寝室に入った。

四人は朝早く空港にいた。

朝一の飛行機で日本に帰るからだ。

そして、乗る飛行機の搭乗が始まった。

「じゃあ、また」

「またね」

「ああ、聖慈」

「うん？」

「今度こそ頼むぞ」

「ああ」

聖慈は雫の手を優しく握る。
雫も聖慈の手を握り返す。

「この手をもう離さないよ」

「そうか」

「それを聞いて安心したわ」

「雫、じゃあ行こうか」

「うん」

そして聖慈と雫は日本に戻った。
兄妹としてではなく恋人として。

第三十二話 兄妹から恋人へ（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in_the_isky

第三十三話 妹の記者会見

聖慈と雫が空港に到着すると雫を見送りしたメンバー、優慈、優奈、朝倉、彰人、大竹家族が迎えてくれた。

二人が近くに行くと優奈が雫に泣きながら抱きついた。

「しずく〜…」

「優奈ちゃん、ただいま」

「おかえり〜…」

優奈は泣いたまま雫に抱きついている。

雫は優奈の背中を撫でている。

聖慈は他のメンバーに声をかける。

「ただいま」

「おかえり」

「ちゃんと連れて帰ってきたな」

「ああ」

優奈が泣き止んだのか優奈と雫が聖慈達のほうに近づいてきた。

「優奈ちゃん、もういいのか？」

「ええ。またいつでも会えますから」

「そうだな。これからはいつでも会うことができるんだから」

「しずくねーちゃん！」

「陸君。久しぶりだね」

「しずくねーちゃん。ボクのおよめさんになってよ」

「えっと…」

雫は急に誰かに引き寄せられた。

雫は引き寄せた人の顔を見たら聖慈だった。

「陸。悪いけど雫は俺の大事な人なんだ。お前には渡さないよ」

満面の笑みで陸に話しかける。

陸は悔しそうにしている。

他のメンバーは呆然としている。

「兄貴って…こんなキャラだったっけ？」

「私もこんな聖慈さん初めて見ました…」

「まあ、いいんじゃない」

「そうだな」

「やつとこれで一段落ね」

「一段落着いてないわよ」

朝倉の言葉に皆が朝倉のほうを向く。

「そうですね。まだ世間には何も言って無いですし」

「どうするの？聖慈君はどう考えてるの？」

「雫とも話し合ったんですけど、全てを打ち明けることにしました」
「全てって？」

「俺と雫が本当の兄妹ではないこと。そして、俺達二人が恋人同士だということ。隠してたっていずれバレるんですから今話すべきだと思ったんです」

「じゃあ、今日の午後には会見を開いてもいいのね？」

「はい、私達のことを全て話します」

それから朝倉は事務所に戻っていった。

社長と相談してまた詳しい場所と時間を決めて連絡してくれるらし

い。

とりあえず聖慈達は聖慈の部屋に行くことにした。
大竹と彰人は仕事に戻っていったが。

「ただいま…」

「雫、おかえり」

雫が呟いた言葉に先に入っていた聖慈が答えた。

その言葉に雫が泣きながら聖慈に抱きついた。

聖慈も雫を優しく抱きしめる。

そんな二人を皆優しく見守っている。

それから食事をしてみんなで久しぶりの話に華を咲かせていると朝倉から電話があった。

会見場が準備できたので聖慈と雫二人で来て欲しいということだった。

「じゃあ、行くか」

「うん」

聖慈と雫は残りのメンバーに留守番を任せ会見場に出かけた。

あの報道から何日間も姿を隠していた伊集院雫が会見を開くということとでTVカメラが何台も入っていた。

控え室には朝倉と雫の事務所の社長が待っていた。

「朝倉さん、社長」

「社長さん、このたびはすいませんでした」

「いや、気にしないでいいよ」

「え？」

「雫は小さい頃から見ていたからね。もう娘みたいなものなんだ。」

だから、雫を傷つけないっていう君の気持ちはよく分かるよ」
「社長……」

「ただ、一つ文句を言うならばもっと早く言ってほしかったな」
「すいません」

「うん。次からは言ってね」

「はい」

「社長、雫。もう時間です」

「じゃあ、雫行こうか」

「はい」

社長と雫が会見場に向かう。

聖慈と朝倉は控え室で二人の様子を見ている。

社長と雫が会見場に入ると一斉にフラッシュが光る。

そして、雫の会見が始まった。

「この間報道されたことについてですが事実です。現在一緒に暮らしている兄とは血のつながりはありません。そして、現在その男性とお付き合いをしています」

「では、義理の兄と交際関係にあるということですか？」

「いえ、もう義理の兄ではないんです」

「どういうことですか？」

「実は両親がすでに兄を戸籍から抜いてくれていたんです。ですから、私と兄はすでに一人の男と女だということです」

「ですが、元々は兄と妹ですよ？」

「はい。その事実は消えることはありません」

「社長さんはそのことについてどう思いますか？」

「特に何も思いません」

「何故ですか？元々兄妹の二人が交際してるのですよ？」

「だからどうだと言うんですか？誰かを好きになるのにそんなこと

を気にしていたら何もできないと思います。雫は彼を兄だから好きになったわけではありません。彼も同じように妹だから好きになったわけではありません。ですから私は彼らを応援して行きたいと思っています」

「私達は世間の皆様から何と言われても交際を続けていくつもりです。ファンの皆様には申し訳ありませんが私の気持ちを伝えたいので会見を開かせてもらいました」

そういつて雫と社長は会見場から控え室に戻ってきた。

雫は聖慈の姿を見ると胸に飛び込んだ。

聖慈も雫を優しく抱きしめた。

「雫、よく頑張った」

「うん」

「社長さんありがとうございます」

「いや、大変なのはこれからだよ」

「ええ。ですが覚悟の上で会見を開いてもらったんです。社長さんのほうこそ大丈夫ですか？」

「なんとかなるさ。さ、朝倉。私達は事務所に戻ろう」

「分かりました。聖慈君。裏口に車を用意してるからそれを使って」
「ありがとうございます」

聖慈達は朝倉が用意してくれた車に乗り込んだ。

その車で聖慈のマンションに着いて部屋に入ると優慈達が出迎えてくれた。

それから夕食を食べ少し話をして皆帰り、聖慈と雫二人つきりになった。

聖慈は雫の隣に座り肩を抱き寄せた。

「雫、今日は大変だったな」

「うん。でもやっぱりちょっと疲れたかも」

「時差ボケもあるから今日は早めに寝ようか？」

「うん、そうだね。明日も何かあるかもしれないし」

そうして、聖慈は自分の部屋に向かおうとしたが何かに引っ張られた。

そっちのほうを向くと雫が聖慈の服を掴んでいた。

「雫？どうした？」

「えっと…一緒に寝ちゃ駄目？」

「え！？いや、まだ早いんじゃない？」

その聖慈の言葉に雫は慌てて自分の言葉の意図を伝えた。

「違うの！そうじゃなくて…」

「そうじゃない？」

「深い意味じゃなくてただ一緒に寝たいの」

「つまり昔みたいに抱きしめて寝たいと？」

「うん。日本に帰ったことを実感したいの」

聖慈は困惑した。

これはある意味生き地獄だ。

だが、雫は上目遣いに聖慈を見てくる。

この目に弱い聖慈はOKを出すしかなかった。

そして、聖慈が先に布団に入り後から雫が聖慈の胸に顔をつけるように入ってきた。

聖慈は平常心を保とうと必死だが、雫は嬉しそうにしている。

聖慈が平常心を保ちながら雫の頭を撫でていると雫はいつの間に眠りに就いていた。

雫の頭に口付けを落とし、聖慈も眠りに就いた。

第三十三話 妹の記者会見（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
|s|sky

第三十四話 妹のファン

次の日、雫の記者会見のニュースが放送された。そのニュースに関するコメンテータの意見は2通りだった。

『兄妹の交際など認めるわけがない』

という意見。そして、もう一つは

『隠さずに伝えたこと。これはすばらしい。応援したい』

という意見。

聖慈と雫もこのニュースを見て心強かった。

まさか、自分達のことを応援してくれる人がいるとは思っていなかったのだ。

もつとたくさんの人に認めてもらうには簡単なことではないだろう。

だから、二人は今できることをしようと決めた。

聖慈は仕事へ、雫は学校へ行った。

聖慈は仕事で今までの失敗を取り戻すようにいつも以上に働いた。

雫も学校でいろんな生徒から白い目で見られたが優奈、夏美が雫にいつもどおり接し、雫もいつもと変わらない笑顔を見せた。最初は白い目で見えていた生徒だが、その日が終わる頃には前と一緒のように雫に接していた。

そんな生活が一週間続いた。

雫はやはり芸能生活は続けるのが難しくなった。

一度マイナスのイメージがついた女優が仕事をするには芸能界は厳しすぎた。

だから、雫は社長や朝倉と相談してサイン会を開くことにした。
そこでノルマを決めて、それを越せば芸能生活が続け、越せないなら芸能界を引退することにした。

そして、サイン会当日が訪れた。

その日は休日なので聖慈、優慈、優奈、彰人、大竹家族と勢ぞろいしてそのサイン会を見守ることにした。

会場の中に何人かいるかは皆まだ知らない。

雫がドアを開けた。

そこには、今まで以上のファンが詰め寄っていた。

ファンは雫を応援してくれていた。

『雫ちゃん〜、頑張っ〜！！』

『雫ちゃん、応援してるよ〜！』

雫はファンの声援に涙を流した。

聖慈は雫のそばに走り寄り、雫を抱きしめた。

聖慈へのファンの声援が聞こえる。

『雫ちゃんを大切にしろよ〜！！』

『雫ちゃんを泣かしたら殺すぞ〜！』

聖慈はマイクを手に取り、雫のファンに向けてしゃべった。

「もちろん雫を大切にする！泣かせたりもしない！だから俺達のことをこれからも応援してくれ！」

雫も聖慈からマイクを受け取り、ファンに向けてしゃべる。

「私のわがままでこんなことになってごめんなさい。でも、私はお

…聖慈さんと一緒に生きていきたいんです！ですから私達を見守ってください！」

雫の言葉にファンが答える。

『もちろんだ！！』

そして、サイン会が開始された。

雫がサインをしている横で聖慈は立ってファンに一言二言話しかけている。

中には聖慈を殴ったり、肩を組んだりしてくるファンもいた。

サイン会が終了した後もファンの交流が終わることがなかった。

優慈も加わり、今まで優慈と雫が兄妹ということは公表されなかったが、いい機会だからとこの場で公表した。

この事実もまたファンは驚いていたがすぐに受け入れてくれた。

予定された時間を過ぎてもファンは帰らずに聖慈と雫を応援してくれた。

第三十四話 妹のファン（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/in|th
|s|s|ky

第三十五話 兄妹から恋人、そして…

それから2年後。

ある場所に聖慈はいた。

聖慈はタキシード姿で椅子に座り、その周りには優慈、章吾、大竹、彰人がいた。

「聖慈、緊張してるんじゃないか？」

「緊張？そりゃあ少しはするよ」

「それよりも結構早かったな」

「何が？」

「この日が来るのがさ。もう少しかかるかと思ったんだが」

「これでも我慢した方だよ。なんとか雫が20になるまでとは思ってたからね」

「それにしてもこれで本当に聖慈と優慈、それに伊集院は本当の兄妹になるんだな」

「そつか。今考えたら兄貴は俺の弟になるのか…」

「これからよろしくな、優慈お兄ちゃん」

「それだけはやめてくれ…。寒気がする…」

そんな二人のやりとりに章吾と大竹と彰人は笑った。

つられて聖慈と優慈も笑った。

5人の笑い声が響くドアから真美、優奈、智子、陸が入ってきた。

「あら、楽しそうね」

「まあな。どうだった、雫は？」

「内緒よ。ね、優奈ちゃん」

「そうですね。多分聖慈さん、我慢できなくてその場で襲っちゃう

んじゃないですか？」

「なんとか我慢するよ……」

それから今度は章吾と優慈が雫の控え室に向かっていった。

聖慈は真美や優奈にからかわれている。

係りの人が時間を伝えにきた。

聖慈はたくさんの方がまつ教会で自分の大切な人が入ってくるのを待っていた。

その間今までのことを思い出していた。

兄妹として育った二人。

そこからたくさんの方の助けを借りて恋人同士となった二人。
ファンに見守られ今日の日を迎えられた。

聖慈が思い出していると教会のドアが開いた。

そこには章吾とウェディングドレス姿の雫が立っていた。

二人は兄妹から恋人へ、そして今日夫婦となった。

第三十五話 兄妹から恋人、そして…（後書き）

あとがきはY A H O O ! b l o gで書いております
興味があればお越しください

U R L

h t t p : / / b l o g s . y a h o o . c o . j p / i n | t h
i s | s k y

後書き

これで本編は終了です

ここまで読んで頂いてありがとうございます

これが私の小説処女作になります

構成がめちゃくちゃなので読みにくかったと思いますがここまでお付き合いいただけてありがとうございます

セリフが多すぎて読みにくかった話もあつたと思います

これから番外編としてバレンタイン企画などのSSをこの二人を中心に書いて行きたいと思ってます

そちらのほうもお付き合いしていただけるとありがたいと思います
番外編はネタが出来次第更新していききたいと思います

余裕があればスピンオフも書いていければ良いなと思いますが…

カップリングは優慈×優奈、大竹×智子、彰人×春美(?)とありますが馴れ初めなどは考えたことはないのでどうしようかと思っています

違う話も更新していきたいと考えています

こちらは高校生×高校生で書いて行きたいと思っています

が、もうすぐで社会人になるのもしかしたら途中で終わってしまう可能性もあります…

それでもよかったら読んでください

構成としては今回みたいにならずと続くのではなく出会いを書いて後

は短編で書いていつて最後に恋人にして終了にしようかと考えています

こちらは3月ぐらいから投稿していきたいと思います 未定ですの
であまり期待しないでくださいね

そちらでも、できれば聖慈と雫を出して行きたいと思っています
たとえば雫と同じ高校とか、そういう設定にすれば不可能ではない
ので、よければ楽しみにしててください

それではお付き合いありがとうございました
恐らくまた2月14日に投稿すると思いますのでよろしくおねがい
します

バレンタイン企画 08

今日はバレンタインである。

聖慈が食堂で雫の手作りの弁当を食べていると彰人が近づいてきた。

「よお、伊集院」

「うつす」

そして聖慈の横に座り聖慈が食べている弁当を見る。

野菜と肉がバランスよく入っており、彩りも鮮やかな弁当だ。

「相変わらず雫ちゃんの弁当はおいしそうだな」

「『おいしそう』じゃなくて『おいしい』んだ」

「はいはい、ごちそうさま」

彰人は聖慈の言葉に笑いながら言った。

聖慈も彰人に釣られて笑った。

彰人は聖慈に気になることを聞いてみた。

「お前いくつもらった？」

「何を？」

「え？お前今日何の日か分かってねえの？」

「今日？」

聖慈は今日が何日か考えた。

今日は確か二月の十四日。

「そついや、今日はバレンタインだっけ…」

「お前にチョコ持って行った女子社員いたんじゃないか？」

「ああ、来たな。けど、バレンタインって知らなかったから『知らない』って言って返した」

「うわ！？お前最悪だな」

「うるせえ。知らなかったんだからしょうがねえだろ。まあ、でも知ってても『知らない』って言って返したと思うけど」

「なんで？」

聖慈は彰人にその理由を話し始めた。

聖慈が大学生のとき、雫が中学生の時のことだ。

聖慈は大学でバレンタインのチョココレートを食べきれないほどもらったことがあった。

そのチョココレートを聖慈は実家に持って帰った。

聖慈が家の玄関を開けたら雫が走ってきた。

家に帰ることをあらかじめ電話していたから待っていたのだろう。

「お兄ちゃん。おかえり」

「ただいま。雫、これやるよ」

「何これ？」

雫が聖慈から手渡された袋を開けるとそこに入っていたのはもちろん大学でもらったチョココレート。

雫は甘いものが好きだから喜ぶだろうと思っていた聖慈だが雫の顔は見る見るうちに暗くなっていた。

「雫？どうした？」

「え？うつん、ありがとう」

雫は袋を持って自分の部屋に戻っていった。

聖慈はその後姿を首を傾げながらリビングに入った。

そこには章吾と真美がお茶を飲んでいた。

「親父、仕事は？」

「ん？休んだ」

「いいのかよ。そんなホイホイ休んで…」

「馬鹿言え。俺は重役だぞ」

「だったらなおさらなんじゃねえの…」

聖慈は章吾と話しながらリビングのソファに座る。

真美はお茶を入れて聖慈の前に置く。

聖慈は「ありがと」とお礼を言って口に含む。

「そういえば聖慈、雫は？」

「ああ、自分の部屋なんじゃない」

「雫からもらった？」

「へ？何を？」

聖慈の言葉に親二人は顔を見合わせた。

「あんた雫に何かした？」

「別に」

「ホントか？」

「だから別に何もしてないって。むしろ喜ばれると思っただけだな」

「何で喜ぶの？」

「大学でもらったチョコあげたんだよ」

「原因はそれだ……！」

聖慈の言葉に両親は声を揃えて叫ぶ。
その両親の様子に聖慈は驚いた。

「急にどうした？」

「あんた雫にチョコあげたの？」

「ああ、食いきれないし雫は甘いもの好きだろ？」

「聖慈、お前は本当にどうしようもないやつだな……」

「はあ！？」

「雫に謝ってきなさい！」

「何でだよ！」

「いいから！謝るまでこの家に今後一切あげないわよ！」

「はあ！？」

「いいから早く行く！」

真美の言動に意味が分からない。

だが、真美の顔を見るとマジだ……

章吾の顔もマジだ……

聖慈は意味が分からないがとりあえず雫に謝りに雫の部屋に向かうとした。

リビングを出ようとしたとき、真美が一言聖慈に声をかける。

「あんた雫の部屋に行く前に台所に行きなさい」

「は？何で？」

聖慈は台所に行かせる真美に聞きなおしたが真美は何も言わない。とりあえず聖慈は台所に向かう。

台所からは甘い匂いが漂っている。

聖慈は台所を歩いて回る。

流しにおいてあるボウルから甘い匂いがする。

ゴミ箱にはチョコのゴミがある。

「まさか……」

聖慈はダッシュで雫の部屋に向かう。

その足音を聞いて章吾と真美はため息をついた。

聖慈が雫の部屋を開けると雫はベッドに横になっていた。

急にドアが開いたので雫は驚いたが開けたのが聖慈だったのでさらに驚いている。

「ちょっとお兄ちゃん。ノックぐらいしてよ」

「雫」

「何？」

「チヨコ頂戴」

聖慈がいきなり部屋に入ってきていきなりチヨコをくれと言いだした。

雫は意味が分からない。

とりあえず雫は聖慈からもらった紙袋を渡した。

「はい、ひとつもまだ食べて無いよ」

「これはいらないの」

「え？だって今チヨコ頂戴って……」

「まだあるだろ？雫のところには？」

「……ないよ」

「ふうん」

聖慈はそれが嘘だと気づいた。

えらい意地固になってるな……

さて、どう攻めるか。

聖慈が雫の部屋を見渡すと机の上に何か乗っている。

あのサイズは……

聖慈はニヤリと笑い雫の机に近づいていく。

雫はそれに気づかない。

そして、聖慈は雫の机の上のものを手に取り雫を呼ぶ。

「なあ、雫」

「…何？」

雫はまだそっぽを向いている。

「これなぐんだ」

「え？」

雫は聖慈の方を向く。

そして、聖慈の手の中にある箱を見て驚いた。

「返して！」

「これ何か教えてくれたら返すよ」

「…チョコ」

「え？何だって？」

聖慈はニヤニヤしながらもう一度聞きなおす。

「チョコだつてば！」

「やつぱりチョコあるんじゃないか」

「これは他の人にあげるの！」

「…それって男か？」

「いいじゃない！お兄ちゃんにはあんなに一杯チョコあるんだから」

「あれよりもこっちのほうが俺は欲しい」

「あれをあげた人たちがかわいそうだよ」

雫の気持ちも分かるが、聖慈は何故だか分からないがこのチョコを

雫が他の誰かに渡すのが不愉快に感じた。
どうにか雫からチョコをもらいたい。

聖慈は今その気持ちで思考を開始した。
一つの考えが浮かんだ。

「分かった。来年からは一個ももらわない」

「え？何でそんなことになるの？」

「だって、もらってもかわいそうだろ？俺には気持ちないんだし」

「まあ、そりゃそうだけど」

「だから、来年から俺にちゃんとくれよ。一個もないとか嫌だから」

なんでそういうことになるんだろう…

雫は意味が分からない。

が、聖慈は笑顔で雫に微笑みかけている。

その顔を見たら何も言えない雫だ。

雫は自分の手の中にあるチョコを見た。

「…はい」

「え？いいのか？」

「いいの！」

「マジ！？サンキュウ」

聖慈はさらに笑顔になった。

雫もその笑顔を見て笑った。

彰人は聖慈の話を聞いて呆然としている。
が、聖慈は昔に浸っているのか気づかない。

「あれから雫にチョコもらうために他の人からはチョコもらわなく

なっ たんだ」

聖慈は彰人のほうを向いてやっと彰人が呆然としているのに気づいた。

「彰人、どうした？」

「お前本当に鈍感なんだな……」

「え？何が？」

「お前そのときから雫ちゃんのことを好きなんだよ」

「はあ？それはないだろ。だってあの時雫は中学生だぞ」

「じゃあ、何でお前は雫ちゃんが他の人にチヨコを渡すって言ったとき不愉快に感じたんだ？」

「え？それは……なんでだろ」

彰人はその聖慈の言葉にため息をついた。

聖慈はムツとした。

「じゃあ、お前は分かるっていつのか！」

「嫉妬に決まってるだろう」

「は？嫉妬？」

「そ。お前は雫ちゃんがチヨコをあげるって言った男に嫉妬したの？
「そうなのか？」

「と俺は思っけどね。ところで今日ももらっのか？」

「え？さあ、どうだろ？」

「『どうだろ？』とか言いながら顔は自信満々だぞ」

「だって恋人だし。そういうお前はどうかんだ？」

「ど、どうでもいいだろ！じゃあな！」

今度は聖慈が彰人に詰め寄ったが彰人は逃げ出した。
聖慈はその後姿を笑いながら見送った。

そうか、今日はバレンタインだ。

毎年雫からもらってるから今年ももらえるだろう。

聖慈はやる気が出た。

さっさと仕事を終わらせて家でゆっくりしよう。

聖慈が仕事を始めるために自分の机に行くと隣の奴が雑誌を見ていた。

その雑誌の特集を見て聖慈はあることを決めた。

その特集とは…

雫は学校が終わるとすぐに家に帰った。

昨日は聖慈がいたのでチヨコを作ることができなかったのだ。

優奈がチヨコを優慈に渡したいから作り方を教えてくれと言ってきたので一緒に作ることにした。

優奈と雫は手を動かしながら話をしている。

時々雫が優奈にアドバイスをしているが二人とも楽しそうだ。

「ねえ、雫？」

「ん、何？」

「去年も一昨年も聖慈さんに送ってたんでしょ？」

「うん」

「いつからあげてるの？」

「え、と、私が中学生のときからかな」

「それって義理で？」

「ううん、本命だよ。お、じゃなくて聖慈さん以外には今まであげてないもん。義理は優慈兄ちゃんとお父さんにあげてるけど」

雫は聖慈と付き合うようになって『お兄ちゃん』から『聖慈さん』

と呼ぶようにしている。
まだ慣れていないようだ。

「へえ、じゃあそのときから聖慈さんのことを？」

「うん。もうそのときには聖慈さんのこと知ってたから。聖慈さんはそれが本命とは知らなかったと思うけど」

「聖慈さん鈍感だもんね…」

「うん…」

「でも、恋人同士になったんだしねえ？」

「うん、多分聖慈さん今日がバレンタインってこと自体忘れてる気がするんだよね」

「さすがにそれはないんじゃない？」

「去年だったかな、朝に渡したら忘れてたもん」

「…鈍感だね」

「…鈍感だよ」

それから作業に戻って夕方にはチョコレートも完成した。
優奈はこれから優慈とデートで着替えに帰っていった。
雫は夕食の仕度を始めた。

もうすぐ夕食が完成するといつときに聖慈は帰ってきた。

「ただいま」

「あ、おかえりなさい」

「晩飯できてる？」

「もう少しだよ」

「腹減ってるから早くしてくれ」

「はいはい」

聖慈は着替えに自分の部屋に入っていた。

雫は夕食の仕度を続けた。

いつチヨコ渡そう…

雫がそのタイミングを考えていると部屋着に着替え終わった聖慈が雫に話しかけてきた。

「雫？」

「え？何？」

「いや、何かボーとしてたけど大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫だよ。ご飯出来たから悪いけどお皿準備してくれる？」

「ああ、分かった」

聖慈は食器棚から必要な皿を取り出して雫に渡した。
渡されたお皿に料理を盛り付けテーブルに置いた。

「さ、食べるか」

「うん」

「「いただきます！」」

二人は今日あったことをいつもと一緒にのように話しながら食事を終えた。

雫は洗い物をして、聖慈はその横で雫が洗ったお皿を拭いている。

洗い物を終え、聖慈は風呂に入った。

雫は冷蔵庫に冷やしてあるチヨコを取り出し聖慈が風呂から上がったくるのを待った。

風呂場から物音がする。

聖慈が風呂から上がってきたようだ。

風呂から上がった聖慈は冷蔵庫に近づき牛乳をコップに入れ飲み干した。

牛乳を直した聖慈に雫が話しかける。

「お、聖慈さん」

「ん、どうした？」

「えっと…これ」

「雫。これは何かな？」

聖慈はもちろんこれが何だか分かっているが雫にその名称を答えさせたいようだ。

意地悪な笑みを浮かべて雫に問いかけている。

「聖慈さん、最近意地悪になってきてない…？」

「そんなことない、そんなことない」

「CMで言ってるじゃない。人間本当のことは一回しか言わないって…」

「そんなの嘘だよ。それよりもこれは何かな？」

「チヨコ…」

「ん？」

「チヨコだつてば！今日はバレンタインだから！」

「ん、ありがとな」

聖慈は笑みを浮かべて雫の頭を撫でる。

雫は不機嫌に聖慈のなすがままになっている。

だが、心地いいのか段々笑顔になってきた。

聖慈は雫の頭を撫でるのをやめ、自分の部屋に戻りカバンからあるものを取り出し雫の元に戻っていった。

「じゃあ、これは俺から」

そういつて聖慈は雫の目の前に小さいラッピングされた箱を出した。雫は聖慈の顔をうかがいながらそれを受け取った。

「聖慈さん、これは？」

「ん？俺からのプレゼント」

「え？どうして？」

「いいから開けてみな」

聖慈に言われた雫はプレゼントを開けてみる。

その中にはネックレスが入っていた。

雫は驚いて聖慈の顔を見る。

聖慈は照れながら事情を説明する。

「今日隣の奴が見てた雑誌に載ってたんだ。外国では男性からも女性にプレゼントを贈るって。付き合いだして雫にプレゼントしたのと無いし、いつも雫には助けられてるからお礼も兼ねてプレゼント」

「で、でも…」

「でも、とかはいらない。俺が欲しいの一言だけ」

雫は笑顔で聖慈の胸に飛び込む。

「ありがと！お兄ちゃん！」

「うん。その顔が見ただけで十分！ただ、俺の呼び方は『お兄ちゃん』じゃなくて『聖慈さん』だろ？」

「あ、まだ慣れなくて…」

「早く慣れてくれな」

そっいつて聖慈は雫に顔を近づける。

雫も目を閉じて聖慈のほうを向く。

そして、お互いの唇を重ねた。

バレンタイン企画'08（後書き）

あとがきはYAHOO!blogで書いております
興味があればお越しください

URL

http://blogs.yahoo.co.jp/into_hisky

リクエストなどありましたらブログのほうかメッセージをいただけます
けましたら私の文書でよければ書かせていただきます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5468d/>

家族or兄妹orカップル？

2010年10月9日07時41分発行